

特 116

367

臨濟錄贅辯



始



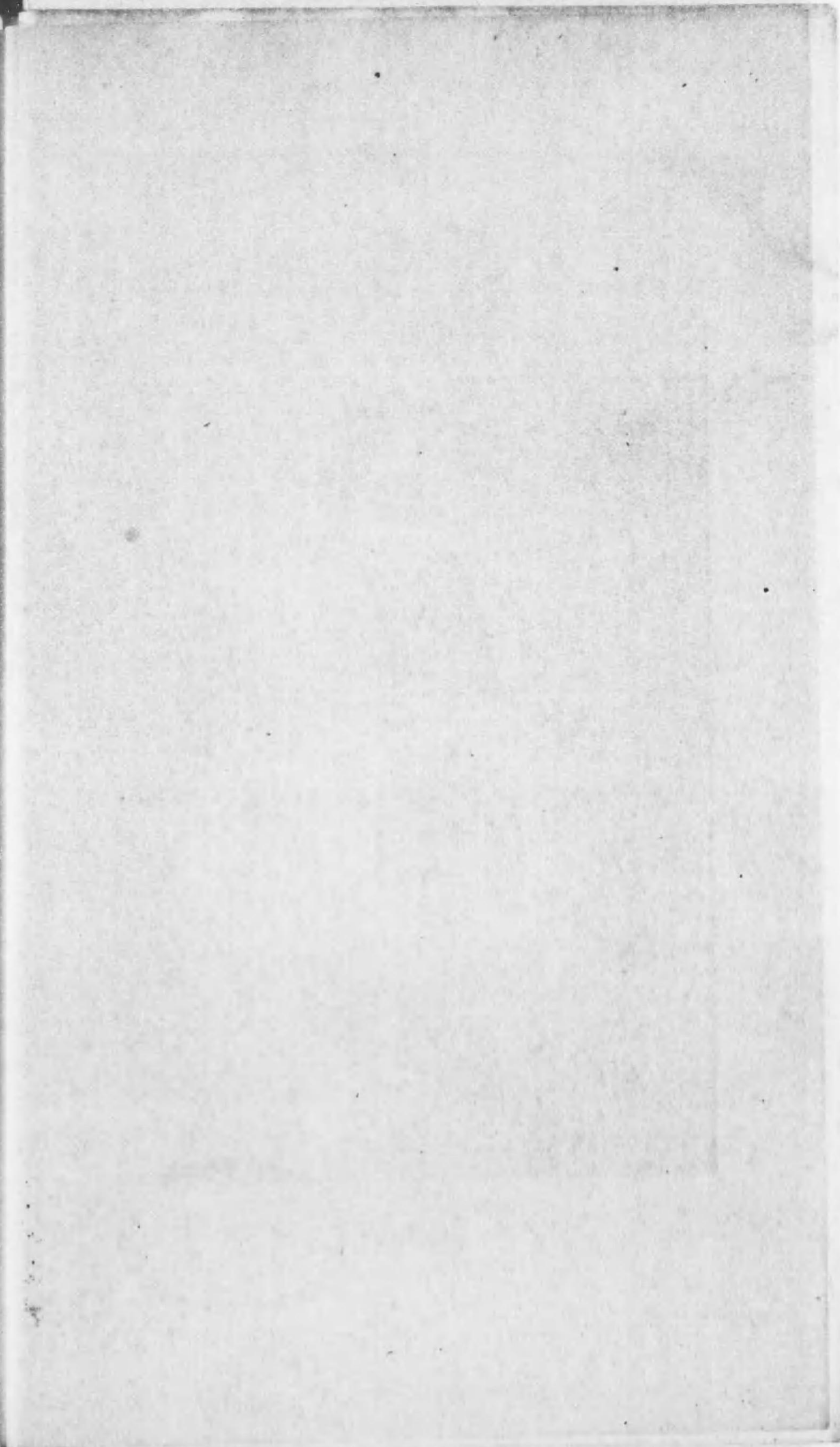
子116
367



臨
濟
錄
贅
辯

全

大正
14. 6. 13
內交



蘭坐老山古佛心



大正十四乙丑歲一月

玄機



例言

岡田老居士諱は乾兒、自適と號す、後玄機と改む、禪客道友の間、自適を以て知られ、玄機の號を知らざる者多し、依て本書は岡田乾兒遺著とせり、書名臨濟錄贅辯は老居士生前の自撰にかゝる、此書元好事の関作にあらず、緒言に述ぶる如く、死急に臨みて、有縁の晚機後學に所見を告げんが爲めに執筆し、道友に逝後の處置を托したるものにて世に刊行して頒布するは蓋し其の志に非ず、然れども逝後有縁求道の學人にして、これを望むこと切なる者多し、因て茲に道友相謀り、原稿の校正は倉林蠻山居士と不肖長風之に膺り、筆寫に平井成氏、印刷に大原勘次郎氏關與し、修飾を省き原存を旨とし非賣品として急遽上梓したり。

本書原稿は不起の大患、疼痛不斷の病床上、三句餘の短日子を以て完了せしものにして、半は鉛筆、半は泉筆の走書なり、群書の涉獵は固とより、練句推敲の逸だに有らず、其の修辭の迹なき、簡潔にして道勁、質實にして直截なる、老居士獨特の筆鋒、赤洒々、露堂々の面目躍如たるを見る、されば我等は故人の心血を敬重すると同時に、好肉上に瘡を剜るの罪過を怖れ、唯僅かに字句の誤脱を訂したると、片假名交りの原文を読み易からしめんが爲に平假名に組み換へたる外、一字の添削、一句の改竄を加へず、悉く原稿のまゝを採つて印行に附せり。

老居士平生萬縁の應接繁多の中、常に經卷祖錄の閲讀を廢せず、就中臨濟錄の造詣最も深く、時に後

學の爲めに提唱す、我等屢々講席に在り、聽く所、言尙は耳にあり、縱横無礙の辯、徹骨徹髓、臨濟大師の王三昧を打發し、萬古の鐵橛子を細嚼咬破し、聞く者をして思はず寒毛卓豎せしめたり、本書の内容は即ち老居士多年得力の眼睛を傾倒し盡したるものにして、世間通有の知解義釋の類と全く撰を異にす、故に初機後學は暫く措き、久しく禪林に出入して佛見法見に飽滿し、而して未だ眞個徹底の眼を缺く、常套相似の禪徒を救ふ至極の妙藥たるべし。

老居士客歲九月四大の不調を自覺し、不起の難病なるを感知するや、専門の醫匠に就き病名食道癌の確定を得て後、恰も遺失物を見出して安んじたるが如く、平然として動容なし、却て其の勤行は平昔に倍加し、醫務に家事に道契に社交に、一として缺くる所あらず、病勢進んで舊臘晦日再び立つ能はざるに到り、已むなく病床の人となるや、茲に始めて本書の草稿に着手せり、此の間多數の訪客を悉く病室に接見し、眞俗の話頭、老婆徹悟を極むる處ろ、宛として惟摩病中の勝鬪を目前に髣髴するが如く、全く重病の身に在るを忘るゝに似たり、これが爲め日夕餘閑なく、加之患部の疼痛寸時も熄まず、強て注射藥の力を借りて、専ら夜半に執筆、一月下旬に及んで稿を了れり、老居士が法眼の卓越せる境地の穩密なるは云ふも更なり、其道力の堅固にして涙血の豐饒なるは、此の死急の行履に於て一段の風光を添へ得たり、坐脱、立亡、自焚、活埋等の古徳の先蹤に比し、孤危立せずして自ら道の高きを見るべし、故に本書は老居士が献身の碧血、痛腸の紅涙にして實に末後の最大慈訓、無二の悲説なり。

老居士の病むや、醫方の精しきに拘らず、自ら養病の方術を圖らず、凡て嗣子不葢太郎氏の所請指揮に一任す、二月七日濟生會病院に入院し、茂木博士執刀の下に、造胃瘻の手術を受け、造口より養液を注ぎて暫時小康を得たるも、幾許もなく頻々たる出血と連續の吃逆を起し、爾後日夜萬難重襲の苦境に在て、受用穩當只有るべき様に消業し、三月十日朝來昵近の甲乙と閑話を交へ、夜八時卒然として逝く、遺言あり、遺骸は解剖に附し、醫事に貢獻せよと、又他事を言はず、畢生莫妄想、萬里一條鐵、茲に蓋棺事定る矣。

大正十四年五月十四日 辱交 中館長風記

緒言

某甲無學にして筆執る事を知らず、依て筆執りし事殆どなし、然るに這般急に臨濟錄に就て何か記述したき、希望起りて抑止する能はず、其故は某甲曾て禪に參し、座禪入室の餘力を以て多少祖錄も讀みたり、又恩師の手に緣りて好き抄をも讀む事を得しが、就中臨濟錄を愛讀せり、此語錄たるや、一本調子にして齒に絹被せたる所なく、只管學人をして悟入せしめねば止まざる氣勢横溢し、且つ錄中師弟の情味、道友の信義の音ならざる者あり、其至誠眞實の溢るる所に讀み至れば、不覺涙を催す也、古來臨濟錄は此宗に於ける無上の語錄と稱せらるゝも、其躰白露淨なる所を初學者が若し聽き損ふ事あれば、卻て道に信を

失する虞ありて、容易に讀ましめず、又た師の提唱に於ても可成簡單に、重味を着けるを旨とし、餘り巨細に涉らぬを是とするが如し、然るを今日後進未熟の某甲が、本録の解釋に着手するは、潜上の業なり、嘯咄すら尙ほ遠慮すべき所ならん、某甲年老ひ殊に近頃不治の病に罹り、前途の太た乏きを自覺し、徳を傷くる事と知り乍ら己れの好む所を同好に頒んと欲し、此の小著を企つ、初機後學の人の爲に萬一參考の資と成らば某甲の甚た忻ぶ所なり、江湖有識の士、牽かれ者の小唄と嘲笑する事なくんば好し。

大正十四年一月三十日

東京神田區小川町大震火後の假家病床に於て

岡田乾兒識

臨濟錄贅辯

岡田乾兒遺著

○鎮州臨濟慧照禪師語錄

(辨) 臨濟なる名の出故、本錄著者の官名等は註疏等の所説に譲りて此所に記せず、病中の所作故に脱稿を急げば也。

○府主王常侍與諸官請師陞座師上堂云、山僧今日事不獲已曲順人情方登此座、若約祖宗門下稱揚大事、直是開口不得無爾措足所。

(辨) 府主とは府知事、王常侍は其名也、此人一日屬僚と共に臨濟大師の説法を請ふた、師は高座に陞りて云く、山僧が即今陞座せしは決して自發的ではない今日事の上じや、云は、浮世の義理で辭するに辭し難く、曲順人情陞座せしなり、云は、府主等の懇請に背かぬ迄じや、若約祖宗門下稱揚大事、直是開口不得無爾措足所とは約とは契約の約にて毫も間違なきの意也、今吾祖宗門下の宗旨に間違なく、生死の一大事、見性大悟の一大事を説かんに、何の口を開くべき様も、足を措く所もない、大事と殊更に断はるは、此一事、實に得る事難き故なり、一度迷路に入らば便ち跛鼈盲龜の空谷に入るが如く、出離の時を期し難ければ也、扱此大事は古今東西遠近を問はず、何所にも充實し

て間隙なし、今開かんとする口も、措かんとする足も悉く是れ大事ならざるはない、今假りに大事を改稱して火と云は、只是一面の火なり、何と説くべき餘地あらんや。

○山僧此日以常侍堅請那隱綱宗還有作家戰將直下展陣開旗麼對衆證據看

(辨) 臨濟は劈頭に一句の着くべきなしと根本的に断はつた、併し全然無言では教化が行はれぬから無_レ已第二義に落ちて方便作略を敢てする也。

山僧は今日府主殿の懇篤なる招待を受けし上、決して綱宗を隠さぬ、扱、綱宗の綱は網の大綱じや、即ち宗旨の大綱は明了に示すべし、網に於て大綱は最も大切也、此一條さへ放たねば、網全體の操縦が契ふ如く、宗旨下に於ても根源さへ確かと會すれば、枝葉は從て氷解する者也、さあ此座には、定めて作家の戰將即ち戰巧者の大將もござろう、直下、即ち今直ぐ、陣を整へ旗を押し立て來りて、鋭き手際を衆人の前に證據して見よと戰ひを挑んだ。

○僧問如何是佛法大意

(辨) そら出た、臨濟の物凄い挑戰に應じて直下に突出したは容易の漢ではない、必ず作家の戰將ならん、其問話は佛法の大意にて極めて有觸れたる問話也、茲が此僧の腕力にて句中に機を藏して來りしならん。

○師便喝

(辨) 師は果して喝した、此僧の來機に對して喝した、臨濟の一喝に逢ふては骨身も碎くるぞ、又た一面には汝が所問の佛法の大意は即ちこれぞ、篤と此音聲何物ぞと參究せよとの意である
茲で一寸照用權實の四用を説かん、照とは觀察なり、用とは實用應用なり、權とは機關差別なり、實とは本體平等也、今ま師の一喝には權實の二機を含む、便ち僧の鋭き來機に應じて、はたと喝したは權なり、此音聲即ち佛性也と抛出したは實なり。

○僧禮拜

(辨) 此僧は有眼にして伶俐なる故に、直ちに師の答話の意子を會して、扱こそ禮拜した。

○師云這箇師僧却堪持論

(辨) 這箇師僧即ち此坊主中々咄なせる奴じやと師は賞せられた。

○問師唱誰家曲宗風嗣阿誰

(辨) 此問話中々者じや、句中に機を含むなり、誰か家の曲とか、誰の宗風とか云ふは、祖宗門下の沙汰ではない、殊に師は黃檗の法嗣なる事を知らぬ筈がない、夫れを敢て顔を犯して進むとは横着者ぞ。

○師云我在黃檗處三度發問三度被打

(辨) 此僧如何に句中を構へても其手に乗る臨濟ならんや、只だ有様にすらりと答へられたは、夙に僧の來機を見て取られたる也。

○僧擬議

(辨) 此僧も亦た一筋の者ではない、師の越格の答話に對して最早猪進はせぬ、却て議擬した、便ち口籠つたなり、擬議した所は寧ろ許すべきぞ。

○師便喝隨後打云不可向虛空裏釘敲去也

(辨) 此僧が輕々しく師を試んとしたは恰も虛空に概を打たんとするが如きじやと喝と棒を與へられた、無論罰棒なれども恐くは機の銳きは多少許るされて其輕進を痛く戒められた者ならん。

○有座主問三乘十二分教豈不是明佛性

(辨) 此問答は教家との問答じや、便ち教相萬能を固執する天台の座主が出て、師に對して三乘十二分教即ち釋迦所説の一切の經文は明かに佛性を説かれた者じや、此外に直指の道など云沙汰は要ならんと道ふた。

○師云荒草不曾鋤

(辨) 教家等が經文の稱名言句を詮とすれども、曾て眞眼を得ず、只管佛の語のみを弄して佛心に通せず、何時も荒草の鋤かざるが如く、茫々たる知解を蓄ふる處を指摘せられた。

○主云佛豈賺人也

(辨) 座主は憐むべし、師が座主の心事を指摘されたるに氣附かず佛が人を賺かすやうな事はない、佛所説の經文は悉く佛性の理なりと固執して動かぬ、蟹は甲羅に似せた穴を掘るなり。

○師云佛在什麼處

(辨) 師は座主の固執する所を見て、然らば佛と云ふ者は什麼にありや、猥りに佛と唱るが、畢竟何の様な者じやと強く打ち込まれた。

○主無語

(辨) 曾て眞の佛を知らぬ座主、何と答ふべき様もない、まさか天竺淨飯王の一子悉多太子云々と説起す譯にも行かず、無已無語した。

○師云對常侍前擬瞞老僧速退々々妨他別人請問

(辨) 即今府主始め屬僚の前で如上の愚論を試るは見苦るし、果して老僧を瞞するか、他の參禪の妨げとも成れば、速退々々即ち退け々々と命せられた、實に凜々たる威風なり。王常侍は師の會下に於ける有力の居士なり、後に説くべし。

○復云此日法筵爲一大事因緣故更有問話者麼速致問來爾纔開口早勿交涉也

(辨) 今日は一大事の法筵じや程に、問話の者は速かに來れ、左はさりながら、一言口を開けば早く勿交涉ぞ、佛は元來言詮不及、意路不到の者なればなり。

○以何如此不見釋尊云法離文字不屬因不在緣故

(辨) 右は維摩經の語なりと聞く、師且く此語を引用して説かるゝなり、凡そ物には相あり名あり、名あり相ある者は悉く因ありて生じ、緣ありて成熟するなり、緣とは助因なり、例之は種子は因なり

今麥の種子を地に下だすとせんに、土壤は種子の成育を助くる縁なり、加ふるに温度、水分、肥料等皆な縁なり助因なり、如此因縁の和合して、物の成熟する也、然るに惟り佛性は縁にもあらず因にも屬せぬと云ふ、成程よ、揖讓、進退、執提、運奔、痾屎、送尿、着衣、喫飯、言語、動作、皆是れ佛性の妙用ならぬはない、此妙用を何と名くべきぞ、何の様な形相ぞ、是れ因か、是れ縁か、と考ふる手間、暇はない、只だ自在に變幻百出して止む時なし。

○爲_レ爾_レ信不及_レ所以_レ今日_レ葛藤_レ恐_レ滯_レ常_レ侍_レ與_レ佗_レ諸_レ官員_レ味_レ佗_レ佛_レ性_レ不_レ如_レ且_レ退_レ

(辨) 信不及とは自信不及の意なり、如上説くが如く一大事因縁は手間、暇入らぬ者なるを、爾等自信力の足らざる爲めに、今日彼れ是れ葛藤するぞ、實に前刻云た事共皆葛藤ぞ、手は執るとも云はずに執提し、足は歩むとも斷はらずに運奔し、耳は聴くともなく呂律を辨する等、實に無礙なり、山僧が過刻來説きたる爲めに却て府主や屬僚の心を曇らすぞ、寧ろ筵を閉ちて退却せんと率直一途に示された、葛藤とは文字言句を云ふ、會し難き大事を了得せしむる爲めに文字の葛蔓を與へて攀緣せしむるなり。

○喝_レ一_レ喝_レ云_レ少_レ信_レ根_レ人_レ終_レ無_レ了_レ日_レ久_レ立_レ珍_レ重_レ

(辨) 茲に到り師は喝した、便ち劣機の徒を喝せられたなり、此一大事因縁を體得するは自信力薄くては契はぬ、勇猛の衆生の爲には成佛一念にあり、懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇に亘ると説くも、畢竟自信の乏しきを戒むるものならん、精々骨折りて眞實の悟道を得よと、久立珍重とは皆々久しく

起立せしめ、嘸かし退屈なるべし、常に能く自愛せよとの禮辭なり。

○師_レ因_レ一_レ日_レ到_レ河_レ府_レ府_レ主_レ王_レ常_レ侍_レ請_レ師_レ陞_レ座_レ時_レ麻_レ谷_レ出_レ問_レ大_レ悲_レ千_レ手_レ眼_レ那_レ箇_レ是_レ正_レ眼

(辨) 此の話頭は有名の者にて古大徳も此話に參すること、禪僧の骨髓じやなど云はれて居る、某甲等の容喙し難き者なるも、自信の儘に試に道はん、因とは次でにと云ふ意、師一日、即ち或時、河府に到り御通行の途次に因み上堂を請ふた、其時麻谷が出て問ふ、千手觀音様は何の手が本統の手かと云ふ、千手觀音の尊像を其筵に安置してありました、忽ち是を追取つて發した問話なり、何れにせよ充分機を含んで來た。

○師_レ云_レ大_レ悲_レ千_レ手_レ眼_レ那_レ箇_レ是_レ正_レ眼_レ速_レ道_レ々々

(辨) 麻谷も左る者、臨濟もさる者、實に大將同志の法戦で毫も隙はない、麻谷の問話其儘を鸚鵡返しに打出された、恰も敵の刃を奪つて敵を屠らんとするやうな、若し師にして佗の事柄にて答話されたら、作家の麻谷必ず多少の間隙を見出して突込み來らん、由て問話全體を逆用して麻谷の面門をびたりと掩はれた、此有様は双龍爭_レ珠と云ふべきか。

○麻_レ谷_レ拽_レ師_レ下_レ座_レ麻_レ谷_レ却_レ坐_レ

(辨) 師が麻谷の問話全體を追取て倒捻ちに問はれた故、麻谷は師を拽き下して我が師家と成て答話せんと企て、自ら座に上りて坐せり。

○師近前云不審

(辨) 麻谷は師の席に坐して之より凄まじき答話を爲さんと構へたるに、意外にも師に不審と出られた、不審とは御變りなきやと云意也、洵に平和な挨拶をされたので、一寸度膽を抜かれた、惟り麻谷のみならず歴代の祖師も大に惑ふであらう。

此問答は互に作家の將にて優劣はない、龍象の蹴踏の如きであるが、茲では臨濟に投げられた。

○麻谷擬議

(辨) 大小大の麻谷も師の意外の挨拶には擬議した、即ち蹶いた様子じや、然し左る者じや、強ち敗鬪とは断せられぬ、或は越格の答を得て大波瀾を起さんとせしや知るべからず、麻谷は臨濟の力量境界を知悉して爲した所作なり、互に賓となり主となりて負けず劣らずの模様なり。

○師亦拽麻谷下座師却坐

(辨) 麻谷が師家の座に上りて何程の答話を爲すかと思へば乍ち擬議したに依り直ちに拽下して師の座に上つた、表面は至極當然ながら師が麻谷の擬議を眞實と思はるゝ筈なし。

○麻谷便出去

(辨) 如何にも口惜しさうに振舞ふて出で去つた、眞に負けたりと思ふたか面白き舉動なり。

○師便下座

(辨) 師の下座したは最早用なければなり、休すべきに休した、師も勝つたとも思はず、麻谷も亦た

負けたとも思はぬが師學互に思ひが疎通して、出するべきに去り、下座すべきに休された其意子合は問不容髪じや。

麻谷に第一世第二世の二人あり、此所の麻谷は果して何れなりや詳ならず、第一世は麻谷山寶徹禪師なり、若し第一世とすれば頗る老齡也、第一第二世共に大作家なれば何れと見るも妨げなし、然し後ちに至り此所の麻谷は可成は第一世と見たき所あり。

○上堂云、赤肉團上有、一無位真人常從、汝等諸人面門出入未證據者看看

(辨) 先つ赤肉團と無位真人は何と定義せん、赤肉團とは即ち心臓を云ふ、心の宿る所と説く、今の科學とは全く解釋が差ふが、底意には拘はる所はない、畢竟赤肉團とは此肉體なり。

無位真人とは佛性を云ふ、無位とは定まつた位なく頭上にも脚下にも賢人の上にも愚人の上にも一様に現はるゝを云ふ。

今之を一言に云へば赤肉團は色身にて、無位真人は心法なり。

扱今此無位真人が面門即ち欄の口より出入すと云ふ、口より出入する者は音聲なり、此音聲は取りも直さず本有の佛性なり、塵も灰も附かぬ清淨なる佛性なり、達磨の廓然無聖も均く音聲に依りて佛性を拋出せしなり、又た達磨や臨濟でなく吾等の口より出る音聲も佛性じや、是で無位真人が面門より出入する意子明白也、今臨濟が赤肉團上云々と云ふた底意は、臨濟の口より無位真人を拋出して、未

證據者看よ看、即ち今山僧の口より出るは其の無位真人也、未だ氣の附かざる輩は看よ看よと示されたる也。

○時有僧出問如何是無位真人

(辨) 卒直なる問なれども恐くは伶俐の僧にはあらざるべし、今已れの口より如何なるかは無位真人と抛出した者は其儘に無位真人にあらずや、無位真人が無位真人を問ふは愚かなぞ。

○師下禪床把住云道々

(辨) 臨濟が微困に爲人したれども會せず、却て頭を以て頭を覓るやうな振舞を爲す故、師も氣急に成られて備は今如何は無位真人と、問ふた者が即ち無位真人じやと、氣附かぬかと云はぬばかりにせられた、把住とは胸倉を取るなり、便ち胸倉を取つて睨みつけて僧に氣附けられた。

○其僧擬議

(辨) 始めは兎に角一氣ありげに問を發したが今臨濟に把住され、強く撻せられて一言もなく擬議したは齒痒し。

○師托開云無位真人是什麼乾屎橛便歸方丈

(辨) 臨濟が微困を極めて再三爲人すれども一人として會得した者が無い、大失望されて云はるゝには是程貴重な無位真人も是等の盲目共に逢ふては乾屎橛、即ち干糞の用にも立たぬ、遺憾の事じやと云て方丈に歸られた。

○上堂有僧出禮拜師便喝

(辨) 一僧が師の前に出て何氣なく禮拜した、表面は從順だが油断は成らぬ、又た一氣なうて出る筈もない、必ず句中、毒を含む者なり、臨濟は其機を飲み込んで一喝された、何程の機用を含む共百雜碎と喝した、臨濟の機鋒として左もあるべき也。

○僧云老和尚莫探頭好

(辨) 此僧は殊勝げに禮拜したらば、思はず一喝に喝破された、そこで斯う云ふた、我は只禮拜して敬意を表せしのみ他に異心なし、和尚は何か御嫌疑あつて我を御探りなされる様なが左る要はあるまいと愈々機を藏すこそ癖者ならん、探頭とは探る事、頭は附け讀なり。

○師云爾道落在什麼處

(辨) 師は居丈高に云れた、此奴何事を抜かすぞ、汝こそ我を探り居つたではないか、過落在什麼處、汝自ら道ふて看よと。

○僧便喝

(辨) 此僧竊かに句中を構へて出たが、乍ち見抜かれて撻し込められ、最早白狀の外なく直下に喝した、茲に師の賞詞はないが、此奴うい奴じや位には思はされたならん。

○又有僧問如何是佛法大意

(辨) 佛法大意とは如何にも有り觸れた問話なり、態々師の前へ出て平凡の法を問ふは、定めし句中

に機を含むなり。

○師便喝

(辨) 師は僧の來機を看取して其機に應して喝した、汝の問ふ佛法の極意はこれと直指された事にもなり、又た僧の來機に應じた事とも成る、一喝に權實兩用あり。

○僧禮拜

(辨) 只今一喝を玉はりて佛法の大意を御説示下され恭く拜謝すると云ふ體裁なり、左れど師に對して殊更に平凡の問話を發する程の者が單に一筋索で満足する者ではない、必ず毒氣を含みし所作ならん。

○師云爾道好喝也無

(辨) 師は僧の殊勝げに禮拜したるに對し、扱、今日の一喝は好喝であろうと極めて緩やかに問はれた、是れ實は僧の句中を探られたなり、畢竟僧の答話に由て好惡を定めんとされた。

○僧云草賊大敗

(辨) 此僧は中々の達者で、臨濟の釣針にも掛らぬ、師の意中を篤と勘破して、草賊大敗とやつた、便ち小盜の小手段は破れ易い、其様な小策は弄し玉ふなどやつた。

○師云過在什麼處

(辨) 臨濟が僧に賊機を勘破されても、尙ほ一重の繩を掛けたり、則ち爾は我を呼んで草賊と云が、

此方は全く無意じやと嘯いた。

○僧云再犯不容

(辨) 此僧頭正く尾正し、有力にして且つ眞摯なり、曩には好喝也無など怖ろしや、探竿を出だされ、更に今に至り過在什麼處と再度迄試み玉ふは師なり共許されぬとやつた、見事なる法戦なり。

○師便喝

(辨) 師は一喝された、賞讃の意ならん、此僧の如く終始一貫にして一絲紊れず、殊に能く頭を代へ面を改むる者稀なればなり。

○是日兩堂首座相見同時下喝

(辨) 一日東西兩堂の首座相見して同時に一喝を下した。

○僧問師還有賓主也無師云賓主歷然

(辨) 只今兩堂(前堂、後堂)の首座が同時に喝を下したは賓主があらうかと問ふた、極めて難答の問話なれども、師は何の造作もなく、問に應じて有る共有る共、賓主歷然じや、即ち優劣明白じやと答へた、其何の故なるか解し難きも、臨濟の如きは大悟の當下に於て其身は佛身と成り、心は佛智と成り、其言動は佛作佛行と成る者なれば、何を云つても拘はる所はない、兩堂の主座に、優劣あるや也た無きやに頓着なく答へて、僧に對して機用を示された。

○師云、大衆要會臨濟賓主句、問取堂中二首座便下座。

(辨) 我は今賓主歷然と答へた、其仔細を會せんと欲せば、兩堂の二首座に問へと云はれた、茲は臨濟の賊意なり、元來此問答は僧と師の間の葛藤にて、些子も兩堂の首座には干つからざるを如何にも仔細ありげに云はれた、云は、大衆を瞞却された様なが、大機大用の上には此様な手もあることならん。

○上堂僧問、如何是佛法大意

(辨) 此僧も亦佛法の大意を問ふた、此類の問話には恐らく句中ある者なり、即ち句中に機を含む者なり。

○師豎起拂子

(辨) 師は直に拂子を豎起された、即ち這箇を抛出して佛法の大意を示された、一喝を與ふるも同一なれども、問答の次第に依りては打つ事もあるべしと、兩用に掛けて拂子を豎起された。

○僧便喝

(辨) 師の豎起拂子の機に對して直下に喝した、能く喝したぞ。

○師便打

(辨) 師學の機が觀面に合體したる所に對して一棒を與へられた、賞棒なるべし。

○又僧問、如何是佛法大意

(辨) 解説の要なし、讀如字。

○師又豎起拂子

(辨) 讀如字。

○僧便喝

(辨) 師の豎起拂子に對して喝したは恰合にして答むべきなし。

○師亦喝

(辨) 此僧の喝したは答むべきなきも、前僧も喝して居る、或は前僧の動作に倣つて自ら試ることも亦なしと云ふべからず、斯やうの業を看過するは師の本分にあらすと思ふて亦た喝せられた、便ち探りたるなり、古への師たる者は大法に對する親切及び機敏なる尙ふに餘りあり。

○僧擬議

(辨) 師の懸念の如く果して擬議した、取りも直さず前僧の所作に倣ふたと自白せるなり。

○師便打

(辨) 師は僧の自白に依り罪を決して罰棒を與へられた。

○師乃云、大衆夫爲法者、不避喪身失命、我二十年在黃檗先師處、三度問佛法的的大意、三度蒙他賜杖如藁枝。

佛著相似、如今更思得、一頓棒、喫誰人、爲我行得。

(辨) 我が曾て黄檗の下にありし時、數度の棒を蒙たが、恰も藁枝を以て撫でられた如く、如何にも柔軟に感じた、苟も大法の爲には身命を抛たねば成らぬ者じや、我も今一度強く打たれたく思ふ、誰人か我爲に一棒を與ふる者なきや。

○時、有僧出衆云、某甲行得。

(辨) 師の言を怖ろしき釣語とも知らず盲進したは危険千萬也。我こそ師の望みに従ひ痛棒を呈せんと出掛けた。

○師拈棒與佗。

(辨) 然らば欄に棒を渡さんとして、師は彼れに棒を拈じた、愈々危機は近づいた。

○其僧擬接。

(辨) 盲坊主の御先き眞暗、進んで棒を取らんとした、危機間不容髮じや。

○師便打。

(辨) 果然打たれた、痛たかろう、元より打たるべき筈じや。

此等は恰も臨濟の惡戯の様にも見ゆるが、人材を造る上には充分淘汰が必要なれば、迂氣者を懲す爲には一の好手段ならん。

○上堂僧問如何是劍刃上事

(辨) 劍刃上の事は一大事因縁を云ふ、即ち本分也、斯程危険な者はない、依て劍刃に譬へた、實は道を極むる程危険なものはない、本分上よりは佛祖をも父母をも我脚下に踏みしめねば成らぬ、左りとて危きを畏れて、極致に到らざれば詮なし、依て一度百尺竿頭に上るなり、此所ぞ劍の刃だ、善惡の追分道なり、明眼の師ありて惡辣の鉗鉗を蒙り、あつと臍落ちして始めて眞の人材と成るなり。

○師云禍事々々

(辨) 前にも云た通り、一大事因縁の究明は、危険じや程に夫れは禍事じや、々々々々、近傍し難しと答へた、又た軽く見れば、及物沙汰は危いと云たと見ても好いが、それでは只打たれて響いた丈けの事じや。

○僧擬議

(辨) 僧の思入れと全く異り、師は禍事じやから近づくな、觸らぬ神に崇りなしじやと出られて、何とも趣向が附かず只だ口籠つた。

○師便打

(辨) 師は僧の見地の末到に對して罰棒を與へた。

○問、祇如石室行者踏確忘却、移脚向什麼處去。

(辨) 石室行者とは石室善導和尚を云、詳細は註疏に明かなり、故に茲に贅せず、石室行者は一大事因縁の究明に深く没頭して、足踏む處を忘却するに至つたが、是れで決定が着く者でござらうかと問

ふた。

○師云沒溺深泉

(辨) 師は直下に答へて曰く、その様では幾十丈とも知れの深泉に落ちて、遂に出る事が成らぬぞと石室の熱心は賞すべきも、彼此思惟分別するは、心が心を求むる者にて、決して了期あるべからず、此僧も亦た思惟工夫に苦む者と看取して釘を打たれた。

○師乃云但有來者不虧欠伊總識伊來所若與麼來恰似失却不與麼來無繩自縛

(辨) 臨濟云、衲は何人が來り問ふとも、一々夫々の機に應じて鉗鎚を下す、一人たりとも虧欠することはない、即今問ふた僧の如き者、即ち與麼に來る者は全然佛法の眼を失却する者じや、又た與麼にあらず(即不與麼)、相當に佛法の眼を具するも、却て其智解に纏綿されて脱し難き者あり、何れも大病なり。

○一切時中莫亂斟酌會與不會都來是錯

(辨) 宗師たる者は亂斟酌は成らぬ、一々來問ふ者の機根を洞察して、一々其機に應し、能く斟酌して接待するが肝要ぞ、若し老婆に過ぎ其手を緩めたらんには終に心眼を得せしむべからず、會とは佛法を會した者を云、不會とは佛法を會せざる者を云、會と不會とは別あれども、實には何方も錯也、其故は佛法の根本即ち本分の上には、鵜の毛程も佛法など云穢れ物はない、一點の見識もない、世話

にも云、悟らねば元より俗、悟れば元の俗と云事あり、悟り切つて元の俗なる所、便ち歸家穩座の地なればなり、師の説法常に此の如く、毀譽褒貶の顧慮もなく、天下後世の爲に示さるる所、血涙滴々たり。

○分明與麼道一任天下人貶剝久立珍重

(辨) 師は云、衲は世間の時流と異り、自ら確信する所は、毫も齒に絹被せる事なく、其儘を道ふ、即ち分明に與麼に云ふじや、然し當今の盲者共が、彼是れと衲を惡罵する事もあらんが、衲は些子も氣に掛けぬ、即ち天下人の貶剝するに御任せ申すぞ。

臨濟が法の爲に學者に對し、斯くも率直に示さるゝは實に有り難き次第なり、今の世(大正の)に在りても斯く赤裸々に示さるゝ師家果して幾ばくありや。

○上堂云一人在孤峯頂上無出身之路

(辨) 孤峰頂上は百尺竿頭なり、向上極つた本分の所を云、若し人あり此境界に住して、本分の上には直ちに是開口不得無備措足所とて、超然として更に教化の方法をも講せざる者、即無出身之路也。

此輩は大悟すれども何の役にも立たぬ變人也。

○一人在十字街頭亦無向背

(辨) 十字街頭は人の往來繁き所である、幾多の説教所を建立して學人を教導し、又た多くの聽衆を

集めて廣長舌を試るなり、斯やうな所では學人と雖ども、一々其機根を斟酌さるゝ迄なく、賞罰も正しく行はれ難く、老若男女善男善女一様に說法する状態を無二向背と云、此手は廣く普く行はるゝも、殺活賞罰の機なきを以て人材は得難き方なり。

○那箇在前那箇在後

(辨) 此兩箇の何れが勝れるや、前後は勝劣の意なり。

○不作維摩詰不作傳大士珍重

(辨) 維摩詰の流義は説かざる方にて、維摩の默として有名の者なり、傳大士の流義は縦横自在に饒舌して憚る處なき方也、何れも一流の大を作した宗旨なれども臨濟は臨濟特長の家風でやらねば駄目だ、維摩も厭じや、傳大士も好まぬ。

濟下の家風として別義のあらう筈はない、只だ一見便見の眼力に富みて來者の機根を徹見するを要する、時には維摩流の孤峰頂上に便なる事あり、又た問者の機に應し、それ契はぬ者は老婆親切を以て導く事も必要じや、究屈に是れと固守する事を嫌ふ也。

○上堂云有一人論劫在途中不離家舍

(辨) 茲に一人あり、何時までも説ひて了期なきを劫を論すると云、斯く久しく説くも在途中にて即ち修行するも、本分の田地を離れざるは便ち不離家舍なり、云はゞ百尺竿頭一步を進ること能はぬ輩じや。

○有一人離家舍不在途中

(辨) 是は一層上階級なり、所謂十年不得歸忘却來時道底の閑人にて、最早佛法の名をも打忘れた者ぞ。

○那箇合受人天供養便下座

(辨) 以上の二流の何れが世の信仰を受くべきか究明して見よとて師は下座された。人天とは云ふ迄もなく人間(庶民)天上(貴顯紳士)なり。

是も亦孤峰頂上と十字街頭との意子合に合し、維摩流、傳大士流兩ながら若し一方に偏執したらんには不是なり、濟家の家風は能く學人の機宜に應し密に斟酌應用するにあり。

○上堂僧問如何是第一句

(辨) 此章は參する方便なり、箇にして能く躋落ちがする、併し室内の秘事を明かすは禁物じやから諄々と辨するが却て諸人の迷惑なるべし、總じて臨濟大師爲人の法は何等か事柄を先つ設ける、即ち化城なり、學人が會得すれば直ちに化城を吹消して仕舞ふ也。第一句とは父母未生以前の相、聲前の一句なり、幾かに是れ如何と擬すれば、早く既に嗟過す、所謂言詮不及意路不到の處ぞ。

○師云三要印開朱點側未容擬議主賓分

(辨) 聲前の一句は、彼れか是れか思惟觀念に由て到底得べからず、其故は心を以て心を見んとして

何處迄も影を逐ふのみなれば也、嚴師の痛棒に遇ふとか、又は日常働作の間、不圖因縁に逢ふて頓悟する底ぞ、依て三要印開云々は其頓悟の状を説かるゝ者なり。

三要等の事は註疏や抄の詳説に任かす、今此所は其内容を述るなり、三要印開と云はず、只だ印と見れば可也、今、印に朱肉を抹して捺すれば明白に印影が現はれる、即ち三要印開にて朱點側つなり、此印影の現はるゝに何の手間暇入らぬ、便未容擬議に主賓が分明なるなり、主とは印なり、賓とは印影なり、換言すれば能化の師家と所化の學人なり、茲に明眼の師ありて、學人を鉗鎚するに、或は一棒一喝を用ひ、時に燈火を吹滅し又は途法もなき言句を吐きて、學人の意路を奪ふ時、頓悟する有様が、恰も印を押すに何の造作もなく、印と印文とが分るゝ如しと也、而して其印と印影とが實に同一なるが如く、能化の師と所化の學人と同一の道也と云ふ。

○問如何是第二句

(辨) 第二句とは第二義門便ち方便を云。

○師云妙解豈容無着問、漚和爭負、截流機

(辨) 妙解とは文殊の事、即ち一句の位にして根本智なり、無着は第二句の位にして後得智なり、換言すれば、文殊は向上の一機、無着は方便智なり、方便智は逆も根本智には契はぬ、即ち妙解豈容無着問也。

漚和は梵語にて方便の義、截流の機とは何物をも截斷するの意、所謂截斷衆流、不留一滴、底を

云ふ、截流機に就て譬諭がある、即ち兎馬象の三獸なり、兎は水を渡るに波上を走り、馬は水中を游泳して走り、象は激流の大河も水底を歩行して行く、何れも渡るが其科が違ふ、是を又聲聞、緣覺、菩薩の三乘にも譬へてある。

以上は繪説き佛法の様じやが、實際第一機即ち向上の機の猛烈なるは肝要也、到底無着の文殊に及ばざる所にして、今假りに吾等劣機の上に於ても、正直に只管打座を相續し、久々に熟して得力ある者は、定力に富み、又た慧力も從て發達する、後退がない、之に反し往々伶俐の漢ありて意外に早く一省發して、師家より伶俐呼はりを受る者あるも、何所にか弱點を存し、菩提心乏しく、何時の間にか其主義の變じて居る者がある、是は吾人劣機の上に於ける事ながら、古へにも全くなきにもあらざるべきか。

○問如何是第三句

(辨) 第三句とは義學を云、即ち教相佛法なり。

○師云看取棚頭弄傀儡、抽牽都來裡有人

(辨) 義學は廣大無邊なり、容易の觀を爲し難し、されど此學に依りて佛心其儘を會得することは成らぬ、似て非なる者也、例えば棚頭に活動する操人形が、如何にも巧妙に藝を演し人形自身が獨り働く所を見よ、便ち看取棚頭弄傀儡、じや、彼れは獨力にて働くにあらず、抽牽都來裡有人で、傀儡師が裏面に在りて絲を牽ひたり伸ばしたり巧に操縱する爲也、今や義學者が巧妙に且つ雄大に説くは

一切自己の頭より發するのではない、學識の絲に操縦さるる迄じや、學識より得たる言句を以て廣長舌を逞ふする者ぞ。

○師又云一句語須具三玄門、一玄門須具三要有權有、用汝等諸人作麼生會下座

(辨) 師は垂示中に三玄三要と云はれた、此等の文字上の釋又た其由來等は、註疏等の説明に一任して茲に贅せず、以下其意旨の内容を辨せん。

體中玄とは一切萬物の根本本體也、三身で云へば法身に當る也、又た法界根本の理と知るべし、句中玄の句とは大悟了畢の人の言句を云ふ、管だ言句のみならず起居動作も亦句と云ふ、體中玄は萬物根本の理にて、句中玄は大悟底の人に備はる理ぞ、其故は大悟底の人の言句は法界根本の理と均く作用すればなり、是を以て句中玄と云、句中玄とは體中玄、句中玄を超越せし境界なり、先づ體中玄を悟り、其境界に到りし人は、自ら句中玄を得るは當然にて、早既に體中玄とか句中玄とか云ふ者をも打忘れ、佛法てふ名さへ要なき大休歇の境地也、此位に到る人は言語動作極めて自在にして、火を呼んで水となし、月を稱して鼈と云ふも拘はる所なし、前に賓主の話にも云ふ如く、此身一度大悟徹底する時は、直下に身は佛身と變し心は佛智と化し、其言語舉動悉く佛作佛行と成り、全體作用の境地に到るなり。

三要とは敢て三の數に局せず、何時も三玄に附隨して離れぬ意旨なるが故に、假りに三要と云ふ、臨

濟の大機常に働かるゝ所に、必ず權實照用を備ふ、例之は一喝を吐く時、其音聲は本有の本體より來る故に體中玄にして實也、句中玄より來る所は權にして機關なり、喝と吐かぬ前に何と出つべきやと鑑察する所、是れ照なり、愈々決して喝と吐くは是れ用なり、如是權實照用ありとて、別に手間暇入らぬ、便ち三要印開朱點側じや、印に朱肉を抹して紙に捺すれば直下に朱色の印紋が現はるる如しじや、三玄三要の文字的説明は註疏に譲り、只臨濟の腕力の勝れて全體作用する所と知れば可也。

○師晚參示衆云有時奪人不奪境有時奪境不奪人有時人境俱奪有時人境俱不奪

(辨) 此垂示は四料簡とて名高し、便ち學人を接待するに其機根を料簡して、其機に應して接するに四種の狀態がある、是を名けて四料簡と云、先づ人境と云、其人は學人の來機なり、境とは學者と師家と問答論議する處の法の體を云ふ。

そこで、奪人不奪境と云ふ模様は斯うだ、今一學人ありて、何事か思ひ詰め、疑情に捕はれて、師の下に來るとせんに、師は其胸中を洞察して棒を行すとか、喝するとか、又た言句ならば思惟情量すべき様なき途法もない言を打ち掛るなり、此時學人は何とも合點する能はず、考ふべき心路を奪はれて茫然無心となる、此時悟入する事がある、即ち思惟情量が止んで自己の光明現はる、故に師は此手を以て試る事あり、是を奪人不奪境と云ふなり。

奪境不奪人とは、大凡の學人、多くは四圍の外境が目を遮る爲に省發を妨ぐるを以て、師家が境を奪

ふて學人を眞實の所に導く手段を云、例之ば燈光吹滅の如し。
此四料簡の手段は奪ふが眼目なり、學人が先づ省發して、是れ、と氣附きて金科玉條と思懐する者を奪ふなり。

人境俱奪とは前述二條に比すれば、稍勝つた境地の學人を接する法なり、人を奪ふも境に捕はれ、境を奪はるゝも人亡せず、兎角に此れを祕藏す、所謂土塊を認めて黄金と執す、依て人境共に奪つて除くれば、學者の腰を据る所なきに至るなり、古來往々明眼の師が、一度棒を與へて悟入したる者に、更に痛棒を與へて、其得たる者を更に奪ふ等の模様あるを見るは、此手段ならんか。

人境俱不奪とは、人境俱奪以上の上根者に適用するの手段なり、此根機の士は既に沒蹤跡斷消息の境界にありて、固執する所なき故に、奪ふの要はない、道はね其互に默識心通して、何の手数も掛らぬなり、呼べば應ふる如く、釋迦が花を拈すれば迦葉が笑ふ如し。

總じて此則は奪の一字が眼目なり、先づ奪人で人を奪ふ、奪境にて境を奪ふ、人境俱奪にて人も境も奪ふ、人境俱不奪にて俱奪の奪を奪ふ。

扱此四料簡に係りて、上々根は人境俱不奪の處なり、若し是以上の機に對しては、如何か料簡するぞとなれば、便ち全體作用なり、何の料簡の要あらん。

○時_ニ有_レ僧_ヲ問_フ如何_ニ是_レ奪_人不_レ奪_境師_云煦_日發_生鋪_地錦
櫻_孩垂_髮白_如絲_。

(辨) 見渡せば柳櫻をこぎませて都ぞ春の錦なりける、これ等が奪人不奪境の様子ならん、全體境なり、春の日の温々煦々の氣が盛んにて、花は咲き新芽も兆すなり、其花の爛熳と咲ける有様は境なり、櫻孩垂髮白如絲とは嬰兒白髮を垂れることは無き事故、人を奪ふた所を云ふ也。

○僧_云如何_ニ是_レ奪_境不_レ奪_人師_云王_令已_行天_下偏_將軍
塞_外絕_烟塵_。

(辨) 此二句の中、王令と將軍は人なり、絶烟塵の處、奪境なり。

○僧_云如何_ニ是_レ人_境兩_俱奪_師云_並汾_絕信_獨處_一方

(辨) 并州と汾州は境也、其州の人は人也、絶信の一句は此れ境人一方を奪つた。

○僧_云如何_ニ是_レ人_境俱_不奪_師云_王登_寶殿_野老_謳歌_。

(辨) 王と野老とは人、寶殿は境にて、兩々相存する様子也、此の則、人、境、奪三字の一應の説明に過ぎず、學人の利益は敢て見へぬが、先輩識者より承はる所に依れば、有力なる說法の前には如斯簡易なる垂示もあるとか、云はゞ月並と云如きか。

○師_乃云_今時_學佛_法者_且要_求眞_正見_解。

(辨) 以下は臨濟が諄々として說法爲人せらるる所、親切溢るゝ如く、繰返し捲き返し、牛頭を按して草を喫せしめらる、眞正見解を求めんと要する、其眞正見解とは決して難解にあらず、造作もなき者ぞ、一度大悟徹底して直下に身は佛心と變し、心は佛智と化したる以上は、日常の起居動作着衣喫飯

廁尿送尿等悉く是れ本分の露現にして、拘はる處なし、即全體作用也、二六時中斯くの如く受用する所、即ち真正見解なり。

○若得真正見解、生死不染、去住自由、不要殊勝、殊勝自至。

(辨) 真正見解を得たる程の者は、生死不染とて、自然と生死の業が易々と成る、行住坐臥等一切心に任せざるはない、殊勝を求めざるも殊勝は自ら至るなり、殊勝とは佛の心にも契ひ、又た一切衆生禽獸虫魚の心にも契ふを云、極めて難行のやうなれども、決して然らず、只其物それよ、其物夫れつきりで行く事だ、苦む時は只苦む、深く時は只深き、沈む時は只沈む、死ぬ時は只死ぬ、見死如歸など云ふ餘計の造作はない、是ならば、上佛より、下群生迄の心と貫通する譯也。

○道流祇如自古先德、皆有出人底路、如山僧指示人處、祇要爾不受人惑、要用使用、更莫遲疑。

(辨) 古來の先德が人を教化するに就て、皆有出人底路、で一々手段方法がある、臨濟が人を出さんとするには、何等の手段方法もない、只要不受人惑、で人に誑かされないと示すの一法じや、人惑とは無眼子の師家及び先輩友人なり、是等が中々微困に教導して下さる、最も疑はしく思ふ所は鑄型の極つた公按に參せしむる一事也、これはしたり臨濟の時代には此模様は無つた、併し今の世に譬へば也、此手では何時迄も了期はない、印可を受ても未だ眼が見へぬ、可憐生なり、邪師邪友の導き

を受けんより、如かじ初めより道に指を染めざるにはじや、佛法てふ名さへ知らず無事安穩に暮して行ける、若し偶然に以上師友の御世話になつたら乍ち生れも附かぬ癩病患者に陥ると也、そこで臨濟道ふ、今ま明白に示す所を信する者は我れが道ふ如く受用せよ、否らずと思ふ奴は用ゆるな、然し我の如く質直卒直に説く者は古來稀也であるから、臨濟の所説は疑はしいなど、思ふては成らぬ、即ち莫遲疑じや。

○如今學者不得病、在甚處、病在不自信處、爾若自信不及、即便忙々地、徇一切境、轉被他萬境、回換不得自由。

(辨) 今の道を學ぶ者が兎角に真正見解を得ざるは、病什麼處にあるかと云へば、自信力の足らぬ處に存するぞ、斯道は最上無比と堅く信じ、我こそ必ず悟るぞとの決定心が足らぬ、其故に波々忙々として、彼を見是れを聽て、心が移り變り、少しく進んでも又た種々の境即ち萬境に回換即ち引き返さるゝ爲めに、真正見解が得られず、自由の境に進めぬ也。

○儼若能歇、得念念、馳求心、便與祖佛不別。

(辨) 馳求の心とは、彼れか是れかと思惟情量するを云、強かち外に向て求むる者のみでない、自心に向つて求むる者も均く馳求心じや、若し此念が歇み得て、日常其物それよと受用する様になれば、上み祖佛の心に契ひ、下もは群生の心にも通ふ、即ち與祖佛不別なり、此垂示は中々思ひ切つた者ぞ、一大藏經も詮註し及ぼさず、歷代列祖も全捉不起なる所を明かした金言ぞ。

○ 爾欲得識祖佛、麼祇爾面前聽法、底是學人信不及、便向外馳求、設求得者、皆是文字勝相、終不得他活祖意。

(辨) 爾が祖佛を求むるも、何物なるやを知らず、祖佛とて遠くはない、即今爾の眼の前に於て聽法する所の心が、其儘祖佛じや、聽法底の心とて別に一の獨立した心の存するにはあらず、今琴の音をころりんと聽きたら、其ころりんが即ち聽法底の心なり、痛く打たれて痛みを感じたら、其痛みが即心なり、さやけき月を見て、ぞつこん見抜いたら、月我を照すか、我れ月を弄ぶか、只一如だ、此一如即ち心也、此轉々不可測なる者こそ眞の祖佛なり、爾是を信せずして、波々として外に向て覓るは憐むべき事ぞ、人々具足箇々圓成の祖佛に賺たらず、教律論を究明しても、夫れは文字上の勝相にて活き々々した眞の祖意は得られぬぞ。

○ 莫錯諸禪德、此時不遇萬劫千生輪迴、三界徇好境、撥去驢牛肚裏生。

(辨) 我人共に今ま人身を受けたるは無上の幸也、此時に遇はず、即ち生死の翳を截斷することならねば、千生萬劫決定は出來ぬぞ、只だ好境即ち己れの好む所の境に徇つて三界に輪回し、種々の身を受けて、永く馬腹驢胎に生るべし、徇好境、撥去とは、眼前に髣髴たる者に牽かれて眞の學道に進む能はぬ事也。

○ 道流約山僧、見處與釋迦不別、今日多般用處、欠少什。

麼六道神光、未曾間歇、若能如是、見得祇是一生無事人。

(辨) 臨濟の見處を率直に約して道へば、釋迦と吾人と毫も優劣はない、今は多般の用所、即ち起居動作等一般の所作の上に於て、欠少、什麼、即ち何所に不足があるぞ、六道神光即ち視、聽、嗅、味、觸、法なり、此神光は間斷なく相續して居るではないか、(神光とは六根より發する佛性の光明と云ふ意也) 扱、今ま見る、聽く、嗅ぐ等の上に於て、釋迦と吾人と變る所ありや、否、全然同一ぞ、此仔細を能く信得せば、外に何の求むる所も無く、一生無事の人也、何の要ありて成佛作祖を希はんや。

○ 大德三界無安、猶如火宅、此不是爾、久停住處、無常殺鬼、一刹那間、不揀貴賤老少、爾要與祖佛不別、但莫外求、爾一念心上、清淨光是、爾屋裏法身佛。

(辨) 三界は火宅にして常に安き事なし、久しく停住する所でない、無常の殺鬼、即ち無常と云殺鬼が、何時も襲ひ來り、一刹那の間、即ち出息入息を待たず、貴賤老少を撰ばず、必ず一度は連れて行くぞ、實に慕ない世相じや、願はくば此慕ない憂き目を免れたく思ふは當然なり、扱、今此業苦を出離せんと思は、向外莫求じや、前に云ふ眞箇の祖佛は、殺鬼にも犯されず、火にも焼けず、水にも溺れぬ、爾の一念心は、本來清淨無爲にして、塵も灰も附かぬ、是便ち爾が屋裡の法身佛にして長へに生死を離るゝ者なり、而して此法身佛こそ、眞箇の爾であるぞ。

清淨光とは、我れ人共に日常塵事に汚さるゝも、心の本體には動搖なきなり、竹影拂階塵不動、月穿潭底、水無痕じや、(清淨法身毘盧舍那佛)。

○ 備一念心上、無分別光是備屋裏報身佛。

(辨) 無分別光とは人々具足する所の智體なり、此智體は萬徳圓滿にて平等なるを以て、無分別光と云、例之は茲に絶大の鏡ありて、能く平等に萬物の影を宿して私なきが如し、是即ち備が身内に具足する所の圓滿報身盧舍那佛なり。

○ 備一念心上、無差別光是備屋裏化身佛。

(辨) 無差別光とは、心の萬行即ち應用なり、喜怒哀樂愛惡欲に應じ、其他萬般の境に應じて千變萬化するを云、境には萬般の別あれども、是に應ずる心には全然差別なき也、只だ其境に應じ、悲むべきは悲み、笑ふべきは笑ひ、山來れば山、月來れば月と夫れ々照す也、是備が身内に具足する所の千百億化身釋迦牟尼佛也。

○ 此三種身是備即目前聽法底人、祇爲不向外馳求、有此功用。

(辨) 前に法、報、化三種の身を説たが、此三身佛は外ではない、前にも道ふた所の備が即今聽法底の者じや、能く々々備自から己れの一念心の上を究明して看よ、三身各々其功德ある事を知るべきぞ。

○ 據經論家取三種身為極則、約山僧見處不然、此三種

身是名言亦是三種依

(辨) 教者の極則とする三種身は、説明上一應大切なれども、眞實にあらざる也、其故は只だ理論的に假設したる名句也、又た三種の依なり、名句とは言句を以て名を顯はしたる者にて實體なし、三種の依とは、依は依正の依を云、依に能依、所依の二あり、今三種の依と云たは所依に當る、例之は家は所依なり、家に住する人は能依なり、又た書籍は所依なり、是を讀む人は能依なり、故に法報化三身は其法、報、化なる名に依て立つのみ、是れに依り之れに托する者は即ち佛性なり、これこそ大切の者ぞ。

○ 古人云身依義立、土據體論、法性身法性土明知是光、影。

(辨) 今ま臨濟は華嚴の文を引證して説かる、身依義立とは、一佛性の上に法、報、應、三身と云ふ名を與ふるは、此三種の功德あるを以て、其義に依り三種の身を假設せる也、土據體論とは今ま説きたる三種身の住所也、苟くも身が成立すれば、自然住所なき能はず、從て法身の住する所を法性土と名け、報身の住所を受用土と呼び、應身の住所を變化土と稱する也。

據體論の體とは、其土に住する佛體を云、其佛體に依りて夫れ々住所を定むる故に、據體論と云、以上三身を總稱して法性身と云ひ、三土を總して法性土と稱す、此身土兩ながら假設物にして實體なし、故に光影即ち陽燄と云ふなり。

○大德僧且識取弄光影底人是諸佛之本源

(辨) 諸人は兎角實體なき光影を尙ふも、只た光影を弄するのみ、其弄せらるる、光影は穿鑿の益なし却て弄_ス光影_ヲ底人は是れ什麼物ぞと究明せよ、是即ち諸佛之本源なり。

○一切處是道流歸舍處

(辨) 扱、道流即ち道を修する所の輩よ、諸人の歸舍の處、便ち落付き所は何所なるかと問はゞ、外ではない、着衣喫飯の處、屙屎送尿の處、處として歸家穩座の所、極樂淨土にあらざるはなし。

○是爾四大色身不說法聽法脾胃肝膽不說法聽法虛空不說法聽法是爾目前歷々底勿一箇形段孤明是這箇解說法聽法若如是見得便與祖佛不別但一切時中更莫間斷觸目皆是祇爲情生智隔想變體殊所以輪廻三界受種種々苦

(辨) 垂示の言句は頗る多いが、畢竟此の四大假和合の色身も、五臟六腑も、虛空も說法聽法を解せぬ、其解する者は只だ目前歷々底として、常に目前に現はれて見聞覺知する所の心なり、強ち目前と云はず、耳でも鼻でも何所でも拘はる所はない、此心は無形無色無味無臭にして、而かも孤明なり、孤明とは明暗晝夜に拘はらず、不斷明かなるものにして、便ち說法聽法を會する也、爾若能如此見得

せば便ち祖佛と不別也。

然れども情生智隔で、人能く這箇を知る事なし、情生智隔と云ふ事を一應説明せん、今ま吾人が何氣なく語り合ふ時、又は飲食する時、又は月に耽り花を眺むる時等、其の者夫れのみにて餘念なくば其儘佛性は現前して居るが、自らは夫れとも氣附かぬ、只だ其物それなるのみ、之を胸中空寂にして一點の情識なしと云ふなり、然るに一念纔かに生ずれば、此念に隔てられて佛性は隠れ去ると云なり、觸目皆是れとは目に觸るる者は這箇にあらずと云事なしと也、想變すれば體殊なりとは、想とは念なり、體とは身也、例えば今瞋恚の念を起せば、乍ち身は修羅の身と成るが如く、念が種々に變するに由りて、其念に引れて六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)の身を受る也、故に三界に輪廻して種々の苦を受ると云ふなり。

○若約山僧見處無不甚深無不解脫道流心法無形通貫十方在眼曰見在耳曰聞在鼻嗅香在口談論在手執捉在足運奔本是一精明分爲六和合一心既無隨處解脫

(辨) 山僧が見所を其儘に道はゞ、心なる者、是れ什麼物ぞと究明して看れば、一々佛性ならざるはない、故に甚深にして悉く解脫して居る、殊に心は無形にして十方に通貫し、眼耳鼻舌身各々其所に充實して作用す、楞嚴經に本是一精明分爲六和合とある、便ち眼耳鼻等の六根が六塵と結合

して、色、聲、香、味、觸、法の六塵と成るを云ふ也、扱此六塵は元是れ佛性の作用に歸着し、實に一點の妄想なきなり、故に隨處に解脱せざるはなしと道ふ、一心既に無とは妄想なき事にて、若し一點の妄想起りて是非取捨の情識に捕はるれば、乍ち面倒が續出するも、幸に佛性其儘ならば、喫茶、喫飯、寤寐、送尿自由自在で拘はる所なし、是れを隨處に解脱すと道ふ。

教意では、六根の作用を六塵として深く戒む、之れは吾人凡夫に在ては、色聲等の六塵に迷ひ、不覺、惡業を犯すを憐みて也、然し元來佛性の作用にて是れ無くては生き甲斐もなし、故に茲では六塵道はず、六和合と説く、教意と祖意と異なる所以也、又た欲趣一乘六塵勿惡六塵不惡却同正覺と云ふてもある。

○山僧與麼說意在什麼處祇爲道流一切馳求心不能歇上他古人閑機境

(辨) 師が如此説くは兎角禪流が馳求の心歇み難く、先哲の言句等に捕はれて、自在を失ふを憐むが故也、馳求すれば愈々背き、求めざれば却て眞實なる事を確信せしめんが爲に、諄々として説かる、ぞ、閑機境とは佛祖の臨機應變の言教を云ふ、即ち方便に過ぎずして、用は一時にあり、失千古に傳ふる者ぞ。

○道流取山僧見處坐斷報化佛頭十地滿心猶如客作兒等妙二覺擔枷鎖漢羅漢辟支猶如廁穢菩提涅槃如

繫驢橛何以如此祇爲道流不達三祇劫空所以有此障礙

(辨) 師の見所に由れば、教相家で最も尙ぶ所の三身佛(法、報、化)をも看破るなり、即ち本文の坐斷報化佛頭所なり、坐斷とは我が膝下に抑へて頭を上げさせぬの意を云、十地滿心とは教相上説く所の位で、註疏又は抄の上に詳記せらるゝ事故、茲には説かぬが、畢竟三大僧祇なる久遠の間、修業に修業を重ねて、法雲地と云境地に進むと云事じや、此尙ぶべき境地も臨濟の眼から見れば、客作兒の漢の如くじや、客作兒は小作人の事にて極めて劣等の者じや、又た等覺妙覺と云尊貴なる位は、却て法見佛見に拘束されて自由を失ふ事、恰も枷鎖を掛けられたと同じきなり、況んや羅漢とか辟支佛と來ては、いやはや不淨じや、菩提や涅槃は繫驢橛の如しどて何の役にも立たぬ、臨濟が如此、喝破する所以は、兎角道流が三祇劫空に捕はれ、種々難多の稱名言句に縛せられて、永劫眞實に達せざるを憐み、其迷を救はんが爲のみ、三祇劫の修行と大層に云ふが、實は空名にて、若し眞實の道あるを領會せば、三祇の修行は無用の長物じや、本文の厮穢の厮字は廁と爲すべし、圓の事也、廁穢とは便ち尿管の事、厮とは馬飼ひ薪負ひ等の賤夫なり。

○若是眞正道人終不如是但能隨緣消舊業

(辨) 舊業とは前世の業なり、先づ善惡二種と定めんに、今世に於ける一分の善業を作せば、前世の惡業の一分を消滅し、又た今世に於て一分の惡業を作せば、前世の善業の一分を消滅すると云ふ定法

にて、上諸佛と雖も定業は免かるゝは能はざる者也、消_ス舊業_ニとは上述の率に由て負債を償還する者_トす、凡人なれば以上の目の子勘定に縛さるゝと雖も、真正道人は然らず、定業は佛祖も免かるゝ能はざる事を會得する故に、敢て欣ばず又た厭はず、浮く時は只だ浮き、沈む時は只だ沈みて、別に因果の理法を考究して自ら慰むるの要もなく、只能_テ隨緣_ニ消_ス舊業_ニして安閑無事なり。

○任_ニ運着_ニ衣裳_ヲ要_ス行_ハ即_チ行_ハ要_ス坐_ハ即_チ坐_ハ無_ニ一念_ノ心_ヲ希_フ求_フ佛_ノ果_ヲ緣_ハ何_レ如此_ニ古人_云若_ク欲_ク作_ル業_ヲ求_フ佛_佛是_レ生_ル死_ス大_ニ兆_ト也

(辨) 真正道人は夫れ々分相當の衣を着け、放逸ならざる限り、自在に行住坐臥着衣喫飯するの外、些子も佛を求むるの念なし、作業して佛を求めんと欲せば、佛は是れ生死の大兆と云ぞ、成佛作祖を求むる爲に、種々難行するは殊勝にはあれども、實には業也、業なれば生死は免れぬ、兆はさざしにて最早そろ々々地獄に落つるぞとの兆也、極言すれば念佛坐禪觀法も、成佛作祖を求る上は均く業なるぞ、元來佛は求めて得べき者にあらず、求れば求むる程背くなり、如是無意義の業は真正見解の人の取らざる所なり。

○大_ニ德_ヲ時_ノ光_ヲ可_ク惜_ム祇_ト擬_シ傍_ノ家_ノ波_々地_ノ學_ヲ禪_ノ學_ヲ道_ヲ認_シ名_ヲ認_シ句_ヲ求_フ佛_ノ求_フ祖_ノ求_フ善_ノ智_ノ識_ノ意_ヲ度_ヲ莫_ク錯_ス

(辨) 道流は唯だ真正見解を求むるを肝要とす、然るに無益なる參禪學道等に時光を費すは惜むべき也、菩提涅槃等の名目を穿鑿し、教經釋論の言句を義解して、成佛作祖を希ひ、知識を向上して意識

を以て種々付度する者は皆錯る也、如かじ只管に真正見解を求んには、傍家被々地とは、傍家は外の家なり、波々地とは常にそわ々々として止まざるを云ふ、如此、馳求して止まざるも佛には成れぬぞと也。

○道_ノ流_ノ備_ハ祇_ト有_ニ一_ノ箇_ノ父_ノ母_ノ更_ニ求_フ何_ノ物_ヲ備_ハ自_ニ返_シ照_シ看_ス

(辨) 父母とは本源なり、萬物の依て生ずる源なる故に一箇父母と道ふ、備等には既に此父母あり、此外に何物をか求むべきぞ、未だ其父母を知らざれば自ら返照して看よとなり(回光返照の事後ちに詳述すべし)

○古_ノ人_云演_シ若_ク達_ス多_ク失_シ却_リ頭_ヲ求_フ心_ヲ歇_ル處_ヲ即_チ無_ニ事_ト

(辨) 古人とは茲には世尊を指すなり、世尊が楞嚴經に演若達多の事を説かれたり、此人修飾家にて數々鏡面に對する故一朝友人戯れに其鏡を撤したるを知らず常の如く鏡面に對するに頭顔現はれず、痛く驚きて自身の頭を求むる爲に狂走せり、其間鏡面元の如く掛けられたるに由り再び鏡に對するときは明かに頭目現はれ、大に安心せりと、扱演若達多の狂走歇む時に頭が外より來るにあらず、諸人が佛を馳求するも亦復如是、其馳求する間は馳求の心に礙へられて佛性の現はるゝ事なし、馳求心歇めば歇む所に佛性現す、其時を無事と云也、扱此無事、外より來るにあらず、本來我に具足するを以て馳走心さへ歇めば、依然として無事也。

○大_ニ德_ヲ且_ニ要_ス平_ナ常_ノ莫_ク作_ル模_ニ樣_ヲ有_ニ一_ノ般_ノ不_レ識_シ好_シ惡_シ禿_ク奴_ト便_ニ即_チ

見神見鬼指東劃西好晴好雨如是之流盡須抵債向閻老前吞熱鐵丸有日好人家男女被這一般野狐精魅所著便即捏怪瞎屢生索飯錢有日在

(辨) 臨濟云く、爾等が成佛作祖を求めば、日用只だ常の如く受用して毫も造作に度る勿れ、行住坐臥着衣喫飯して何の模様もなくば、實に無事貴人也、若し種々の模様をなして佛を求めば、佛は是れ生死の大兆也、茲に一般の無智の禿奴あつて、念佛、念法、坐禪、觀心等の模様をなし、夜を日に次で佛見法見に縛せられ、爲に冥中に種々の相形はれて、或は神を見或は鬼を見る、是れ全く眼花にして實有にあらず、無着が文殊と相見し、真歇が五百の應身に逢ふ類は未だ胸中に一物ある故也、指東劃西好晴好雨とは、東西は假名のみ、其地位の異なるに由て、東と云ひ西と云ふも、本來東西なき也、好晴好雨も亦復如是、其活業の差異やら、時と場合に由りて其好む所を異にするのみにて、本來是非なき也、依て何方を定めて東西を論すべき、又た何者を是非して晴雨を取捨すべきぞ、是等は皆真正の見解を具せず、自ら迷ひ又た人を惑亂する者也、是等の輩は他日必ず閻家に至て熱鐵丸の責に遇ん、好人家の男女便ち歷々の男女が、是等の野狐精に捏怪即ち誑かされて、却て大に迷を長ず此罪亦た重ければ、他日閻老の前にて嚴く罪を糾されて、旅宿にて料金を取らるゝ如く、無駄に費やせし飯錢を取らるべきぞ、瞎屢生とは法を欺き人を誣るの徒也。

○師示衆云道流切要求取真正見解向天下橫行免被

這一般精魅惑亂無事是貴人但莫造作祇是平常

(辨) 臨濟云く、諸人若し能く真正の見解を具して、天上天下に獨歩して、野狐精等に魅惑さるゝ事なく、無事是れ貴人ならん事を欲せば何の造作もないぞ、茶に遇つて茶を喫し、飯に遇ては飯を喫して日常四威儀只尋常なれ、若し如此ならば眞に無事是れ貴人にして、真正見解の人也。

○爾擬向外傍家求過覓脚手錯了也祇擬求佛佛是名句爾還識馳求底麼三世十方佛祖出來也祇爲求法如今參學道流也祇爲求法得法始了未得依前輪迴五道云何是法法者是心法心法無形通貫十方目前現用人信不及便乃認名認句向文字中求意度佛法天地懸殊

(辨) 茲に覓脚手とある、始末と云に同じ、始と末とを云へば全分を包含するなり、脚手も一身の端と端なり、便ち一身なり、然し眞實の佛と云は心法即心なり、若し心外に佛を求めば、是向外傍家覓手脚者ぞ、佛は名句とは、佛と云ふは只是れ聲名文句にして實佛にあらず、凡そ言語に渉る者は皆是れ聲也、法身報身等は均く是れ名也、教經釋論に説かるゝ所は皆是れ文句ぞ、今ま諸人の指す所の佛は眞實にあらず、爾還識馳求底麼とは、爾等は佛の名に拘つて心外に馳求する事は然らざるなり、法を求むる爲には馳求すればこそ得るなり、還ての字肝要ぞ、三世の諸佛歴代の祖師の出現も

只此法を求むる爲のみ、古今の學者も只此法を求むる爲にして佛を求めず、是が馳求する眞の様子であるぞ、此法とは只是れ此心也、只だ能く心を知れば大事了畢也、然、ごも若し未だ心知らずして他の聲名文句に就て佛を尋覓すれば、依、舊、五、道、六、道に輪廻す、此心法は無形にして十方に通貫し、不斷目前に用を現じて、喫茶喫飯住座臥す、備、ち、是、れ、を、信、せ、ず、し、て、只、だ、外、に、向、て、聲、名、文、句、を、認、め、經論の中に就て穿鑿して寧時なく、意識を以て付度する故に、眞實の所は天地懸殊なり。

○道流山僧說法說什麼法說心地法便能入凡入聖入淨入穢入眞入俗要且不是爾眞俗凡聖能與一切眞俗凡聖安着名字眞俗凡聖與此人安着名字不得道流把得使用更不著名字號之爲玄旨

(辨) 臨濟云く、山僧の說法は仁を説くとなれば、心地の法を説く故に、汎く凡、聖、淨、穢、眞、俗に入りて流通自在なり、然れども爾等が思ふ所の眞俗凡聖にあらず、爾等は眞俗凡聖の見地を以て、其相に執着し、世間に於て眞俗凡聖と喚はるべき者を喚んで名く、故に其名相應の物なり、畢竟表現の相に着する也、我が云所の眞俗凡聖は然らず、爾等試みに汝が眞俗凡聖の見を以て、我が説く所の心法に名けて見よ、眞とも俗とも凡とも聖とも喚て名くべきなし、此人とは心法を指す、心は元來物にあらず、故に名相を離る、把得使用更不著名字とは此心地の法を受用せんとならば、把得して、便ち追取つて用ひよ、決して造作に涉りて穿鑿すること無用じや、我が説く所の如んば、諸佛諸祖是

を玄旨と云也と道へり。

○山僧說法與天下人別祇如有箇文殊普賢出來目前各現一身問法纔道咨和尚我早辨了也

(辨) 臨濟云く、山僧の說法の常人と異なる所は、縱令文殊普賢の大機の人が化けて一人と成て來ても、一句口を開かば、我は一見便見して早く是れ文殊普賢なるを知る、他の宗匠の人を接待するは其相に着し文殊普賢の如き、立派なる相を見れば、忽ち威嚇され、劣機の相に遇ふては便ち劣機の會を爲して悔る故に、一向に本所を知らず、我は其相に着せざる故に、如何程化けて出て來ることも分明に來所を知るぞ也。

○老僧穩坐更有道流來相見時我盡辨了也何以如此祇爲我見處別外不取凡聖內不住根本見徹更不疑謬

(辨) 穩座とは師が人に接する時、木床等に坐するを云、扱斯くして後ち何人が來り問ふとも、一見便見して盡く其善惡を知るなり、其故は我は他の宗師と異り外不取凡聖、で其外見の優劣に動かされぬ、又た内不住根本とて、是れこそ佛法の根本極意と云ふ鑄型を有たぬ、常に胸中明鏡の如くであるから、花が來れば花が映り、犬が來れば犬と、來者の邪正是非をそつとも殘さず鑑察する也、便更不疑謬、で疑ひ謬まる事なし。

○師示衆云道流佛法無用功處祇是平常無事屙屎送

尿著衣喫飯困來卽臥愚人笑我智乃知焉

(辨) 臨濟云く、佛法無用功處とは、凡そ法を求むる者は皆工夫を凝らす也、苟も工夫を用ゆるは意識常量にて觀念の法に過ぎず、然るに眞實の大悟は全く情識を離れて得る事なるが故に、無用功處と云なり、既に大悟して受用穩當なれば、祇是平常無事にて、屙屎、送尿、着衣、喫飯、困來打眠するのみにて何の工夫も要らぬ、愚人とは未悟の人を云、智者とは既に大悟したる人也、悟了同未悟とて大悟の人は却て平生何の理窟もなく、平凡なるを見て愚人は笑ふが、只だ大悟の人のみ能く知るなり。

○古人云向外作工夫總是癡頑漢

(辨) 茲に古人と云は懶山也、其歌に曰く兀然無事坐何曾有人喚向外不見工夫總是癡頑漢云々、我不樂生天亦不愛福田饑來喫飯困來即眠愚人笑我智乃知焉云々、扱臨濟が茲に懶山の語を引んとはあらず、説法の語勢にて思はず口に出された者にて、我説法の引證とされし者ならん。

○備且隨處作主立處皆眞

(辨) 備が能く眞正見解を得て、全身一箇の主人公と成り得れば、一切萬物我が爲に使はる、我終に物の爲に使はるゝ事なし、茶は我が爲めに渴を消し、飯は我が飢を救ふ爲に我前に來る、花は我が爲に咲ひ、柳は我が爲めに緑を献ず、大地を變して黄金と爲し、長河を攪て酥酪と爲すに至ては、都て自在

ならざるはなし、野の末山の奥にても、鬧しき時も靜かなる時も、我受用する處如此なれば隨處作主と云也、趙州が老僧使得十二時と云者亦如是、立所皆眞とは、我今日の所爲所作は、皆主人公の立所なり、着衣喫飯の處も悉く主人公の所作なれば、眞實不妄にして一の戲論なき故に、立所皆眞と云也。

○境來回換不得縱有從來習氣五無間業自爲解脫大海

(辨) 從來の習氣とは、生々世々此心に薰習して除き難き者を云、五無間の業とは、父を殺し、母を殺し、佛身血を出し、和合僧を破り、佛像聖教を燒棄する者は、五逆罪とて何れも無間地獄に墮る也、故に五無間と云、便ち間斷なく呵責を受けるの義なり、扱此の深き習氣も怖るべき無間業も、隨處作主立所皆眞なるに至ては、便ち解脫の大海となる也、其故は今世に於て大悟し、其當下に於て此身は佛身と換り、此心は佛智と變じたる以來、我智體は一顆の摩尼珠の明皎々たる如くなれば、習氣も罪業も附着すべき所なきに由る、依て解脫の大海となると云なり、五無間等の事、後に詳説す。

○今時學者總不識法猶如觸鼻羊逢著物安在口裏奴郎不辨賓主不分

(辨) 觸鼻羊とは、羊は類多けれども總じて觸鼻羊と云、其故は羊は眼力弱き者にて、食飼等も眼力にて見分る事なく、鼻に觸るゝ者を取り敢へず食ふと云事也、羊は且く措き、今時の學者は兎角に心

法を知らず、佛法と名くる上は何れも同一と心得る也、是れ恰も觸鼻羊の鼻に當る者を、能く辨別せずして食ふが如し、奴郎とは奴は従僕にて郎は主人なり、奴郎賓主とは善惡邪正と云に同し。

○如是之流邪心入道、鬧處即入不得名爲眞出家人、正
是眞俗家人。

(辨) 茲に邪心とは、眞正見解の外を云、縦令ひ殊勝に觀心觀法するも悉く邪心なり、是等の人が眞實道を得たりと思ふは皆情識理會なり、平生靜所に於て觀念する時は、佛法を得たるが如きも、觀念を罷めて鬧處に向へば、其向ふ所に心が移りて、初め得たる者は蹤跡もなし、然れば日用忙々中、又は死に臨したる時には、兼て修得せりと思ひし佛法も、何の靈驗もなき也、是れを鬧處即入不得と云也、此等の輩を眞出家とは云へぬ、却て實に俗家なり。

○夫出家者須辨得平常眞正見解、辨佛、辨魔、辨眞、辨僞、
辨凡、辨聖、若如是辨得名眞出家、若魔佛不辨、正是出一
家、入一家、喚作造業衆生、未得名爲眞出家。

(辨) 眞出家とは、既に眞正の見解を確得して、其眼力に由りて佛、魔、眞、僞、凡、聖を明白に辨別し得る底の人を云也、世の中には佛らしき魔あり、魔に似たる佛もあり、聖に似たる凡もありて數々人を惑はす、眞の出家たる者は能く辨知して惑はざるなり、若し此眼を有せざる者は半は出家にして半は在家なり、是れ便ち出一家也、是等の人は佛法に附會して、云ふべからざる業を作る衆生也、是

等を眞の出家とは云べからず。

○祇如今有一箇佛魔同體不分、如水乳合、鵝王喫乳、如
明眼道流、魔佛俱打。

(辨) 又た一種の佛魔同體にして、佛とも魔とも分け難き者あり、恰も水乳の分明ならざる如し、然れども明眼の人なれば、其同體の中に就て、能く異體を知つて是れ佛是れ魔と辨別する事、鵝の王が水と乳とを撰擇するが如し、如是辨得して佛魔共に截斷して除る也、是れ眞の出家者の家風なり。

○倘若愛聖憎凡、生死海裏浮沈。

(辨) 凡聖は是非なり、愛憎は取捨なり、是非差別の心あれば、到底生死を免るゝ事能はざる也。

○問如何是佛魔師云、爾一念心疑處是箇魔、爾若達得
萬法無生、心如幻化、更無一塵一法處々清淨、是佛然、佛
與魔是染淨二境。

(辨) 魔は總して十種ありと説くも、畢竟只爾一念心の疑が便ち魔也、萬法無生とは今日目前の森羅其形儼然たるも、只是れ空華陽燄の如くにして本來無也、故に萬法無生と云ふ、幻化とは爾が一心意識は縁に遇ふて刹那の間に千變萬化する時、幻の如くちらりつと現はるゝ迄なり、能く萬法無生の理を悟り、心は幻化の如しと了達すれば、更に一塵一法もなく、所々皆清淨なり、如是了達するを佛と云、佛と云ひ魔と云は畢竟染淨の二境までなり。

○約山僧見處無佛無衆生無古無今得者便得不歷時節無修無證無得無失一切時中更無別法設有法過此者我説如夢如化

(辨) 臨濟が殊に力を込めて説かるゝ所、實に有難し、從來大宗匠の説法も如是的確殊勝なる者なし、師が自分の悟得底を遠慮なく擧揚せられた、無佛、無衆生、無古、無今と説かれた所、眞實不安也、又た得る者便ち得とあるが、其得るとは何者を得るかとならば、這箇を得るなり、這箇は元來佛にもあらず、衆生にもあらず、古でもなく今でもない、又た得者とは這箇を得し人なり、不歷時節とは電光石火の間、間不容髮頓悟する事を云、一刹那の間に頓悟する者なれば、修もなく證もなく得もなく失もなしと云た、餘りと云へば無法の垂示のやうなれども、而も眞實不安也、果して廓然大悟する時は實に得る所なきなり、得る所なければ失すべき筈なし、故に無得無失と説かれた、又た無修無證と道たは次の如き意だ、此法元來自悟自得の法なる故に、人の指南按排を假らず、且つ自ら思惟工夫する事を須ひぬ者なるが故に無修と云た、得る時に得所なき故に無證と云ふ也、一切時中更無別法とは、臨濟の十二時中受用する所、此外に別の模様なしと云なり、設有法過此者云々は涅槃經の文也。

○山僧所説皆是道流即今目前孤明歷々地聽者此人處々不滯通貫十方三界自在入一切境差別不能回換

一刹那間透入法界逢佛説佛逢祖説祖逢羅漢説羅漢逢餓鬼説餓鬼向一切處游履國土教化衆生未曾離一念隨處清淨光透十方萬法一如

(辨) 臨濟云く、山僧の所説は只だ即今諸人の明歷々に、目前に聽法する底の者を説く也、此聽法底の者は所々滯りなく十方三界に通貫瀾論して、自在に出沒往來し、一切の境界に入て種々に差別すれども、終に礙へられざる也、不能回換とは、我心を引返す事はならぬ也、一刹那間透入法界とは、今此所より刹那を不歷して支那蒙古の果て迄も透入する也、逢佛説佛云々とは、聽法底の者が到る所に應ずる所、佛を説くべき所に於ては佛を説き、祖を説くべき所に於ては祖を説き、羅漢辟支餓鬼畜生に到る迄遺す事なし、向一切所遊履國土教化衆生とは佛、祖、羅漢、餓鬼各々の所依の國土に遍く遊行して、一々の衆生を悉く教化する也、未曾離一念とは、如し此十方世界に遊行して、所々に於て一々の衆生を化度する事、只だ一所の内にありとなり、隨處清淨とは一切に汚染する事なきを云、光透十方とは、此者虚靈不昧にして十方に通ずるを云也、萬法一如とは、一如は不一不異の義也、眞如の理は萬法と不同して然も亦た不異、森羅万象の中、只だ一つも這箇に似たる者なし、故に不同と云ふ、森羅萬象只だ一も這箇にあらずと云事なし、故に不異也、此段は臨濟事々無礙の用所也。

○道流大丈夫兒今日方知本來無事祇爲爾信不及念

々馳求捨頭、覓頭、自不能歇。

(辨) 備大丈夫兒自ら能く知れ、本來無事なり、喫茶喫飯の外別に何事かあるぞ、備等は是を信せずして、無事に事を生じて、演若達多が頭を見ざる如く、要らぬ造作工夫に渉る故に、工夫不能歇、何れの時休歇すべきぞ。

○如圓頓菩薩入法界現身向淨土中厭凡忻聖如此之流取捨未忘染淨心在

(辨) 圓頓菩薩とは圓教頓悟の菩薩なり、入法界現身とは和光同塵して、遍く所々に遊履して種々の身を現して、接物利生す、如此大乘至極の菩薩なれども、衷心只淨土の中にありて、凡を厭ひ聖を忻び、涅槃の大果に到らん事を期する也、是等は皆未だ是非取捨を忘れざれば、染淨の心猶ほ存する也。

○如禪宗見解又且不然直是現今更無時節

(辨) 無時節と云は、禪僧は本來無一物と受用する故に、胸中常に淡々として一物なし、只だ茶に遇ふては茶を喫し、飯に遇ふては飯を喫する迄の事なり、差し當る當念の外更に他念なければ、前を思ひ後を慮り、既に過ぎたるを慕ひ、未だ來らざるを期する事なくして、只だ差當る所を受用する迄なり、故に無時節と云ふ。

○山僧說處皆是、一期藥病相治總無實法

(辨) 一期とは一時也、一往の義也、臨濟の胸中實に一法なし、人が問へば答ふる迄なり、此方から教示する實法なし、只だ病に應じて藥を施すが如し、病未だ起らざれば常に藥を用る事なし、病癒れば又た藥を用る事なし、病む時に當て一往用ゆるのみ、恰も鐘の控くにあるが如し、若し鐘に聲ある者ならば、控つ人なくとも常に自ら鳴るべし、人が撞けば鳴り、撞かねば鳴らぬ也、臨濟の應機接物如是、只だ一往の事也、實に一の實法なき也。

○若如是見得是真出家日消萬兩黃金

(辨) 日消萬兩黃金とは、黃金とは佛性を指した、真正見解の人は全體が黃金なれば、起も黃金、居も黃金、往も黃金、還も黃金にして、日々千万無量の黃金を費し使ふなり。

○道流莫取次被諸方老師印破面門道我解禪解道辨似懸河皆是造地獄業

(辨) 取次は次第なり、善財の漸次に南遷すると云如く、次第に諸方の知識に遍參して、其所々で印可を得る也、印破面門とは、内證の邪正をも辨せず、人に遇ふて會釋追從に追從するを云、其様な印可を受て、我こそ能く禪道佛法を解すと云事なけれ、縦ひ能辨懸河の如しと雖ども、其云ふ所一實なし、故に生死を截斷する能はず、皆是れ造地獄の業也。

○若是真正學道人不求世間過切急要求真正見解若達真正見解圓明方始了畢

(辨) 真正見解を得んと思ふ學者は、世上の知識の罪過を穿鑿せず共、只だ自ら急に真正見解を求むべし、若し能く真正の見解を得ば、佛法は圓明に了畢すべきぞ。

○問如何是真正見解師云爾但一切入凡入聖入染入淨入諸佛國土入彌勒樓閣入毘盧遮那法界處々皆現國土成住壞空佛出于世轉大法輪却入涅槃不見有去來相貌求其生死了不可得便入無生法界處々游履國土入華藏世界盡見諸法空相皆無實法唯有聽法無依道人_レ是諸佛之母所以佛從無依生若悟無依佛亦無得若如是見得者是真正見解學人不了爲執名句被他凡聖名礙所以障其道眼不得分明

(辨) 爾ち真正て見解を得んと欲せば、只だ遍く一切所に於て入凡入聖入毘盧遮那法界能く着眼せよ、悉皆表現の語言のみにて一も實體なし、諸佛國土とは一佛所化の國土、十方世界に千萬無量あるを云也、一佛とは這箇也、這箇の眼に在て能く色を見、耳に在て能く聲を聴く、其眼其耳は是れ一佛所化の國土也、彌勒樓閣とは善財悟道の因縁に就て、指す所あつて名け彌勒と云ひ樓閣と云なり、是只だ心法を表現するに過ぎず、其事は他の註疏等に詳なり、毘盧遮那法界とは、毘盧遮那梵語に

て心の事也、此一心の境界を指示するなり、處々皆現國土成住壞空とは、凡そ佛ある處は所依の處あり、其所を國土と名るなり、扱既に國土ある上は成住壞空の四相なき能はず、此四相を劫と名くるも實は只だ一念の遷流變滅するを道ふなり、一佛出世八相成道して法輪を轉じ涅槃に入るとは、一念の成住壞空の四相あるを云也、左れば佛出世し涅槃すと云へども、終に去來の相あるを見ず、又た生死の相を見る事なし、如此見得するを無生法忍と云なり、無生法忍を得るを入無生法界と云也、既に無生法忍を得れば、佛の境界に流通するを所々遊履國土と云也、既に游履するに於て、廣く華藏世界に入りて、普く諸法の空相を見盡す也、華藏世界とは香水海中に千葉の大蓮華あり、此蓮華に二十重の世界あり、此娑婆世界は第十三重にあり、一々の世界に無量無數の須彌あり、無量無數の日月あり、此蓮華を總して名けて華藏世界と云、只是れ一法界を云ふ迄にて、此中の所有の國土、其國土中の諸法悉皆只だ名のみにて實體なし、只だ聽法無依の道人のみ實なり、是れを諸佛の母と云なり、無依とは山河大地森羅万象悉く本分に依て起るなり、此本分何に依て起ると云事なし、故に無依と云也、三世の諸佛も只此道人に依て生ずる故に諸佛の母と云なり、若し能く此無依を悟れば無依の外一物なし、故に佛亦無得と云也、如此一切盡く截斷して打成一片に無依の道人と成るを真正の見解と云也、今時の學者如此殊勝の事あれども、それを了達せず、只管聲名文句に執着して、凡聖諸法の名に礙へられて道眼遂に不明也、名に礙へらるゝとは、地獄と云ひ天堂と云ひ煩惱と云ひ菩提と云ふ等、皆凡聖の名なり。

○祇如十二分教皆是表顯之說學者不會便向表顯名

句上生解皆是依倚落在因果未免三界生死

(辨) 十二分教とは一切の經と見て不苦、是れ悉く表顯の説也、例之は我か智を表して文殊と云ひ、我佛性を表して彌勒と云ひ、我萬行を表して普賢の毛孔刹と云が如し、皆表し顯はす者也。

今人此表顯名句に向て解をなして彌勒と云菩薩がありて、今は兜率の内院にあり、五十六億七千萬歳の後、出世さるゝと思ふ、彌勒も兜率も内院も五十六億七千萬歳の後も、出世も夫れ相應の意義ありて指示する者なるを、夫れども知らざる也、依倚落在因果とは、依倚は因循の義なり、師たる者道眼なき故に、表顯の名句上に就て解をなし、從て學者も因循して、何れも因果に落在するなり、因果とは、例之は善財童子が最初文殊に相見して、十信を證するは因也、第二に德雲比丘に參して、發心位を證するは果也、此果便ち又た因と成りて、第三に海雲比丘に參して治地位を證するは果也、凡そ名句の上に就て解を爲す者は、一名一句の上に何れも修因得果するなり、如此迂曲を重ねては、徒らに日月を費して、生死截斷は成らぬ也、是等は永く三界の生死を免るゝ能はず。

○爾若欲得生死去住脫著自由即今識取聽法底人無形無相無根無本無住處活潑潑地應是萬種施設用處祇是無處所以覓著轉遠求之轉乖號之爲秘密

(辨) 生死を脱得し、去住自由を得んと欲せば、只能く此聽法無依道人を識取せよ、此道人は形なく相もなく、心眼共に縁する能はず、根本もなく、住所もなく、活潑潑地なり、應是萬種施設とは

無形無相と云とも、而かも萬事に相應して、作用施設する事活潑々地なり、便ち生きて働くを云也、日常手足の働くも、無依道人の施設する作用也、便ち活潑々地なり、傀儡も執提運奔の作用あれども靈用にあらざれば活潑々地と云ひ難し、用處無處とは、無依道人の施設が、種々無量に作用すれども何者が爲さしむるか作者なき也、即ち自ら知らぬ也、只だ色に逢ては即ち見、聲に逢ては便ち聽く迄也、其用を施す所は、分明に我に近く知り易けれども、之を求めんと擬すれば、彌々遠く、愈背いて人の知る事難き故に秘密と云ふ。

○道流爾莫認著箇夢幻伴子遲晚中間便歸無常備向此世界中覓箇什麼物作解脫覓取一口飯喫補毳過時且要訪尋知識莫因循逐樂光陰可惜念念無常麤則被地水火風細則被生住異滅四相所逼

(辨) 夢幻伴子とは即ち我此色身也、色身の世に在る事は夢幻の如し、莫認著は此夢幻伴子を認めて常住と思ふなど云也、遲晚中間とは、遲晚は早晩の義、中間は早と晩の間を云ふ、何れにも必ず無常に期する也、左れば此世にあるは束の間也、依て此短き命脈間に於て、一刻も早く解脫を得る事肝要ぞ、備試みに道へ、此世の中に何物を認めて解脫とせんや、爾ち解脫を知らんと要せば、日々三飯を得且つ毳衣を補つて、飢寒の憂なくんは百事を抛ち、早く知識を參尋して、此事を究明して解脫を得べし、徒らに世の富者等と馴れ親みて、花月に耽ること勿れ、因循とは相慣の義なり、光陰は

矢の如く移り、人は念々無常に近くなり、痛く光陰を惜み早く解脱を得べし、人の無常に近づく所は塵相は地水火風次第に分散して、齒が抜け眼が疎く成り、頭髮白化する等也、是は色身の外相に屬する方を云へ、又細相を云へば、念々に生住異滅して、暫くも留まらぬなり、是は心念の上なるが故に外見に現はれず、故に細相と云ふ、生住異滅とは、例之は花を見て花の念生する所便ち生なり、暫く此念を花に滯る所是れ住なり、轉して月を見る所便ち異也、此に於て花の念の去るを滅と云也、念々如是遷流して須臾も留まらざる也、所逼とは、此四大相に此身を逼られて無常に到る也、畢竟色心共に刹那々に衰へ行く事也。

○道流今時且要識取四種無相境免被境擺撲

(辨) 今時の道流たる者は、能く四種無相の境を知るべし、此境は心内に在るも我が本心にあらず、外物なり、外物なりと確知すれば、擺撲せられぬ也、若し外物と知らざれば、境に轉せられて終に解脱を得る事なし、次段に詳説す。

○問如何是四種無相境師云備一念心疑被地來礙備一念心愛被水來溺備一念心嗔被火來燒備一念心喜被風來飄

(辨) 四種無相境とは、疑、愛、嗔、喜の四種なり、此四種は心内の相也、外形に現はれざる故に無相と云、備か一念心疑被地來礙とは、備か一念遲疑して決せざる時の如んば、是れ備か心内の地大

が現はれて窒礙をなす者也、備一念心愛被水來溺とは、備か愛欲心の貪亂するは、是れ備か心内の水大現はれて没溺する者也、愛は水なり、男女交會して歡極る時、姪水を流す事其驗也、備一念心嗔被火來燒とは、備か一念怒る時は面赤く身心熱するは是れ備か心内の火大の所爲也、備一念心喜被風來飄とは、備か一念喜ぶ時、身心動搖するは是れ備か心内の風大現はれて飄颻する者ぞ、目前有相の四大、心内無相の四大、元來一體不異也、若し人第八識の内に器世間あるを知らば、目前心内共に本識の内なる事を知るべし、若し能く之を知らば、内外の四大、本一體なることを確知すべし。

○若能如是辨得不被境轉處々用境東涌西沒南涌北沒中涌邊沒邊涌中沒履水如地履地如水緣何如此爲達四大如夢如幻故

(辨) 四種無相の境は内に屬するも、是れ只た八識田中の地水火風にして實に外境也、境なるが故に無智にして別知識の能なし、備をして了解せしむる者は、只た是れ無依道人也、若し此道人を須たすんば、地大何ぞ疑はん、風大何ぞ能く喜ばん、備ち試に云へ、備か即今何事か疑ふ時、是れ何物か疑ふや、便ち是れ道人地大を取つて用ゆる也、又た備か何事かに逢ふて喜ぶ時、是れ誰か喜ぶや、便ち道人風大を取て用ゆる也、未悟者は此道人あるを知らざるが故に、四大が直に能く疑ひ、能く喜ぶと思へり、是れ外境を認めて本心となす也、不被境轉處々用境とは、此道人は其體常に動着する事なく、卓立して、物の爲に轉せらるゝ事なし、故に云ふ也、處々用境とは、上説の如く地大を取て

疑はしめ、風大を採用して喜ばしむる事、何時も自在なるを云ふ也、東涌西没とは、此道人が境を用ゆるの自在なる事、恰も水練達者が自在を得たるが如く、此所に没し、彼所に出で、又た出るかとすれば、忽ち沈む、東西南北中央邊際出沒自在にして、水を踏む事平地の如く、平地を行く事水を潜るが如し、此道人の上には水陸の差別はなき也、何が故ぞとなれば、四大本空にして夢幻の如く、之れを取るに量りなき故也。

○道流備祇今聽法者不是備四大能用備四大若能如是見得便乃去住自由

(辨) 此段と上述の所を結する也、備四大とは備か疑愛瞋喜を云、諸人未だ此聽法底の本心を知らず故に疑愛瞋喜を認めて本心と爲す也、故に臨濟が特に指示して、備か聽法底の者は、疑愛瞋喜と各別なれば、不是備四大と云也、聽法底の者は是れ備が一身の主人公也、疑愛瞋喜は備が一身内の什器にして、主人是れを取て自在に使用するぞと云へり、如此見得便乃去住自由とは、備能く主人公を會得して、打成一片なれば、日用自在ならざるなし、去住とは日用行住坐臥也。

○約山僧見處勿嫌底法備若愛聖聖者聖之名有一般學人向五臺山裏求文殊早錯了也五臺山無文殊備欲識文殊麼祇備目前用處始終不異處々不疑此箇是活

文殊備一念心無差別光處々總是眞普賢備一念心自能解縛隨處解脫此是觀音三昧法互爲主伴出則一時出一即三三即一如是解得始好看經

(辨) 臨濟の用所の如んば、勿嫌底法、左れば好む底もなし、是れ眞正見解の上には取捨差別する所なき也、備諸人は未だ取捨の心あり、故に凡を厭ひ聖を愛する也、聖者聖之名とは、總して聖と云は我が具する所の聖靈を名けて聖と云也、菩薩衆を云に非ず、然るを人は、孔子老子等を聖人と云様に思ふて、文殊普賢等を聖者と云也、故に無着文喜禪師は五台山に登て、文殊を求めて相見する也、是れ大に錯れり、元來五台山には文殊なし、無着の求心、切なる故に、願力に乗して文殊を見る也、畢竟唯心所見にして、目を捏て空華を見れるが如し、故に佛も心存すれば佛國聖境冥現すと云へり、若し眞の文殊を知らんと欲せば、外に求むべからず、備が目前の用所にあり、始終不異、所々不疑とは、備か始め山と見た者は何時迄も山也、始め川と見た者は長へに川也、一見便見して、決定して疑はざる所の、備の智が乃ち文殊也、所謂活文殊也、無着が五台山にて相見せる文殊は假文殊なり若し眞の普賢を知んと欲せば、備か一念心の無差別光是なり、無差別光とは、備か目前千差万別の境に對して一々照了する所を無差別光と云也、此心若し差別あらば、普く照す事能はざるべし、虛靈不昧にして、差別なき故に、明鏡の漢來漢現胡來胡現するが如し、此心を名て普賢と云也、若し眞の觀音を知んと欲せば、備か一念心の拔苦與樂する所皆是れ觀音也、自能解縛は拔苦なり、隨處解脫と

は興樂也、飢來喫飯困來打眠する底、是れ便ち觀音の圓通三昧也、文殊、普賢、觀音と云は、一身の上に法身、般若、解脱の三德秘藏あるを云也、故に互爲主伴、出則一時出、一即三、三即一と云也、法身の出る時、般若も解脱も從て出で、般若出る時、法身も解脱も從て出づ、専ら出る者を主とし、隨て出る者を伴と云ふ、茲に三種の科を分つも、畢竟是一心なるが故に、一即三、三即一と云ふ、如此見得せば、終日教經に眼て晒すとも、教意に縛せらるゝ事なし。

○師示衆云如今學道人且要自信莫向外覓總上他閑塵境都不辨邪正祇如有祖有佛皆是教迹中事

(辨) 學人只能く自心を信せよ、外に向て他の古人の閑塵境の中に求る勿れ、閑塵境とは、一切の教迹也、一切の教迹は只是れ閑言語、閑文字のみ、此中に就て邪正是非を詮せんとするは是非共に非也恰も魚の目に水を求むる如し、如何が是非を辨すべきぞ、凡そ祖佛の名字ある所は皆教迹也、毫も佛祖の援助を借らず、只だ自心を究明せよと也。

○有人拈起一句子語或隱顯中出便即疑生照天照地傍家尋問也太忙然大丈夫兒莫祇麼論主論賊論是非論非論色論財論說閑話過日

(辨) 茲に師家ありて、一語を擧示する時、其語或は隱顯の中より出来る、隱とは密語、謎の如くに云ふ、顯とは陽に云ふ、學者其語を聞て即時合點成らずして、種々疑を生ずる也、照天照地傍

家尋問也太忙然とは、疑て普く尋問する故に、太だ忙然即ちいぞがしき也、爾等は悉く大丈夫たり、苟くも彼の一句語を聞て、是は主人公か、將た又た賊機關の方なるか、是か非か、是れは色法又たは財法、賊法也など、穿鑿すること勿れ、只能く自心を究明せよ、自心の外は悉く傍家にして、何事を搜索するも皆戲論也、主人公と云ひ機關と云ひ只是れ名也、言句の是非を穿鑿するは、只是れ聲を究明する者也、色法財法は皆外物也、財は資生の物にして法身を增長し、佛土を莊嚴する皆財也是等の用にも立たぬ口を披て、徒らに日を費すこと勿れとなり。

○山僧此間不論僧俗但有來者盡識得伊任伊向甚處出來但有聲名文句皆是夢幻却見乘境底人是諸佛之玄旨

(辨) 臨濟云く、山僧は僧俗を問はず、纔かに門に入れば早く來所を知るなり、何程威高く構へ超佛越祖の談を爲し來るも、聲名文句の中より來る者は、皆夢幻の如しと知るぞ、乘境底人とは、聽法無依の道人と同じ、例令は如何なるか是れ祖師西來意と問ふ時、祖師西來意は境也、如此問、者は這箇なり、庭前柏樹子と答ふる時、柏樹子は境也、如此答者は這箇也、此境に乗して這箇の出來るを乘境人と云也、縱令聲名文句の中より來る者も、聲名文句こそ境なれ、其れに乗し來る者は無依道人にして境にあらず、只能く乘境人を知るべし是れ諸佛の玄旨也。

○佛境不能自稱我是佛境還是這箇無依道人乘境出

來

(辨) 佛境とは佛體也、是れ頼耶の相分也、悟道底の人に見らるゝ佛體也、人に見らるゝ故に境と云ふ、佛境不能自稱我、是佛境とは、佛境は自ら名乗り出て我は是れ佛境なりと、人に告る事はなれども、境に乗して出来る故に、人を見て佛と知るなり。

○若有人出來問我求佛我即應清淨境出有人問我菩薩我即應慈悲境出有人問我菩提我即應淨妙境出有人問我涅槃我即應寂靜境出境即萬般差別人即不別所以應物現形如水中月

(辨) 此段は乘境人を説明する也、我に佛を問へば、我即ち來機に應して佛を答へ、菩薩を問へば菩薩を答へ、菩提を問へば菩提を答へ涅槃を問へば涅槃を答ふ、清淨と云ひ、慈悲と云ひ、淨妙と云ひ、寂靜と云は、佛に因み、菩薩に因み、菩提に因み、涅槃に因みて云ふ迄也、清淨にも不淨にも慈悲にも慳貪にも拘はる所なきなり、故に如何是れ佛と問へば、乾屎橛と答へ、如何是れ大悲菩薩と問へば、日殺千羊と答る也、只だ乘境人を明さんが爲に、應境と云也、古今人あつて如何なるか是れ佛と問はん、截斷紅塵一水一溪と答へば、是應清淨境出者也、如此佛に由て清淨底を答るも、其清淨の所には全く用なし、只だ如此答る所の一聲、是れ便ち本有の佛性也、此佛性を知らせん爲に、一聲を抛出する也、此の一聲の佛性が、一溪の水に乗して出来るを、乘境人と云也、淨妙とは清淨妙

法也、寂靜とは寂滅無爲也、境即萬般差別人即不別とは、如何是れ佛と問へば、或は麻三斤と答へ、或は殿裏底と答ふ、其境は千差萬別なれども、其境に乗し來る所の佛性は、只一枚にして替る事なき也、例之は一輪の月の萬水に影を現するが如し。

○道流備若欲得如法直須是大丈夫兒始得若萎萎隨々地則不得也夫如甕噀之器不堪貯醍醐如大器者直要不受人惑隨處作主立處皆眞但有來者皆不得受

(辨) 臨濟云く、備ち若し祖宗門下の榜様の如く、大悟休歇せんと欲せば、大丈夫の氣概を要す、萎々随々とは、唯々諾々と云に均しく、心を委ねて物に随ふ義也、日夜人の言に従ひ、一一諾する分際では大休歇は成らぬぞ、甕噀の器とは甕の破るゝ聲也、甕の字甕なれども甕噀の時は甕にあらず、種々の字義の説明あるも茲には略す、畢竟聲破の義となる也、扱噀の器と云は、瓶などの缺隙ある物なり、打つも響きの續かざる者也、斯様の器には醍醐味の上品は容置せられぬ也、萎々随々底の人物は、佛法の大器には成らぬぞ、如大器者直不受人惑とは、大器とは大丈夫を云、是れ佛法の大器也、不受人惑とは、大丈夫たる者は卓然獨立する故に、人に誑かる事なし、彼の萎々随々底の者は、人言を其儘に受る故に、邪師邪友に教壞せられて一生を終る也、大丈夫の漢は何所にあつても人の下には立たず、第一座に住して施爲運動する所、一も戲論にあらざる故に、隨處作主立

所皆真と云也、何者か来て犯せとも其惑を受る事なき也。

○備一念疑即魔入心如菩薩疑時生死魔得便但能息念更莫外求物來即照備但信現今用底一箇事也無

(辨) 備が一念疑かに疑へば、便ち魔が備の心に入たる也、其故は一念の疑より千萬の疑を生じて、竟に佛道を障ふ、疑心便ち魔也、如菩薩疑時生死魔得便とは、小乗の菩薩は菩提を修すと雖も、佛果を得る事は、三大僧祇の生死を歴て以後の事と思惟して、一念即覺の理を不知隔歴長遠の思を爲して退窟し、種々の疑を生ずる也、人の指南に任せて修行をすれども、三大僧祇の間相違なく修行成就して、終に佛果を得んこと無覺束と疑ふ也、一念疑かに疑へば、是れ生死の魔が便を得て我心に入る者也、息念とは疑を息る也、疑息めば其所に於て即無事也、何の外に求る事もなき也、物來れば即ち照すとは鏡の物を照すが如く、無心にして境に對する迄也、備但信現今用底とは聽法底の者を能く信得せよと也、一箇事也、無とは、聽法底の者を能く信得すれば、物來れば即ち照して、喫茶喫飯するまでにて、別に何事もなき也。

○備一念心生三界隨緣被境分爲六塵備如今應用處欠少什麼一刹那間便入淨入穢入彌勒樓閣入三眼國土處々遊履唯見空名

(辨) 備が一念疑かに生ずれば、此念三界の境に隨て轉する故に、境に分れて六種の塵勞となる、

楞嚴に元是一精明分作六和合と云に同し、既に六種の塵勞となれば、應用缺けたる所なし、故に能く普く所々に入る也、入淨とは淨土に入る也、入穢とは地獄に入る也、入彌勒樓閣とは善財所悟の境界也、入三眼國土とは三德秘藏を云也、備ち六種塵勞の心を以て、普く入て能く看よ、淨土と云ひ、地獄と云ひ、樓閣と云ひ、三眼國土と云は悉く表顯の名のみにして、一も實體なき也。

○問如何是三眼國土師云我共備入淨妙國土中著清淨衣說法身佛又入無差別國土中著無差別衣說報身佛又入解脫國土中著光明衣說化身佛此三眼國土是依變

(辨) 三眼國土とは、法身、般若、解脫の三德秘藏を云也、法身とは佛性の本體、清淨無穢にして永く改變なきを云也、般若とは梵語也、智慧と譯す、萬德圓滿の佛智の妙體を云也、是れ三大僧祇の修行の果報に由て感得する所なれば、又是を報身とも云也、解脫とは般若の用也、此用斷德あつて變化自在にして、能く一切の惑、業、苦を斷盡するが故に、解脫とも化身とも云也、此法、報、化の三種に、各々身佛の名あるは、何れも常樂我淨の四德を具する故に、身と云ひ佛と云也、三種各德を具ふる故に三德也、是れ如來の秘密藏なるが故に、秘藏と云也、此三德秘藏を三眼國土と名する事は、此三種分れて云時は、其體各別にして不混なれども、合して云時は只是一心也、然れば一即三、三即一にして、伊字の三點の如く、摩醯首羅が三眼の如し、故に譬へて三眼國土と云也、國土とは三身佛の依

止する所なり、爾ち今三眼國土を問ふ、我爾が爲に淨妙國土を明さんと欲して、微妙清淨なる種々の言説を以て、法身佛を説て淨妙國土を莊嚴し、無差別國土を明さんと欲して、平等にして差別なき種々の言説を以て、報身佛を説て無差別國土を莊嚴し、解脱國土には、光明照灼底の種々の言説を以て化身佛を説て解脱國土を莊嚴す、例之は茲に名優ありて、現世になき妖怪に扮し且つ其れ相應の背景裝飾並に音楽等を以て、其妖怪の實在なるが如くに莊嚴する時は恰も實在の如く見へ、人をして毛骨寒からしむる如し、其實斯様の妖怪は存在せざるなり、只た其扮裝舉動背景等の仕成しに由て、實在する如くに見ゆる也、三眼國土も法身佛化身佛も元來無也、只是れ一心の上に種々の名目を立たる者也、淨妙國土とは微妙清淨の法身佛の所依なる故に云也、無差別國土とは萬德具足して圓滿平等なる報身佛の所依なる故に云也、解脱國土とは一切の繫縛を度脱する底の化身佛の所依なる故に云也、清淨衣とは、清淨法身を説んとする時は、其用處の言句模様皆清淨底也、此模様に加ふるに、外に向て種々補綴して法身佛を莊嚴す、外を飾る故に衣と云也、内證は只た一佛性なれども、種々裝束して法身佛と爲す也、無差別衣とは、平等圓滿にして差別なき言句模様を以て、種々に裝束する也、光明衣とは、觀察の智光歷々分明に群昏を照破する底の言句模様を以て、種々に裝束する也、此三眼國皆土是依變とは、此依字は所依の依にあらず、依通の依なり、此の故に古人云、身依義立、土據體論、法性身法性土明知是建立之法、依通國土と云は此段を釋する者也、元來只一佛性なれども、此性萬法の根本にして種々の妙義を含む、其の常樂我淨の四徳を含む所を見立て、法身と云ひ、化身と云也、是に依て其身の依止する所を建立して、三眼等の國土を變現する也、故に此國土は元來

本有眞實の者にあらず、只だ假りに義に依て人作を以て變現する者也、故に依變と云也。

○約經論家取法身爲根本報化二身爲用山僧見處法身即不解説法

(辨) 教者は法身を體とし、教化の二身を用として、種々に補綴して左ありげに説くも、教者の唱る所の佛は、終に説法した事はなき也、只た名のみ佛にて眞の利益なき也。

○所以古人云身依義立土據體論法性身法性土明知是建立之法依通國土

(辨) 臨濟は華嚴合論の語を引て自ら説く所を證する也、身依義立とは、三身の名を立る事は、一佛性の上に三身の名を立つべき、三段の義あるを見て、身依義立と云也、土據體論とは、鉢は三身の佛體也、既に體あれば其所依あり、便ち其所依を國土と云也、故に國土は三身の體あるに由て論ずる也、法性身とは便ち三身也、法性土とは即ち三國土なり、恰も天文學者が天に度を配する如く名相なき所に假設的に三身三土の名を附けたる也、三身なければ三佛土も勿論なし、悉皆人爲の作にて、三身を立て以て所依の國土を立る也、是れ人爲にて義理を通せん爲に、依て建立したる者なるが故に、依通國土と云ふ也。

○空拳黃葉用誑小兒、蒺藜菱刺枯骨上覓什麼、汁心外無法內亦不可得求什麼物

(辨) 兒の啼く時、空拳を見せて何物をか與へんとて、木葉を示して黄金と偽りて兒を慰むる如く、凡夫は賺さん爲めに、只一往の方便として三身三土を説く迄也、蒺藜は藥草也、其實三角にして人を刺す、菱も人を刺すに依て菱刺と云ふ、刺は針也、此二種共に草なれども、茲には草にあらず、軍陣の時に敵を防ぐ所の逆茂木也、依て備さには蒺藜菱刺と云、拈此蒺藜菱刺枯骨等を、如何程絞るとも汁は出ぬ物ぞ、教者の説く所の佛は、只た名のみにて説法度生の利益はなき也、然るを若し教經文字に就て利益を求めば、恰も蒺藜菱刺枯骨を絞搾して汁を得んとするが如し、畢竟心外無別法にして、而も心も亦不可得なれば、三身三土もあらばこそ、内亦不可得とは心もないと云也。

○備諸方言道有修有證莫錯設有修得者皆是生死業
 備言六度萬行齊修我見皆是造業求佛求法即是造地
 獄業也求菩薩亦是造業看經看經亦是造業佛與祖師
 是無事人所以有漏有爲無漏無爲爲清淨業

(辨) 備等諸方此道有修有證と云ふは大に錯れり、心外無法内亦不可得なれば、何の修すべきも證すべきもなし、縦ひ修し得る事あるも悉く生死の業也、其故は皆眞道にあらずして白水練なる故に、舌頭に生死を離ると雖ども、實に脱離するは一人もなき也、又た菩薩が六度萬行を修すると云も、我は凡夫が生死の造業也と云ふ、拈又た佛と稱し祖師と稱して尊敬さるゝ人は外てはない、故是れ無事の人なり、何の求むる所もなく喫茶喫飯迄なり、忻ふ事もなく、厭う事もなき故、有爲も無爲も有漏

も無漏も、其事々物々、心に作者なき故に、悉く清淨業也。

○有_二一般瞎禿子飽喫飯了便坐禪觀行把_二提念漏不令_二於起厭喧求靜是外道法祖師云備若住心看靜舉心外照攝心内澄凝心入定如是之流皆是造作

(辨) 瞎禿子とは無眼の僧也、無髮を禿と云、飽く迄食を食りて坐禪觀行する時、念漏の起らぬ様に防いで、閑所を厭ひ靜所を求め、木偶のやうに成りて居る類は、皆是れ外道の法にして佛法にあらず念漏とは念は妄念也漏は有漏也、有漏とは煩惱を云、總して有漏とは有の漏也、漏は漏ありと云にはあらず、有は三有とか、二十五有とか、何れも皆因果不亡なるを有と云也、又た無漏とは無の漏にあらず、煩惱を斷盡して有漏の心なきを云、住心看靜とは、流注の心を押へて一念も不動なり、看靜とは默然たる内に於て、寂滅の境界を見て、眞實の思を爲して喜ぶを云也、舉心外照とは心を起して外境に對する也、攝心内澄とは妄念を收めて無念に爲るなり、凝心入定とは心住する所ありて、一片に凝りて居るを入定と云也、是れは皆坐禪觀行の體あり、古への祖師も是れ何の造作ぞと云はれたぞ。

○是備如今與麼聽法底人作麼生擬修他證他莊嚴他
 渠且不是修底物不是莊嚴得底物若教他莊嚴一切物
 卽莊嚴得備且莫錯

(辨) 臨濟云く上述の坐禪觀行皆佛道を修得し佛心を證し法身を莊嚴せんが爲也、是れ實には不要の造作ぞ、何程坐禪觀行するとも、厭、喧、求、靜、心を住して靜を見、心を攝めて内澄すとも、有心を以て求めば了期あるなし、莊嚴とは四種瓔珞莊嚴と云あり、戒莊嚴、三昧莊嚴、智慧莊嚴、陀羅尼莊嚴也、菩薩此四種の法を以て法身を莊嚴する事、世間の瓔珞を以て身を飾るが如し、佛と云ひ法身云は、只此聽法無依の道人也、此道人何と修證すべきぞ、何と莊嚴すべきぞ、彼れは修證せらる、者にあらず、莊嚴せらるべき者にあらず、是を強て修證莊嚴せんとは要らぬ造作也、若し此聽法底の物をして莊嚴せしめば、一切萬物莊嚴を漏す事はない也、花を莊嚴して色香を生し、月を莊嚴して光明を現し、鳥を莊嚴して能く飛ばしめ、獸を莊嚴して能く走らしむ、佗は如此一切の物を能く莊嚴すれども、人は佗を莊嚴する事は成らぬ也、錯て佗を修證し莊嚴せんと思ふべからず。

○道流備取這一般老師口裏語爲是眞道是善智識不思議我是凡夫心不敢測度佗老宿

(辨) 備は這般の宗師の説く所を實と聞て、眞の佛道也、是れ眞實の善知識、不可思議の道人、我は元より凡夫心なれば、彼れ老宿の上を測度する事は成らぬと思ふて、彼老宿を向上に思ふ可らず、彼老宿の云ふ所悉く信すべからずとなり。

○瞎屢生備一生祇作這箇見解辜負這一雙眼冷噤噤地如凍凌上驢駒相似我不敢毀善知識怕生口業道流

夫大善知識始敢毀佛毀祖是非天下排斥三藏教罵辱諸小兒向逆順中覓人所以我於十二年中求一箇業性如芥子許不可得

(辨) 瞎屢生は瞎禿子と同一盲目禿體の漢也、這箇見解とは彼の老宿の語を信する底の見解也、辜負這一雙眼とは、備が娘生の眼の儘なれば、何の過まる事もなければ、邪師に誑されて自己の眼に辜負する也、冷噤々とは寒氣に口を閉られて語る能はざるを云ふ、凍凌上驢駒とは、凍りの上を歩む驢駒は滑走る故に一切歩み得ぬ也、備等が冷噤々にして進語する能はざることは、凍凌上の驢駒が進む能はざる如し、備等が尊敬して善知識と稱する者を、我は口に任せて毀る也、尋常人を誑るは口業の罪なれども、我は少しも怖れず、凡そ善知識たる者は毀佛毀祖天下の老和尚を是非し、三藏教を排斥し、諸方の小兒の如き者を罵辱して、順逆の中に向て覓人も、向逆順中覓人とは、我れ口に任せて人を毀る時、我と争て是非を詮じ、或は逆ひ、或は我を折て我に順ふ者は一見所ある者ぞ、此中に於て眞實見込ある者を物色する也、始終唯々諾々たる者に本物はないぞ、我十二年以來は佛法すら一點もなければ、何程人を誑るとも口業は芥子程も無き也。

○若似新婦子禪師便即怕趁出院不與飯喫不安不樂自古先輩到處人不信被遞出始知是貴若到處人盡肯堪作什麼所以師子一吼野子腦裂

(辨) 新婦子禪師とは、初婚の花塚の如き禪師と云義也、花塚が夫や舅姑に氣兼ねして、容易に物を得云はず、動もすれば食を與へず、便ち不與喫飯で追出さるゝことを恐れ、便ち怕趁出院で始終不安不樂也、今時の禪師等は、何れも佛法に於て確信なき故に、自由を働く事なき也、先輩の大機大用を具る人は、到る所却て人の信仰を受る事なく、動もすれば趁出さるゝ也、其故は率直に行ふて、人を輕視するに由り、人に呵せられて果す也、是等は必ず貴人と知るべし、被逐出は遠く去るの義也、即ち擯出せらるゝを云、若し是に反し到る處撥を合せて、人の機嫌を取る者は、實に膺甲斐なき者ぞ、彼の大丈夫の奮迅自在獅子の如くなる者は、常住人に呵せられて、頭を擧る場合なきも、いざ鎌倉と云時に一吼すれば、曾て威張つた野干の輩は忽ち腦裂する也。

○道流諸方說有道可修有法可證爾說證何法修何道

(辨) 諸方に佛道を修行し、佛法を證すると云事は人の常に云事也、然らば備道へ、其法は何ぞ、其道とは何ぞ、畢竟法も道もあらばや。

○備今用處欠少什麼物修補何處後生小阿師不會便即信這般野狐精魅許他說事繫縛他人言道理行相應護惜三業始得成佛如此說者如春細雨

(辨) 凡そ物を修理し修行するは、不足の所を補ふ者也、備ち日用應縁の所に於て無依の道人出で、備が爲に用を爲す事悉く具備して一の缺陷なし、備ち何れの所を補はんと欲して修行するぞ、修せず

とも既に備が上に缺けたる所なき也、今時の少師是を知らず、野狐が種々の事を説き聞かせて、其説法の中に人を捕へ置ひて云ふ、只今こそ理行共に應じたり、此猶も身口意の三業を能く慎まば便ち成佛也と許可するを聞て信仰する也、許佗とは這般の野狐精が學者を許可する也、今諸方に如此説法する者、春の細雨の如く多き也。

○古人云路逢達道人第一莫向道

(辨) 古人は六祖の弟子本淨禪師也、達道の人とは悟了同未悟、大休歇底の人也、此人は飢て喫し困して眠るのみの事にて、何所を捉へて是こそ道よと云所なき也、晝夜に續き施爲運動する所、間不容髮只一枚に道ふ也、故に取り立て、是れが道と云所なし、左ればこそ達道人に逢ふて道の沙汰は無いぞ。○所以言若人修道道不行萬般邪境競頭生智劍出來無一物明頭未顯暗頭明

(辨) 此四句は石頭の頌也、一二の句は若し人道を修せんとして道を修せば、永く行はる可らず、其故は其行はんと思ふ心、其修むる所の心皆妄念也、妄念は道にあらず、萬般邪境競頭生とは、道を行はんと思付て、種々の邪境が不意々々と突發する也、邪境とは邪法也、邪法とは妄念の爲す所皆邪法也、念佛、念法、坐禪、觀法凡そ一切の馳求心、却て是れ障道の邪法也、只だ道は無心なれば自然に行はるゝ也、天何言哉四時行焉地何言哉萬物生焉、是れ大道の自然に行はるゝ者也、然るを義學法師の輩、一生馳求の心に縛殺せらるゝ者、驢年にも道を得べからず、智劍出來無一物と

は、祖師門下教外別傳の見性大悟と云は、一切馳求の心を離れて電光石火の中に於て廓然大悟する事也、如此して得る所の吹毛劍を智劍と云也、一度此智劍を得れば、一切萬物悉く截斷する故に無一物と云也、明頭未顯暗頭明とは、既に大悟して性地明白なる事を得るかとするれば、平生の暗所は即ち既に何所へか去て、只だ一枚に明了なる也、其仔細は明の來る暗の去と同時に、如此明了にして休歇無事なれば、道を行はんと思はずとも、自然に行はれて天の何も言はず萬物を生ずるが如し。

○所以古人云、平常心是道、大德覓什麼物、現今目前聽法無依、道人歷々地分明、未曾欠少、爾若欲得與祖佛不別、但如是見、不用疑誤。

(辨) 古人は南泉也、趙州問南泉如何是道、南泉云平常心是道云々、平常の心とは着衣喫飯する底の心也、總じて此平常心は道と云心字は要なし、平常是道と云べし、爾等が修行して求る所は何事ぞ、道を求めるにあらずや、道ならば修行せず共爾が上に不足は無き也、爾が只今目前に聽法する底の無依の道人、歷々分明にして爾が爲に用を爲す事、少しも缺る所なし、缺たる所もなきに修行するは要らぬ造作也、爾若し佛祖と一般ならんと思はゞ、只如此受用すべし、我今如是云所は便ち佛祖の道也、疑ふ事勿れ、誤て會する事勿れ。

○爾心々不異名之、活祖心若有異則性相別、心不異故、即性與相不別。

(辨) 此段は無差別の心を示す也、心々不異とは能く受用し得て、佛性一枚の作用なれば、煩惱と菩提と不異、生死と涅槃と不異、一切萬法總て差別なし、如此受用する人を活祖と云也、古の祖師天を喚て地と爲し、西を呼て東と爲して、活潑々地にして拘る所なき底の人を活機の祖師と云也、今人なり共如し、是受用する人は活祖なり、心若有異則性相別とは、爾未だ一枚に受用する能はず、心が二邊に涉つて煩惱と菩提と異り、生死と涅槃と異なる時は、是れ差別の心にして、心有異者也、性相別なる者也、性とは常住不變にして、形なき底の心なり、相とは形ありて生滅する者なり、煩惱と云ひ菩提と云ひ、邪と云ひ正と云は心の形ある者也、是れ相也、一切色法凡て皆相也、活祖する人は心々不異にして、性相の差別なし、故に日用應縁の所大自在也。

○問、如何是心、心不異、處師云、爾擬問早異了也、性相各分道流、莫錯世出世諸法、皆無自性、亦無生性、但有空名、名字亦空、爾祇麼認他閑名、爲實大錯了也、設有皆是依變之境、有箇菩提、依涅槃、依解脫、依三身、依境智、依菩薩、依佛、依爾、向依變國土中、覓什麼物、乃至三乘十二分教、皆是拭不淨、故紙佛是幻化身、祖是老比丘、爾還是娘生已否。

(辨) 心々不異の義は上段に詳也、心心不異の上には一言の問答すべき事もなし、煩惱と菩提と不異、生死と涅槃と不異、師家と學人と不異、問と答と不異なれば、問ふ事あるべき筈なし、爾纒かに問はんと擬すれば便ち性相各別也、爾が自己の本性は平等空寂にして元來一法なし、其一法なき所に於て忽ち有相の心を生じて心々不異の義を問はんと欲す、是れ性相各別也、凡そ今日總ての世法、出世法皆自性なく生性なし、無自性無生性とは萬物悉く因縁和合より生ず、若し因縁和合せざれば、此一株木一莖草終に其形を見ることなし、故に此木の自性と云者はなき也、自性あつて生ずるにあらざれば是れ因縁假和合して集りたる者也、故に無生性と云也、唯識論に三無性を出す、一には相無性、二には生無性、三には勝義無性也、相無性とは凡夫は世間一切の諸法を皆實有なりと思へり、佛是を憐みて一切の諸法是れ幻化の相にして、實相にあらずと説く、是れ相の無性なることを示す、便ち相無性也、生無性とは一切の諸法は悉く因縁和合より生ず、本來生すべきの自性あつて生ずるにあらす、是れ生無性也、勝義無性とは佛此二種の無性を説く是れ勝義也、此勝義何に依て出るか、是れ凡夫の妄執を救はん爲に假説する者也、本來勝義の性あつて出るにあらず、是れ勝義無性なり、但有「空名」二字亦空也とは元來自性なし生性なければ、此一柄の扇子何所の所より乎出來らんや、只因縁和合の所より來る、紙は是れ因、水と糊とは縁、此因縁和合する時、暫く扇子の形を見るも、因縁離散する時は、只扇子の名のみ残りて扇子はなき也、故に但有「空名」と云ふ、凡そ名は形ある故に存す、形なければ名も亦無し、故に名字亦空と云へり、爾等が扇子を扇子とするは、閑名字を認めて實有とす是れ大なる錯也、設ひ有るも皆是れ依變の境とは、設有とは形なく名のみある類を云也、便ち下に云

所の菩提依、涅槃依等の依なり、提菩依、涅槃依、解脱依、三身依、境智依、菩提依、佛依とは、菩提の名あれば是れに依て種々の名目を生じ、涅槃の名あれば是に依て種々の名目を生ずるを云也、境智依とは、境とは事の上の名目、智とは理の上の名目を云ふ也、六塵の境、六識の心の類を云也、依變の境とは、是等は皆人の云ひ方仕方に依て假に種々の名目を立る者也、例之は光源氏は元來なき人也、紫式部が物語は源氏に依て變現して、桐壺、掃木等の種々の名目の生ずるが如し、是れ皆な人の作也、是を依變の境と云、爾向「依變國土中」覺「什麼物」とは、此國土は皆な依變の境の集る所なれば一物も實有なく虚空界の如し、此中に就て何物を覺んや、畢竟無一物也、如此見得して敢て眼に掛る者なければ、三乘十二分教とて崇敬する所の者も、不淨を拭ふ故紙も、畢竟、物でないと云所に至ては同一也、佛と雖ども畢竟跡を留めざるは、幻化身も同一也、祖師と云て何の奇特があるぞ、只だ老比丘のみ、爾還「是娘生己否」とは、佛も祖師も三乘十二分教も、畢竟只だ名言のみにて跡なき所に、爾獨り娘生の儘にて永く跡を留めんや、爾も畢竟名言のみ也と云へり。

○爾若求佛即被佛魔攝、爾若求祖即被祖魔縛、爾若有求皆苦不如無事

(辨) 元來佛もなく祖もなし、爾ち強て是を求めば、其佛其祖は佛にあらず祖にあらずして、却て是れ魔也、其故は爾をして馳求せしめて、無益の苦勞をさする故に魔なり、佛魔、祖魔と云は尋常煩惱魔邪見魔など云が如し、爾が且暮に佛祖を馳求するは是れ佛祖の魔に接せられ縛せられて居る者也、凡

そ依變國土の中は、悉く空名空聲なれば、何の一法をか求むべき、爾ち纒かに求る所あらば、皆是れ無益の苦勞也、只だ何の求る所もなく安閑無事なるこそ好けれとなり。

○有一般秃比丘向學人道佛是究竟於三大阿僧祇劫修行果滿方始成道道流爾若道佛是究竟緣什麼八十年後向拘尸羅城雙林樹間側臥而死去佛今何在明知與我生死不別

(辨) 今時の宗師の學者の爲に常に云は、佛是究竟也、初發心より三大僧祇の間に、五十二位の修行を遂げて、遂に佛果圓滿すと云へり、佛が實に究竟ならば、永久常住不變にして入滅することあるべからず、然るに八十歳の時、拘尸羅城林樹下に側臥して死なれたは何所が究竟ぞ、我等の生死と不異也、然る時は佛は究竟なりと云可らず。

○爾言三十二相八十種好是佛轉輪聖王應是如來明知是幻化古人云如來舉身相爲順世間情恐人生斷見權且立虛名假言三十二八十也空聲有身非覺體無相乃真形

(辨) 爾ち若し三十二相八十種好を佛と云は、轉輪聖王も三十二相八十種好ある故に佛なるべきか、

轉輪聖王は我等と同く幻化の色身也、扱は三十二相あるを以て佛と云べからず、茲に古人と云は傳大士也、此頌は傳大士が金剛經の凡所有相皆是虛妄と云を釋して作りたる者也、其心は、如來の法身は元來無相なり、永く無相で通れば、凡夫は終に佛と云事を知る事なし、故に人に示さんが爲に、假りに暫く此三十二相八十種好の身相を舉止する也、恐人生斷見權且立虛名とは、斷見とは、無佛世界の凡夫は其意放逸、罰利生と云事をも知らず、專横にて惡道を恣にす、是を斷見と云也、故に假りに身相を現して世に出て、佛の名を現はして三界の大導師として、惡逆無道の者の爲には、地獄を説て其罪を懲し、善人の爲には天堂を説て其善を勸む、佛の名を現はすを立虛名と云也、實は寂滅無爲の法身なれども、衆生の斷見を救はんが爲に、假りに且く佛の名を立る也、就ては三十二相と云たも假設の言也、八十種好と云たも假説にして實にあらざれば空聲のみ也、有身とは假有の色身也、覺體とは法身也、無相と云も法身也、法身こそ眞實相よと云へり。

○爾道佛有六通是不可思議一切諸天神仙阿修羅大力鬼亦有神通應是佛否道流莫錯祇如阿修羅與帝釋戰戰敗領八萬四千眷屬入藕絲孔中藏莫是聖否

(辨) 爾ち等常に云く、佛に六種神通あり、是れ不可思議なりと、神通あるを以て佛とせば、諸天神仙も、阿修羅大力の鬼王、或は狐狸の類迄何れも通力あり、悉く佛にて有るべきか、修羅と帝釋と須彌の中央にて戦ふ時、修羅敗戦して八萬四千の眷屬を將ひて藕絲孔中に藏るゝなり、斯様の大神變あ

ればとて、修羅を佛と云べき乎、否、不然也。

○如山僧所舉皆是業通依通夫如佛六通者不然入色界不被色惑入聲界不被聲惑入香界不被香惑入味界不被味惑入觸界不被觸惑入法界不被法惑所以達六種色聲香味觸法皆是空相不能繫縛此無依道人雖是五蘊漏質便是地行神通

(辨) 臨濟の今茲に擧揚する所の、諸天神仙等の通力は眞の神通にはあらず、皆是れ業通依通也、此通力は我が前世の宿業次第に加はりて今日に至り、奇特不思議を現する也、是れ業に依りて現はる、故に業通又た依通とも云也、諸佛菩薩の通力と雖ども、悉く定慧修行の力に依りて現する者故、是れ亦た業通依通也、然れども臨濟所説の所は佛性の妙用理の儘に現するを云也、故に諸佛菩薩に限らず人々の心佛皆六神通あり、六とは眼耳鼻舌身意也、入色界不被色惑入聲界不被聲惑とは、色境に對し聲境に對するを入色界入聲界と云也、諸人悉く妄想心差別心を以て聲色に對する故に迷ふ也、只だ佛性の妙用本然清淨の所には、元來一點の迷なし、我が無念無心にして、胸中一片の鏡の如くなる時は、是れ佛性の廓然現はる、也、此時、月を見花を見て月と知り花と知り、鐘を聞き鼓を聽て鐘と知り鼓と知るは是れ佛性の妙用也、更に思惟差別なければ一點の迷なし、是れを入色界不被色惑入聲界不被聲惑と云也、其他香味、觸、法亦復、如是、所以達とは、故に知ると云に同じ、色、

聲、香、味、觸、法の六塵は、元來假有にして空華陽焰の如き者也、故に無依道人を繫縛する力なし、況んや道人は金剛正體にて、十方に通徹して塵機の爲めに繋留せられざる底の強者故、到る所獨脱無碍にして自在を働く也、是れ眞實の神通也、人々の此身は五蘊漏質也と雖ども、何れも此六種神通具する也、只だ虚空飛行は成らぬ故に、地行神通と云へり、漏質とは有漏の色身也。

○道流眞佛無形眞法無相爾祇麼幻化上頭作模作樣設求得者皆是野狐精魅並不是眞佛是外道見解也

(辨) 眞佛は無形眞法は無相也、然るを爾等は幻化の色身の上に沙汰して、佛には必ず三十二相八十種好ありなど云は、是れ模様形段に眼を着けて云者也、又た偶々眞佛を覓めて色身の外に究明せんとするも、皆な野狐精に誑かれ、外道の見解に落ちて、本眞の者一人もなき也。

○夫如眞學道人並不取佛不取菩薩羅漢不取三界殊勝迥然獨脱不與物拘乾坤倒覆我更不疑十方諸佛現前無一念心喜三塗地獄頓現無一念心怖

(辨) 眞實大悟の學人は何れも佛を不取、菩薩羅漢を求めず、三界殊勝を求めざる也、三界殊勝とは、三界にある殊勝の道は皆な名相に拘はる事也、故に不取也、殊勝とは上諸佛の道に差はず、下衆生の心に不異を云也、獨脱とは諸人の解脱し得ぬ所に於て、只一人能く解脱する也、全體作用して自由自在なる故に拘はる所なき也、如此打成一片に能く受用し極めたる上には、縦ひ天地打ち返す事も

又た三途地獄が俄かに我前に現はれても更に怖るゝ所なき也。

○緣何如此我見諸法空相變即有不變即無三界唯心萬法唯識所以夢幻空花何勞把捉

(辨) 何故に如此無疑無喜無怖なるか、今日の諸法は只だ假現の者にして、儼然存在するも元來皆空相也、只諸法を觀するに、我心變すれば即ち物あり、心不變なれば即ち物なし、唯識論に心生種々法生心滅種々法滅とある如くなるぞ、三界唯心萬法唯識とは、三界は皆な心に依て形を爲し、萬法は悉く識に依て變現する也、三界萬法悉く夢幻空華の如く、實體なければ把捉せられぬ也、茲に云ふ、變不變は我心の變不變を云也。

○唯有道流目前現今聽法底人入火不燒入水不溺入三塗地獄如遊園觀入餓鬼畜生而不受報緣何如此無嫌底法

(辨) 如此三界萬法悉く夢幻空華の如くにして一も實なき所に、只た人々所具の聽法底の人のみ水火にも犯されず、三塗地獄に入りても其苦を受ざれば、恰も園觀に遊ぶか如き也、餓鬼道に入るも、畜生道に入るも、其等の報を受けず、其故は此人は嫌底の法なきが故也、無嫌底法とは忌避する所なき也。

○備若愛聖憎凡生死海裏沈浮煩惱由心故有無心煩惱何拘不勞分別取相自然得道須叟備擬傍家波々地學得於三祇劫中終歸生死不如無事向叢林中牀角頭交脚坐

(辨) 備若し相に著して聖を愛し凡を憎んで、是非取捨せは、永く生死海に浮沈すべし、煩惱は悉く心に由て有る也、若し能く無心ならば何ぞ煩惱の沙汰あらんや、不取分別取捨とは、分別とは欣厭、取、捨の四也、取相とは相に著する也、是等は悉く不要の苦勞也、然らずして安閑無事なれば、自然得道須叟なり、便ち道を得る事迅速也、波々地は動て不止の意なり、傍家に奔走して佛道を學ぶ事、波々地ならば、三大僧祇の間永く生死を出つ可らず、終の字は永に同く、何時迄もと云意子也、如此永く終せんよりは寧ろ無事なれ、却て生死を脱する也、備ち只だ床頭に默坐して無事に日を過さんには不如也、交脚座は結跏趺座なり。

○道流如諸方有學人來主客相見了便有一句子語辨前頭善知識被學人拈出箇機權語路向善知識口角頭攢過看爾識不識爾若識得是境把得便拋向坑子裏學人便即尋常然後便索善知識語依然奪之學人云上智

哉是大善知識即云備大不識好惡如善知識把出箇境塊子向學人面前弄前人辨得下下作主不受境惑善知識便即現半身學人便喝善知識又入一切差別語路中擺撲學人云不識好惡老禿奴善知識歎曰真正道流如諸方善知識不辨邪正學人來問菩提涅槃三身境智瞎老師便與他解說被他學人罵著便把捧打他言無禮度自是備善知識無眼不得嗔他

(辨) 此段は前述の意子と異り、別に一段の垂示也、凡そ賓主相見の時の如んば、先つ學人(賓)より一句問掛けて師家(主)を試る也、機權とは、機は機用也、内に含み置く所の句中也、權は外に顯はるゝ所の言句作略也、指柳樹、罵槐樹と云ふが如きは、柳樹を指す者は機也、槐樹を罵る所が權也、語路とは言句に夫れ々の境界あるを云也、一絡索の問答境界の差はざるは語路の通する者也、若し本分の境界を現成の境界と見、截斷の境界を色相の境界と見るは皆蹉路也、善知識口角頭とは師家の面前まで也、答語を得んが爲めに問掛る故に、向口角頭と云也、備若識得是境把得拋向坑子裏とは、備とは師家也、初問の時早く學者の機を知て、只今此學者が如何なるか是れ祖師西來意と問へば、實は祖師西來意を問にあらすして別に心ありて問ふ也、扱は問語は學人が一時假り來つた

境也と便見して忽ち其境を奪ふて塵坪へ委棄する也、學人便即尋常とは師家の看破せる所を承知せし故に、最早句中を取らず何氣なき様子を示す也、其後師家を敬して垂示を求る様子を以て、又た別問を發す、實には是れ亦句中を構へて師家を賺す也、師家猶も能く其機を知て之を奪て除る也、學人茲に至り愈々師家を托上して云く、上智なる哉是れ大善知識と嘆美する也、然れども師家眼ありて毫も油斷せずして、備大不識好惡と云て更に勝を誇らず、如善知識一出箇境塊子學人面前弄とは、勝には乗らず、更に種々の言句を以て學人を弄する也、境塊子とは、境とは言句也、只今の言句或は學人を梵天に托上し、或は知音して云ふなれども、實は只言句のみにて本意は左にあらざる也、扱は其言句は何の用なき塊子と同じき也、前人辨得下下作主不受境惑とは、師家が種々の境塊子を以て面前に弄するを、學者が能く其機を辨得して、些子も境塊子に乗らぬ也、下下作主とは、凡そ賓主問答と云は、問語の人は賓とし答語の人を主とする也、今此所は師家が問て學者が答る故に學人なれども主と云也、如何にも謙送して初心を裝ふ故に下々と云也、善知識即現半身とは、學人が堅く謙遜して相手に成らぬ故に、善知識が堪へ兼ねて聊か句中を現はす也、便現半身なり、學人便ち喝す、扱こそ大善知識の句中に當てはたと喝する也、其時善知識、喝の機に當て又た種々の言句境界を以て擺撲す、差別語路とは抑揚褒貶也、擺撲とは打て除る也、學人又た散々に師家を抑下して好惡を知らぬ老禿奴ちやと云也、其の時此學人の頭尾正き所を見て、實に真正の道流じやと嘆美して收る也、作家の相見は如此起倒あり、抑揚褒貶して互に力量を看察する也、今の善知識は曾て學者の邪正を辨せずして、菩提、涅槃、三身、境智、其外何事を問へども、問に答るのみと思ひて、問語に

對して説明を下す也、若し學人が善知識の顛預なる所を看破して罵倒すれば、善知識は眞に憤怒して大に其無禮を責ることあり、實は無禮にあらず、却て善知識が無眼子で學者の機を知らざる也、左れば不得噴也。

○有一般不識好惡禿奴即指東劃西好晴好雨好燈籠露柱僂看眉毛有幾莖這箇具機緣學人不曾便即心狂如是之流揔是野狐精魅魍魎被他好學人噙々微笑言瞎老禿奴惑亂他天下人

(辨) 又た別に三種の人あり、何も知らぬ禿奴也、指東劃西好晴好雨好燈籠露柱とは、取捨分別を不_レ忘者を云、東京の人が京都を西と云へば、九州の者は東と云、扱は東と指し西と限るべき様なし、東京の者は京都を知らず、九州の者は東京を知らざる故に論する也、正眼に看來れば、元來無東西也、又た行商は晴を好み、草鞋を賣る者は雨を欲す、畢竟自ら知りて他を知らずして晴雨を論する也、燈籠露柱とは、佛法の智識に誇り甚だ佛臭ある者を云ふ、此等の徒は佛罰を蒙りて必ず眉鬚墮落すべし、僂看眉毛有幾莖ぞ、這箇具機緣學人不_レ曾便即心狂とは、無智の漢なれども、學者と前世の宿縁あつて、今日自然に機縁が契ひ、學者は其因縁を知らずして、一向に彼の禿奴を信じ惑はされて心狂するを云也、是等は都て野狐精、魍魎の人を誑く類也、魍魎は川澤の怪鬼、噙は喉、又た痞塞也、哀働する時、聲出でず、喉の塞がるを云也、今此所では、聲出でずして喉にて笑ふて云也、畢竟有眼

の學人が彼等禿奴が、天下の人を巧みに惑亂するを笑ふ也。

○道流出家兒且要學道祇如山僧往日曾向毘尼中留心亦曾於經論尋討後方知是濟世藥表顯之說遂乃一時拋却即訪道參禪後遇大善知識方乃道眼分明始識得天下老和尚知其邪正不是娘生下便會還是體究練磨一朝自省

(辨) 出家たる者は、只能く道を學べ、臨濟も始めは律學を專修した、毘尼は戒也、次に經論家に入り講經論議し、充分百方討尋せられた結果、此等の學得は、悉く濟世の藥、表顯の説なる事を知られたる也、濟世藥とは、例之賣藥也、一々其病に應じたる妙藥也、左れば其病ある時のみ一往の利益あり、表顯とは、例之は法報應の三身、三土、其他地獄、天堂等を説に、皆表して顯はす者也、表顯のみにて一も實有なし、左れば經律論の三學は皆濟世の藥、表顯の説と看破して自ら棄て、後禪に參して遂に大愚和尚の下に大悟し、黃檗の法を嗣き、道眼分明なるを得て、始て天下の尊宿の是非邪正を知られたり、不是娘生下便會とは、扱前に段々と説述したる所は、教經は皆表顯の説にして實有にあらず、觀法、座禪等の淨行も亦た造業也と云て憚らざるにありしが、其如此道眼分明なるに至るは、娘生下便ち母の胎より生れた儘で知るにはあらず、依て體究練磨便ち霜辛雪苦の効を積み、工夫純熟して一朝自ら省す、便ち大愚の肋下を築拳せし好時節に逢ふた也、古も今も同く無駄骨折ら

ねば、眞眼を得るには到り難し。

○道流備欲得如法見解、但莫受人惑、向裏向外逢着、便殺逢佛、殺佛逢祖、殺祖逢羅漢、殺羅漢逢父母、殺父母逢親眷、殺親眷始得解脫、不與物拘、透脫自在。

(辨) 爾等眞正如法の見解を得んと欲せば、只だ自得すべし、人の指南に依り邪教に惑ふ事勿れ、向裏向外逢着、便殺とは、向ふ所何物にても截断せよと也、佛祖も父母も眷屬も悉く截断すれば、一物も眼に拘はる者なき故に、眞實解脫する也、便不與物拘、脱體現成して、日用自由自在也。

○如諸方學道流、未有不依物出來、底山僧向此間、從頭打手上出來、手上打口裏出來、口裏打眼裏出來、眼裏打未有、一箇獨脫出來、底皆是上他、古人閑機境。

(辨) 未有不依物出來、底とは、諸方遍參の者が、此間に來て參するを見るに、必ず何事にか因て問ひ來る也、依物とは事に因むを云也、從頭打とは、一々始めより截断する也、手上出來とは、錫を振ひ坐具を提起するの類也、口裡に出來るとは言句に涉るを云也、眼裏出來とは、見解受用底を沙汰するを云也、斯様の類何れも其事の當下に間不容髮打て除けて、二言繼かせぬ也、終に一人も獨脱無依にして來る者なし、何れも古人の閑機境に基きて、不審を帶て問ひ來る故に、逐一打て除くる

也、上閑機境とは、古人の一機一境の跡を追て問ひ來る也、古人の一機一境は、今人の用には立たぬ故に閑機境と云也。

○山僧無一法、與人祇是治病解縛、備諸方道流、試不依物出來、我要共爾商量、十年五歲並無一人、皆是依艸附葉、竹木精靈、野狐精魅、向一切糞塊上亂咬。

(辨) 山僧從來の無一法、只た學者の爲に一時の病を治し、且く縛を解く迄也、若し學者が不依物して已れが生形にて來らば、一商量せんと思へども、左様の者は一人も無し、依草附葉、竹木精靈とは、中有の幽靈を云ふ也、死後魂神不滅、未だ生所を得ずして、中有に迷ふて艸に依り木に附て不散者あり、是を依草附木の精靈と云也、今時諸方の學者の迷て物に依托する事、偏に中有の幽靈の如し、野狐精魅とは、狐に魅せられたる者が、不淨を美食と思ひて喰ふ如く、邪法を聞入れて眞實と諾ふに同じ。

○瞎漢枉消他十方信施、道我是出家兒、作如是見解、向備道無佛無法、無修無證、祇與麼傍家擬求、什麼物瞎漢頭上安頭、是爾欠少什麼、道流是爾目前用底、與祖佛不別、祇麼不信、便向外求、莫錯向外無法、內亦不可得、爾取

山僧口裏語不如休歇無事去已起者莫續未起者不要
放起便勝備十年行脚

(辨) 今時の學者が、猥りに十方檀越の信施を受けて、我こそ出家なれと超然たる者が、上述の如き見解を爲すは、勝甲斐なき事ぞ、夫れ道とは前に説きたる如く、元來無佛無法無修無證なれば、備等は傍家に走りて何事を求むるや、便ち頭上に頭を置く如く重々の煩累也、汝が日用應縁の所に於て、何不足ありて外に向て馳求するや、無依道人備が爲めに用を爲す事佛祖と不別、然るに備ち外に向て佛を求め祖を求るは、頭上安頭者也、備ち是を信せずして外に向て別に求るも、外に於て一法もなく、内にも亦た法なし、且又た山僧が此說話を眞實と肯ふも寧ろ造作也、只一向に放下し休歇無事なるには如かざる也、已起者莫續とは、既往は不問、今後再び不要の造作に渉る勿れと也、放起とは放出發起するを云ふ、若し能く如此見得せば、備が十年遍參するに勝るぞ、是れ畢竟遍參の目途は休歇無事を得る爲なれば也。

○約山僧見所無如許多般祇是平常著衣喫飯無事過
時備諸方來者皆是有心求佛求法求解脫求出離三界
癡人備要出三界什麼處去佛祖是賞繫底名句備欲識
三界麼不離備今聽法底心地備一念心貪是欲界備一

念心嗔是色界備一念心癡は無色界是備屋裏家具子

(辨) 山僧が見所に約せば、多般の受用は要らぬ、只だ平常無事にして着衣喫飯して暮す迄也、諸方より來りて修行する輩も、何れも有心にして求佛、求法、求解脫、求出離三界等也、備等は實に癡人也、三界を離れて別に行く所なし、佛祖は賞繫底、名句とは、賞繫底とは賞玩に由て縛せらるゝ義也、且暮に佛祖を唱へ尊敬する故に、却て佛祖に繫縛せらる、名句とは前述せる三身佛等にして、何れも只た名言のみにして實體なし、備ち三界を知らんと欲せば、便ち備が即今聽法底の心地上に在る也、備が一念の貪は是れ欲界也、一念の嗔は色界也、一念の癡は無色界也、備ち三界を外にある者と思ふて出離を求るも、三界は只だ備が心地の上にある也、人の家の家具の如く、心地を離れざる也、心地の上の三界を如何に出離すべきぞ。

○三界不自道我是三界還是道流目前靈々地照觸萬
般酌度世界底人與三界安名

(辨) 此段は三界の起本を明して、出離を求る者を破する也、三界に其名を與へたは何者ぞ、三界は自ら其れと名乗らざるにあらずや、左れば人が與へた名ぞ、其名付け親は誰れぞ、便ち備が目前に常に現はして作用する所の無依道人也、此道人は萬般を照燭する者なれば、是れ花、是れ月と知る也、又た世界を酌度する故に、是れ欲界、是れ色界、是れ無色界と知りて、三界の名を建立せし也、然らば三界は此方より建て、却て之を出離せんとす、實に錯れりと云べし、建立せざれば出離すべき要なき

を、諸人は却て自ら迷ふ也。

○大德四大色身は無常乃至脾胃肝膽髮毛爪齒唯見諸法空相爾一念心歇得處喚作菩提樹爾一念心不能歇得處喚作無明樹

(辨) 四大色身は元來無常也、既に是れ無常也と見得すれば、脾、胃、肝、膽、毛髮、等悉く空相也、既に能く諸法の空相を知らば、又た何をか求めんや、佛をも求めず、祖をも求めず、出離を求めざれば馳求心便ち息む、即ち一佛成道也、故に喚作菩提樹と云へり、世尊臘八明星現する時、菩提樹下に於て成道を遂る也、故に準擬して用る也、爾未だ諸法の空相を知らず、一切悉く實有と思ふ故に、佛祖を求め出離を求めて馳求の心常に歇まず、日々無明を増長する也、故に喚作無明樹と云へり、無明樹とは只だ無明の意なれども、菩提樹に對して無明樹と云也。

○無明無住所無明無始終爾若念々心歇不得便上他無明樹便入六道四生披毛載角爾若歇得便是清淨身界

(辨) 無明は住所もなく、始終もなくして、夢幻空華の如し、爾が念々休歇することを得ざれば、次第に無明を増長して、終に自ら此無明に引かれて生死輪回して、六道四生の間に牛と成り馬と成る也

四生は卵、胎、濕、化也、爾が若し歇得すれば、便自清淨法身の境に入る也。

○爾一念不生便是上菩提樹三界神通變化意生化身法喜禪悅身光自照思衣羅綺千重思食百味具足更無橫病菩提無住處是故無得者

(辨) 一念不生とは一點の妄念なき也、胸中常に無一物なれば、只是れ清淨身界にして一佛性のみ也、左れば爾が行往坐臥着衣喫飯する所、悉く佛性の作用にして、如來の菩提樹下正覺の道場に座する時と不異、是れ爾が始めて正覺の位に上る時也、故に上菩提樹と云也、既に菩提樹に上り得れば、三界に優遊する事自在なり、爾が色身は神通變化し意生化身する事能はずと雖とも、爾が佛性の作用は悉く自由也、水火に逢ふも犯さるゝ事なく、又た座乍ら世界各國にも至る、日常萬縁に涉り、常に逆境なく悉く意に順する故に、毎事法喜禪悅せずと云事なし、其喜悅する所總て佛性の光明なれば、身光自照と云也、萬事意に順する故に、衣を思へば綺羅千重、食を思へば百味具足、一生如此自在にして、天年を終る故に無橫病也、中天の病なくして順死を遂る也、意生化身とは、十地の菩薩如幻三昧を得れば、無量の神通を現して、普く一切の佛刹に入るに自在無礙にして、意彼れに到れば身隨て到る也、故に意生化身と云也、此事楞嚴經に詳説せらる。

○道流大丈夫漢更疑箇什麼目前用處更是阿誰把得便用莫着名字號爲立旨與麼見得勿嫌底法

(辨) 菩提樹に上り得たる者は、三界の間に優遊して、種々に神通變化し、種々意生化身すると云は實とし難し、然れども大丈夫たる者は疑はぬ也、其故は無依道人の所爲にて自在無碍なる故也、此道人何所にかある、即今目前に現はれて、著衣喫飯し屙屎送尿する者即ち是也、把得_レ便_レ用_レとは、追取つて用よと云也、茶に遇て茶を喫し、飯に遇ては飯を喫するを云ふ、莫_レ着_レ名字_レとは、莫_レ觸_レ諱_レと也、茶に遇ては茶を喫し飯に遇ては飯を喫する時、是れ無依の道人が喫する也と料簡する也、如此は是れ未だ無依道人を忘れずして、無依道人に捕はれ居る也、無依道人の事を忘却して、只だ追つ取て喫茶喫飯すること、深く佛法の玄旨を得たる者也、如此受用したる上は一切拘はる所なき故に勿_レ嫌_レ底_レ法_レと云也。

著者曰く、此段甚だ肝要也、諸人一應の所入ありて後ち、何所迄も悟る底を握り居るは卻て眼中の塵なり、之を奪はんとて、師家が棒喝峻峻の手段をも施し、大休歇の閑田地に導かんとする也。

○古人云、心隨萬境轉、轉處實能幽

(辨) 月に對すれば、此心月に移りて面白の月やと思ひ、花に對すれば、此心花に移りて麗はしき花と思ふ、如是種々境に對して、種々に心の轉變するを、心隨萬境轉と云也、轉處實能幽とは、心の妙用は種々變轉して、束の間も靜かなる事なきも、其は只だ外境の影の生滅往來する者にて、心の本體は姑めより曾て不動、例之は鏡の白を照し黒を照して往來忙々なるも、鏡の本體は更に不動が如し、心の本體は常に空寂幽微にして何如にも靜か也、是れを轉處實に能く幽なりと云也、水に映じたる月影は、波に揺れて擾々たれども、月の本體は毫も不動也、如是外境の影の心に移る者も亦

た外境と共に生滅往來して騒々たれども、心の本體は曾て不動也。

○隨流認得性、無喜亦無憂

(辨) 流とは心の流注するを云、心の境に隨て相續して生ずる事、水の流に隨て息まざる如し、故に流と云也。

○隨流認得性

(辨) 此段は見性の上に最も肝要なり、心の流注するに就て忽ち見性するを云、見性とは佛性を見付る也、佛性を見付んと欲して、心を以て求むれば、其求めんとする心先づ起る故に、此心に蓋ひ藏されて佛性終に現はるゝ事なし、現はれざれば見るべきやうなし、左れば有心にて見性する事は不能也、只能く無心なれば端的見性大悟する也、無心ならば縦ひ佛性現はるゝ共、其現前を知る者なし、如何にして無心にして能く相契ふや、無心ならば知る者なきは當然の理也と雖も、無心の時ならでは佛性現はるゝ事なし、其佛性を無心の時見る者は是れ初一念也、此初一念は是れ佛性の用にして流注の妄念にあらず、是れ佛性を以て佛性を知る也、是を回光返照と云、便ち本有の智光を回らして、自ら自體を知る也、人あり月を見て、やれ月と知り、花を見てやれ花と知る者は是れ初一念也、此一念は佛性の本體、空々寂々湛然不動の所より、驀直に現はれ來る者也、只だ是れ一念にして二念を繼ぐ事なし、若し念を繼いで面白しとか麗はしとでも思はゞ、是れ第二念にして便ち既に愛着の心也、愛するが故に或は詠歌し或は作詩し、遊宴歌舞起り、喜怒哀樂隨て起る、終に種々業煩惱を生じて、永く輪廻

を免るゝ事なし、此二念流注の心を以て佛性を知らんと欲せば、縦ひ知る事あるも是れ觀念の法也、觀念は只だ推理して知る事也、只初一念に知る者こそ直に是れ見性大悟也、古人の見性するは、其縁に依りて種々の模様あるも、何れも無心にして見性せしは皆一也、例之は撃竹の聲に依り、又は普請の際庭石に跣趾を蹴付けて、爪を刺したる時、燈火を吹滅したる時、鼻尖を枯られたる時、指切られたる時、或は棒喝峻嶮の商量に由りて大悟するが如し、未だ初機の人には餘り峻はしき高量をなし難し須く先づ座禪するを要とす、座禪とは一室に安座し、眼を半眼に默然たる時、種々の念蜂起し、過去や將來を思ひ、都を思ひ田舎の事を思ひ、友人眷屬を思ひ、哀愁等の事を思ふて、念々相續して息む事なし、然れども座久しければ、自然此等の妄念消失し、茫然として木偶の如く無心と爲る也、無心と爲ると同時に佛性の本體自然と現るゝ也、無心の間短くして、又たやがて念生ず、此念を初一念と名く、此初一念を以て電光石火の間に於て、彼の無心の所を見るに、雲の退て蒼天を見るが如く、佛性の本體廓然として露現する也、此悟得底は只だ當人の獨り自知する所にして、傍人の窺知する事にあらず、是れ見性底の時節也、無喜又無憂とは、喜怒哀樂愛惡欲の七情は、流注の念より起る者なる故に、本體たる佛性の上に喜憂等の差別なき也。

著者云く、此章の説明最も切實也、彼の遠羅帝笠や澤水法語に説かるゝ所と其軌を一にす、學者にして座禪せし人は、多くは上述の如き實驗あらん、普勸座禪儀に示さるゝ座禪は、是れ安樂入法門也と、所謂座する時何物かある、只だ坐するのみと也、然り然り然らずんばあらず、然りと雖も、其茲に至るの因位は、上説の如く默座して、雜感妄想と戦ひ、一度木偶の如くに死し、死後一度蘇

つて、始めて見性するに至らずんばあるべからず、安樂の法門と爲るは、早や果位の沙汰也、扱餘り座禪に力を費さず、容易に悟得する底の英邁漢なきにあらず、此等は所謂天分なれば問ふ所にあらず、我は只我れの如き凡人の上を云ふ也。

○道流如禪宗見解死活循然參學之人大須子細如主客相見便有言論往來或應物現形或全體作用或把機權喜怒或現半身或乘獅子或乘象王

(辨) 此段の意子、前と連續せず、別に一段の垂示ならん、禪宗真正の見解の人は、先づ自ら大死一番して死中に活を得て大自在の三昧を得て活殺心の儘なり、活かすかと思へば殺し、殺すかと思へば活かす故に、死活循然と云也、循然は因循ぞ、棒喝辛辣の手段は是れ人を殺す也、師家此手段を用ゆる時、學者死中に於て忽ち眼開きて大自在を得る、是れ殺すかと思へば却て活かす也、便ち死活循然ぞ、參學の人受用大自在なるを得んと欲せば、死活循然の所を能く子細にすべしと也、應物現形とは、主客相見して問答次第する時、互に機に應じてそれ〳〵働きをするを云也、或は言句を用ひ、或は作略をなす、皆形を現する也、全體作用とは、全身一枚の鐵團子と成つたる上は、起居動作只だ本分一枚の作用也、是等の人は來機相應の所用はない也、對手は何と働く共、一向に我が心の儘に働く也、把機權喜怒とは、機權は權は轉變ぞ、機輪通變するを云也、喜怒は抑揚褒貶して種々賞罰するを云也、現半身半提也、未だ面目を現はさざる也、乘獅子乘象王とは、獅子象王の如き猛者

を毫も働かしめず我膝下に坐却する手段を云也、文殊普賢の智徳行入有つて猛獸を自由に馴らす如く也。右件の種々の様子は主客相見して問答往來する時、互に機用を張て働く所を云也。

○如有真正學人便喝先枯出一箇膠盆子善智識不辨是境便上他境上作模作樣學人便喝前人不肯放此是膏盲之病不堪醫喚作客看主

(辨) 真正見解の衲僧が師家を試る爲、他の言句に涉らず、はたと一喝する、是れ膠盆子を枯出する也、膠を煉る盆は年來の膠が沈着して、打碎せんとするも破れざる所也、彼の一喝の機の堅固にして人の嘴を下し難き事、恰も膠盆子の破却し難きが如し、善知識不辨是境とは、假りに現じて實にあらざる義也、此僧の一喝は師家を試ん爲也、然るを師家が心得ず仔細ありと思つて種々働くを、作模作樣と云也、學人便喝すとは、僧が又喝する也、是れは師家が作模作樣を喝する也、前人不肯放とは、前人は前の師家也、不肯放とは、作模作樣底の機を放下する能はずして追隨する也、此様の師家は膏盲の病の醫し難く又た藥なき也、喚作客見主とは、賓家より主家を見抜く者也。

○或是善知識不枯出物隨學人問處即奪學人被奪抵死不放此是主看客

(辨) 不枯出物とは、枯槌堅拂の模様もなく釣語索話の言句もなきを云也、學人事に因て一句問

ひかくれば、此知識大明眼にて活機自在なる故、問に應じて直に棒喝を行じて、人境俱奪する也、學人奪はれて初心猶ほ不改也、抵死不放とは何時迄も放下せぬ也、斯の様な相見を主看客と云也、便ち師家が學者を見透す也。

○或有學人應一箇清淨境出善知識前善知識辨得是境把得拋向坑裏學人言大好善知識即云咄哉不識好惡學人便禮拜此喚作主看主

(辨) 應一箇清淨境出とは、例之は如何なるか是れ佛と問の類也、善智識早く學人の機を知て、此問は佛を問ふにあらず、只是れ境なりと知りて、佛を取つて坑裡に拋向する也、拋向坑裏とは、据風呂の釜などへ棄てよと云が如し、其時學人師家を托上して、大好善知識と讚する也、左れど師家毫も勝誇らず、一咄して曰く、爾は何を以つて人を托上するぞ、人を抑揚するは其分ある者の事也、爾が何も知らず、殊に托上するは不法也と叱る也、不知好惡とは、何も不知の心ぞ、茲に至り學人禮拜して收む、斯やうな相見を主看主と云也、兩家共に優劣なきなり、共に主位也。

○或有學人披枷帶鎖出善知識前善知識更與安一重枷鎖學人歡喜彼此不辨呼爲客看客

(辨) 披枷帶鎖とは、古人の閑機境に追隨して出不得底なるは、恰も枷鎖を負ふが如し、是等の學人が例之ば大修行底人還落因果也無と、因果の理に執して問ふ所に、惡知識が又た一重の枷鎖を

加へて、不落因果と答る也、學人はれを聞て善知識の慈悲方便を得たとて歡喜する也、彼此不辨とは師學共に不知を云也、斯の如き相見を客看客と云、双方共に客位にして劣機也、此段に説ける主客相見の様子を、後來の學者が四賓主と名るは臨濟の意に差うと聞く、四賓主とは賓中賓、賓中主、主中主、主中賓也、賓中賓、賓中主と云は是れ賓家一分の上にて、具眼、不具眼を分けて、具眼底を賓中主と名け、不具眼底を賓中賓と名る也、主中主、主中賓とは、主家一分の上に具眼底不具眼底を分て具眼底を主中主と名け、不具眼底は主中賓と名く、是れ賓家は賓家一分、主家は主家一分に各々に立る名也、此段の立る所は主家と賓家と取り合せて立たる者也、客看主とは具眼の賓家と不具眼の主家を取り合はせ、主看客とは具眼の主家と不具眼の賓家とを取り合せ、主看主とは兩家共に具眼底を取り合せ、客看客とは兩家共不具眼底を取り合せたる者也、名を立るの例如是相違すと雖も、學者委細に點檢せずして、四賓主は臨濟の立る所と思へり、然れども實は四賓主は濟家の風規と云にあらずと聞けり、四賓主は具眼、不具眼を分て立名するのみにて、別に用なし、臨濟の客看主等は魔を辨じ異を撰び邪正を知る底の要用也、又云く或學者は主の字を以て本分とし、賓の字を以て色相として論する者もあるも、同日の談にあらず。

○大德山僧如是所舉皆是辨魔揀異知其邪正道流寔情大難佛法幽玄解得可地山僧竟日與他說破學者摠不在意千徧萬徧脚底踏過黑沒煖地無一箇形段歷

々孤明學人信不及便向名句上生解年登半百祇管傍家負死屍行擔却擔子天下走索草鞋錢有日在

(辨) 臨濟が如是主客相見の様子を舉揚して評説するは、學者をして能く魔を辨じ異を擇びて、邪正を辨別せしめんが爲也、魔とは能く人を捏怪する底也、異とは常に異なる異風也、是れ何れも怪むべき者にて、邪正を知り難し、故に委細に説破する也、寔情の二字は共に「まこと」と讀むべし、佛法幽玄解得可々地とは、事新しく云にも及ばざれども、學者は只能く佛法幽玄の所を實證すべし、知識を街ひて捏怪するは許さぬ故に取立て、云也、實證する所なければ、傍家に走て、或は魔魅の見をなし、或は奇異の見をなして、種々に狂走する也、是れ皆穩坐する所なくして眞實にあらざる也、臨濟の本色、正直の大道を示さんと欲して、竟日様々に説破すれども、學者が毫も肯はぬ也、彼の佛法幽玄の所とは、何となれば、只是無二一箇形段一歴々孤明底の無依道人の事也、此道人は備等諸人の日用の間に在りて、千萬無量の用を、備が爲に爲せども、備自知せず、脚下に踏んで暮せども、何も知らざる如し、黑沒煖地とは學者の無眼なるを云也、煖は火滅の意、彼無二一箇形段一底の者、備等諸人の面前に孤明歷々たれども、備等信得及する事能はず、却て聲名文句の上に就て、種々の分別理會を生ずる也、年登半百とは五十歳也、此年頃迄聲名文句に捕はれ居る者は、終に明眼を得難き故に、死人に同しく、便ち我身は死屍なり、此れを江西湖南に運びて遍參する者は、是れ自ら死屍を背に擔ふて鞋資を徒費する也、是等の人は閻魔の前に出て、既に費せし鞋錢を取らるべしと也。

○大德山僧說向外無法學人不會便即向裏作解便即倚壁坐舌柱上禱湛然不動取此為是祖門佛法也大錯是倘若取不動清淨境為是倘若認他無明為郎主古人云湛々黑暗深坑實可怖畏此之是也

(辨) 向外無法とは、元來無一法と云に同じ、凡そ向ふ所あれば、皆な我れより外也、臨濟が向外無法と云のを聞いて、扱は内にある者と付度して、學人皆内に向て求る也、倚壁坐とは面壁靜坐なり、舌柱上禱とは、舌不動にして無言なるを云、湛然不動とは一念不動を云、是皆内に向て求る底也、如是工夫して彼の昭々靈々底を取て、是を達磨門下の佛法也とせば大錯也、不動清淨境とは昭々靈々底也、是れ精魂にして無明也、倘若此無明を認て郎主とする也、郎主は主人公也、是れ大なる錯也、古人云湛々黑暗深坑寔可怖畏とは、黑暗とは無明也、無明は人の墮し易くして出て難き故に深坑と云、一度無明に落れば永劫出る事稀也、故に寔可怖畏也、涅槃經に無明為郎主貪愛為父とも云ふた。

○倘若認他動者是一切草木皆解動應可是道也所以動者是風大不動者是地大動與不動俱無自性倘若向動處捉他他向不動處立倘若向不動處捉他他向動處

立譬如潛泉魚鼓波而自躍大德動與不動是一二種境還是無依道人用動用不動

(辨) 倘若し臨濟の向裏解をなすは是れ無明の湛然不動を認て道とする者也と云を聞いて、又却て向外動く者を認めて道とせば、一切の草木の動く者悉く是れ道なるや、凡そ一切の動く者は皆是れ風大也、靜なる者は是れ地大也、四大本空にして只だ假現の形のみ、故に是を道と云難し、動與不動俱無自性とは、動に動の性なく、不動に不動の性なければ、動とも靜とも云べきなし、動は靜に對して動也、靜は動に依るが故に靜也、靜なければ動なり、動なければ靜亦た動也、倘若向動所捉他他向不動處立倘若向不動處捉他他向動處立とは、佗とは無依道人を云、此道人は元來動靜に涉らず、故に動處に向て捉んとすれば、却て不動處にあり、不動處に向て捉へんとすれば、却て動處にありて一切捉へ難し、例之は水中に魚を捕ふる如く、此にあるかと思へば彼れにあり、彼にあるかと思へば、此に潜むが如し、動靜二境は只是れ境にして自ら動き、又た自ら靜なる事能はず、只是れ無依道人の作用に依りて能く動き能く靜か也。

○如諸方學人來山僧此間作三種根器斷如中下根器來我便奪其境而不除其法或中上根器來我便境法俱奪如上上根器來我便境法人俱不奪如有出格見解人

來山僧此間便全體作用不歷根器大德到這裏學人著力處不通風石火電光即過了也學人若眼定動即沒交涉擬心即差動念即乖有人解者不離目前

(辨) 諸方より臨濟の會下に來集する者を、臨濟は其根器を三段に分けて接する也、如中下根機、來我我便奪其境而不除其法とは、中下根は平凡の人也、是等の人が如何是れ佛と問へば、我は佛在甚處と答へ、或は佛は是れ乾屎橛と答へ、或は棒喝を行して佛を截斷する、是奪其境也、學人が相に着して外に求る故に相を截斷す、不除其法とは、法とは心法也、法をば除かずして有る事を知らずる也、中上根器來便境法俱奪とは、中上根は平凡以上を云、是等の人が佛を問へば境も法も奪ひ截斷して一點の見識をも留めぬ也、如上々根器來我便境法人俱不奪とは、大利根なる人には截斷を用るの要なし、僧は是れ僧、俗は是れ俗と用て、遇茶喫茶遇飯喫飯底の現成公案を以て接する程に、境、法、人、俱に奪はざる也、人とは來機を云也、境、法の二者を云へば、人は其中に存する故に言ふに及ばぬが、何も彼も奪はぬと云爲に、一々取り集めて云也、已上は三段の根器を説く也、此以外出格見解の人來る時は、便ち全體作用する也、上述三等の根器以上の者故、其根器に對する作略の要なし、全體作用とは曾て説ける如く、大悟の當下直ちに此身は佛身となり、此心は佛智と變し全身只一枚の鐵團子と作る也、左れば其一舉一動は皆佛作佛行にして、學人の着眼すべき所也、佛性一枚にして間不容髮故に、不通風と云也、石火電光便過了とは、學者の猛

く精彩を着けて、急に眼の明なるを得る事也、石火電光の如くなるも、一念纒かに動けば、矢過新羅故に如是云也、況んや學人眼定動せば、早く勿交渉ぞ、眼定動とは、人の思惟に入る時は、傍眼は振らず眼を据へてじろ々々動く者也、是れを眼目定動と云ふ、勿交渉とは依つても付かぬと云義也、擬心とは、擬すれば擬する程差ふ也、念を動して求れば求る程乖く也、如是難解難得の佛性なれども、了解も強ち難きにあらず、其故は、佛性は常に不離目前者なれば也、此段は前述四料簡と同じけれども、四料簡は三種の根器を分けて四種とす、今爰には越格見解(全體作用を以て扱ふ者)の人を加る也。

○大德僧擔鉢囊屎擔子傍家走求佛求法即今與麼馳求底備還識渠麼活潑々地祇是勿根株擁不聚撥不散求著轉遠不求還在目前靈音屬耳若人不信徒勞百年

(辨) 鉢囊とは、總じて僧の鉢を囊にして、手に掛けて行く、其囊を鉢囊と云也、今茲では飯袋子と同じ、何の効もなく飽食する者を罵て、鉢囊又た飯袋子と云ふ、是等の人の腹は飯囊に同じ、又た此身は尿尿を溜め置く所故に糞壺也、爾が諸方遍參するは、鉢囊屎擔子をは運搬し、終に得力穩座を得ずして、空く傍家に走て果す也、即今如此佛を馳求し法を馳求する者は是れ何者ぞ、爾ち渠れを知るや、只是れ佛性也、佛性の作用活潑々地にして然も根株なし、活潑々地とは眼の能く見、耳の能く聞き、鳥の能く飛び獸の能く走るは、皆是れ佛性の作用也、佛性若し作用を不施は眼ありて不見、耳

あつて不聞、翅ありて飛ばず、足ありて不走、皆死物也、故に佛性の作用を活潑々地と云也、勿根株とは如是活動する佛性なれども、内に別段根株なく、内は只虚空の如く根も核もなき也、如是虚空なれば、掻き集むれども聚まらず、又た拂ひ除くるも不散、求むれば彌々遠く、不求は却て目前にあり、其目前に儼然たる底は、靈音の時々刻々爾が耳に屬する者是也、靈音とは凡そ有情の者の音は、皆是れ本有の佛性也、是れを靈音と云也、金石、絲竹、匏土、角木、風聲、水音等をば靈音と云はざる也、佛性は常に目前に現はるゝと雖も、中にも靈音程分明に現はれて、人の知り易き者なし、故に柏樹子、麻三斤、乾屎橛の類は、皆此靈音を示す者也、此知り易き者を爾等が信得する事能はず、要もなき骨折りして一生過すと也、百年とは一生也。

○道流一刹那間便入華藏世界入毘盧遮那國土入解脫國土入神通國土入清淨國土入法界入穢入淨入凡入聖入餓鬼畜生處處討覓尋皆不見有生有死唯有空名幻化空花不勞把捉得失是非一時放却

(辨) 臨濟より見れば華藏世界より餓鬼畜生に至る迄、遍く入て尋求るに終に生と云事も死と云事もなき也、生死の名あれども其實體を求るに是と云者もなし、只だ空名のみ也、生死のみにあらず、今日上あらゆる者皆幻化空華也、東坡が赤壁賦に自其變而觀之、則天地曾不能一瞬と云が如く、縦ひ山河大地の實有底の者と雖も、是を不生不滅底の無依道人に對揚して見れば、形あり限り有りて

變する者は皆幻化空華也、幻化とは元來無き形の眼に依りて假りに形の化生するを云、空華とは目を捏て見る底、空裡の浮華也、不勞把捉とは一切の諸相は悉く幻化空華也、然るを實有なりと思て相に着する勿れと也、得失是非一時に放却とは、諸相既に破して着せざる上は、一層其間の得失是非の諸法悉く放下せよと也、華藏世界とは世界の總名也、毘盧遮那國土は前に見へたり、解脫國土、神通國土、皆化身佛所依の國土也、今此段は臨濟の口に任せて、廣く云所にして世界の次第あるにあらず、又た同じ者あれども不擇也。

○道流山僧佛法的々相承從麻谷和尚丹霞和尚道一和尚廬山與石鞏和尚一路行徧天下無人信得盡皆起謗如道一和尚用處純一無雜學人三百五百盡皆不見他意如廬山和尚自在真正順逆用處學人不測涯際悉皆忙然如丹霞和尚翫珠隱顯學人來者皆悉被罵如麻谷用處苦如黃檗近皆不得如石鞏用處向箭頭上覓人來者皆懼

(辨) 此段の内、始めの廬山の下に和尚の二字を脱す、廬山和尚は歸宗常禪師也、臨濟の佛法的々相承して、麻谷等の五師の法道と一様に行じて天下に徧し、然れども能く知て信得する人稀にして、却

て誇りを起す也、道一和尚の用所は純一無雜と云は、馬祖の全體作用するを云也、三百五百の學人が一人も他の意子を知らぬこそ道理よ、全體作用の上に意子は無き故也、盧山和尚即ち歸宗は、真正見解を具して、順逆縱橫與奪自在なれば、學人其際涯を測り難し、何所が何所やら人が知らぬ故に悉く茫然たり、丹霞は石頭下の天然禪師也、翫珠隱顯とは丹霞の翫珠吟二首あり、其一云、般若靈珠妙難測、法性海中親認得、隱常遊五蘊中云々（傳燈三十卷に見ゆ）、丹霞の用處は靈珠の妙にして難測底也、見へつ藏れつ種々變化して、大自在を働く故に、學者が何とも測り知らぬ也、左る程に學者の多くは叱られて果す也、麻谷の用所は苦がきこと黃檗の如くにして、學者が更に寄り附かぬぞ、石鞏は常に弓箭を帶して、學者を試る故に、何れも怖ぢ畏るゝ也。

○如山僧今日用處真正成壞翫弄神變入一切境隨處無事境不能換但有來求者我即便出看渠渠不識我我便着數般衣學人生解一向入我言句苦哉瞎禿子無眼人把我着底衣認青黃赤白我脫却入清淨境中學人一見便生忻欲我又脫却學人失神忙然狂走言我無衣我即向渠道備識我着衣底人否忽爾回頭認我了也大德備莫認衣衣不能動人能着衣有箇清淨衣有箇無生衣

菩提衣涅槃衣有祖衣有佛衣大德但有聲名文句皆悉是衣變從臍輪氣海中鼓激牙齒敲磕成其句義明知是幻化

(辨) 茲は臨濟の大に自負した所也、真正成壞とは、成は建立にして壞は掃蕩也、法道を建立し法器を成就するは成也、佛魔を截斷し是非共に削るは壞也、真正見解を以て建立し掃蕩するを真正成壞と云、玩弄神變とは常に神通變化を顯はす也、六種神通を以て種々大自在を働くを云、入一切境隨處無事とは、常に無心にして胸中洒落なるが故に、日用萬縁に涉る所無爲無事にして、鏡の漢來漢現胡來胡現の如し、故に萬境に回換せられぬ也、有心にして縁に涉る故に境に轉せらる、臨濟の如く無心にして第二念に涉らねば、争てか境感を受くべきぞ、但有來求者我便出見渠とは、來て問話する者あれば、一見便見して其者の肝膽を看破する也、渠は毫も我を知らず、我便着數般衣とは、來機に對して用ゆる種々の言句也、學人は其言句は衣なるを知らず、言句に就て解を生じて、何れも臨濟の言中に陥る也、苦哉と嘆する辭、瞎禿子、無眼人とは同一の意、彼等無眼子輩が、臨濟の所著の衣を穿鑿して、青と云ひ又た黃と云、衆盲の象を摸るが如く、一も當るを得ず、學人の餘り心得ぬ所を臨濟惑みて、件のを脱して、法身清淨の境界に入りて、ちらと佛の本體を現せば、學人一見して忻欲を生ずる也、欲も喜ぶ也、我又脱却すれば學人失心忙然とは、學者が既に佛體を見付れば、佛體の上に住する故に、佛體をも脱却する也、學者は至極と思ふ佛體を脱却せらるゝに

至て、俄に狂走して臨濟には衣なしと云也、佛體は言句に涉らざる故也、其時臨濟學人を惑みて云ふ、
爾等我が言句を用る事を知るや、言句を用る者は我にあらず、是れ無依の道人なりと、學人俄かに思
按して、言句を用る者は臨濟でなくば、誰にてあらんかと訝りて、無依の道人とは知らぬ也、衣、不
能動、とは、動用の動ぞ、衣は自動する能はず、必ず人の力を待つ也、人能着衣、とは、人とは無
依道人が境に乗じて來り、言句を用て機に應じ物を接する也、衣には種々あり、清淨本然底の言句は清
淨衣也、無生底の言句は無生の衣也、菩提底の言句は菩提衣也、涅槃底、言句は涅槃衣也、爾諸人能
く看よ、此數種の衣は只是れ聲名文句にして實にあらず、衣變とは衣の學を云、次に由て衣と云也、
本は依變也、依變の事は前に説けり、人作を以て種々變現するを依變と云也、天真本然の理の儘に現
するにあらず、臍輪氣海は人の氣息の出る所、臍輪とは臍の形の圓なるを云也、氣海の穴は臍輪の下
一寸にあり、鼓激とは鼓は動也、激は水の動流するを云、人の語る時氣海より氣息の出る事、七所を歷
て出る也、水の物に觸れて流出する如くなる故に、鼓激牙齒と云也、人の口より出る風を憂陀那と云
也、其風七所を歷て出るを言語と云也、七所は項、齒、齦、唇、舌、咽、胸也（大論に詳説す）氣海
より氣息が出て、齒牙の間に至て、敲磔して種々の語言と成て、聲名文句を生ずる也、是れは其義、
彼は此義と種々句義を立る事、是れ皆な人作にして假りに顯はれたる者也、聲名文句の出る所の源を
推考すれば、只だ一實もなし、悉く依變の幻化なる事明か也。

○大德外發聲語業、內表心所法、以思有念、皆悉是衣也

佛祇麼認佗、著底衣、爲實解縱經塵劫、祇是衣通

（辨）外發聲語業とは、種々の聲名文句は、只是れ憂陀那の風が、外に發して種々語聲となつて口
業を造る者也、柏樹子、麻三斤等の如く、直に無依道人を顯はす能はず、內表心所法とは、心所
は心王の所有なる故に云也、心王とは無依道人也、此道人は常に其位に備て居る故に心王と云、心王
に八王子あり使ら識也、差別すれば心王と八王子は別なれども、總稱すれば一體の心王也、此心王に
付隨する處の心五十一種あり、是れを心所の法と云也、愛の心所、想の心所、定の心所、慧の心所等
也、如此心所の法は、各々其義理ある故に言語を以て表する也、心王の義理なければ、言語同斷な
るが如くならず、優陀那の風、外にしては聲語の業を造り、内にして又た如是、心所の法を表する
也、以思有念とは、彼の聲名文句は思惟を以て種々の念をなし種々の法を説く者也、是れ心王の
實體にあらず、只是れ語言を以て實體を莊麗する者也、是れを衣と云也、爾等諸人此衣を以て寔解と
せば、縦ひ萬劫を歷ることも眞實には至る可らず、只其得所依通なるべし、依通とは人の造作指南に依
て通曉する所なり、茲に衣通と云たも衣を云に因て云也。

○三界循還輪迴生死不如無事相逢不相識、共語不知、
名今時學人不得蓋爲認名字爲解大策子上抄、死老漢、
語三重五重複子裏不教人見道是立旨、以爲保重大錯、
瞎屢生備向枯骨上覓什麼汁、

(辨) 教外に悟徹して大事了畢せず、何程聲名文句の上に覓るも、三界の生死を免れず、然らば修行に熱する要もなし、只安閑無事に光陰を送るにしかず、相逢不_レ相識_二共_一語、不知_レ名_二は南泉の語也、今時の學者も聲名文句を聞見して、無依道人の名をば知る也、終に教外悟徹せぬ故に、直に無依道人の姿を見し事なし、行、住、坐、臥、着衣、喫飯の所に於て、時々刻々此道人に相逢ふと雖ども何所が無依道人やら曾て知らぬ也、共に語るとは親ら相交る義也、學人不得とは此道人を不得也、無依道人の名を見及び聞きて其嚙咄をして果す故に終に不得也、大策子とは策は札也大冊子也、死老漢とは無面目の死漢を云也、教者法師の類ぞ、左る者の言を冊子に抄録して、三重五重の複子に裏んで秘藏して、是こそ眞實の玄旨なれと信する類の人は、冊子に書た外には知る所なし、只是れ言句にして佛法の抜け殻也、今時の學人の眞實を知らざるは當然なり、此抜け殻を秘藏するは大なる錯り也、枯骨に汁は無き者也、爾等が冊子に向て無依道人を求めんとするは、枯骨を絞りて汁を求る者也。

○有_二一般不_レ識好惡_一向_二教中取_レ意度_レ商量_レ成_二於句義_一如_レ把屎塊子向_二口裏_一含了吐過與_二別人_一猶如_二俗人打_レ傳口令_一相似一生虛過也道我出家被_レ佗問_レ著佛法便_レ即杜_レ口無_レ詞眼似_二漆突口_一如_二匾擔_一如此之類逢_二彌勒_一出世移_レ置_二他方世界_一寄_二地獄_一受苦

(辨) 不_レ識_二好惡_一とは無智の者と云心ぞ、左る義理を附して人に教るは、例へば屎塊子を口に含み

て吐き出して別人に與るが如し、別人又た傳へて次第に別人に與ふる事、世間の傳口令を打する如し、傳口令とは市中の番太郎が布令口する事也、今日政府より是等の號令が出たと番太郎が觸れ回れば、其口上を家々に傳る也、一生虛く過とは番太郎粗言を吐け共、數多の者が其口上を云ふて、一生空く過す也、我は出家で佛道に通曉すと廣言すれども、人が佛法眞實の處を問へば何れも詞なき也、眼似_二漆突口_一如_二匾擔_一とは、人に佛法を問詰められて、何とも答へ難き時、眼を眞黒に見張つたは、漆の一滴凝附せるが如く、又た口を天秤棒の如く兩端下がり、中央上がる形に爲したは何とも口が開けぬ也、是等の人は永く地獄に落ちて出期なき也、移_二置_レ他方世界_一寄_二地獄_一受苦とは、壞劫の時に到て此世界悉く壞する故に、地獄も共に壞する也、然れども無量劫を歷ても罪を免れぬ罪人ある故に、是が爲に地獄を他方世界に移して、罪人を其所へ遣て呵責する也、故に是等の罪の爲には、壞劫の時も地獄を不_レ壞也、今臨濟の云所は彌勒出世の時地獄なきも、其時も是等の罪人の爲には、佗方へ移すと見へたり。

○大德_レ爾_レ波_レ々_レ地_レ往_二諸方_一覓_二什麼物_一踏_レ爾_レ脚_レ版_レ潤_二無佛_一可_レ求_二無道_一可_レ成_二無法_一可_レ得

(辨) 波々地は動て不止義也、諸方へ奔走するを云、奔走して何事をか求むべきぞ、徒らに脚瘦せて脚板(脚絆)が潤く成る也、縦ひ脚板は緩みても、佛の可_レ求も道の可_レ成も法の得べきもある事無し或る人の説に、歩行の猛烈なる爲に足蹠の皮膚肥厚して板の如くなるを脚板と云、其證として古語の

手掌、不_レ如_二脚板、潤_一なる語を以てす、此錄に踏_レ備_レ脚版、潤_一と云た、踏の字に就て見れば此說亦た可也。

○外求_二有_レ相_レ佛_レ與_レ汝_レ不_レ相_レ似_レ欲_レ識_レ汝_レ本_レ心_レ非_レ合_レ亦_レ非_レ離_一

(辨) 是れは第八祖佛陀難提の偈也、有相佛とは三十二相八十種好ある底也、與_レ備_二不_レ相_レ似_一とは備が屋裡の眞佛にあらずと也、備が屋裡の眞佛を識らんと欲せば、備が本心是也、此心備が身に在りと雖ども、内外中間にあらず、故に非_レ合と云、内外中間にあらずと雖ども、行かんとする時は、備が身便ち行き、坐せんとする時は、備が身便ち坐す、故に非_レ離と云也。

○道流眞佛無形眞道無體眞法無相三法混融和合一處辨既不得喚作忙々業識衆生

(辨) 眞佛とは人々の法身佛也、其體は見聞の及ぶ所にあらず、故に無形と云也、眞道とは人々の報身佛也、其體は法身佛を以て體として別に自體なし、故に無體と云也、是れ法身佛の作用也、眞法とは人々の化身佛也、是れ變化無法にして形容すべからず、故に無相と云也、三法混融和合一所とは、大悟大徹の人は三身即一の受用、期せずして自然に自在無礙なるを云也、今時の學人は何れが眞佛やら、何れが眞道眞法やら辨する事さへ成らぬ也、是等の人をば喚て業識忙々の衆生と爲す也、中庸所謂天命謂_二之_一性_一は眞佛也、率_レ性_一謂_二之_一道_一は眞道也、修_レ道_一謂_二之_一教_一は眞法也。

○問如何是眞佛眞法眞道乞垂開示師云佛者心清淨

是法心光明是道者處々無礙淨光是三即一皆是空名而無實有如眞正作道人念々心不間斷

(辨) 佛とは只是れ一心也、一心の中に三種の品あるを分て佛、法、道と云也、三品の内本然清淨の體を佛と云、便ち法身也、光明ありて能く群昏を照破する底を法と云、便ち化身也、此光明の普く處々に流通して無礙なるを道と云、便ち報身也、如此三種の品あれども元來一心なる故に三即一也、只今所問に因て斯く説破すれども、是れは只名を説くのみ、佛の實體を直ちに顯はすにあらず、故に無_二實有_一と云也、若し是れ眞止修道の人ならば、着衣喫飯の處に於て、眞佛眞法眞道間斷なく現はる、也。

○自達磨大師從西土來祇是覓箇不受人惑底人後遇二祖一言便了始知從前虛用工夫

(辨) 達磨未だ西來せざる前は、諸人何れも教外別傳の旨ある事を知らず、只だ人の言句の跡のみを尋ねて、兎や角やと義解する故に、悉く皆人に惑はされて猥りに工夫を用る也、達磨の只た人の教跡に捕はれて、自己を知らざる事を憐で、之を救ふが爲めに西來すれども、始めは達磨の機に契ふ者なき也、後ち二祖來て些子も教跡に關せず、弟子心未_レ安_レ乞_レ師_レ安心_レと問た時、將_レ心_レ來_レ與_レ汝_レ安_レと示し更に覓_レ心_レ了_レ不可得_レと問へば、我_レ與_レ汝_レ安心_レ了_レと答へた、一言の下に便ち了_レ萬當_レして以來諸人何れも始めて教外別傳の旨ある事を知て、達磨以前は何れも猥りに工夫を用ひたる者と知る也。

○山僧今日見處與祖佛不別若第一句中得與祖佛爲

師若第二句中得與人天爲師若第三句中得自救不了

(辨) 臨濟の今日の見處は、便ち祖佛の知見と不異也、三句の事は前述せり、第一句中に得とは一句とは聲前の一句也、眼を眨すれば十万八千の所ぞ、此中に於て悟徹する人は、佛祖の爲に師となるべし、第二句中に得とは種々の方便門に入て所得あるを云也、佗の方便を借るは第二句也、與人天爲師とは、人を導て人中天上に得果せしむる底也、第三句中得とは相似の法を得て眞實と思て居る底の人也、便ち顯密の兩宗、法相、三論の類の、文に因て義を解する者なり、自救既に不了也、況んや利佗をや。

○問如何是西來意師云若有意自救不了云既無意云何二祖得法師云得者是不得云既若不得云何是不得底意師云爲備向一切處馳求心不能歇所以祖師言咄哉丈夫將頭覓頭備言下便自回光返照更不別求知身心與祖佛不別當下無事方名得法

(辨) 西來意には意なし、備若し西來意を論せば了期なけん、問ふ果して西來意に意なくば、二祖の達磨に逢ふて得たる所は何の法ぞ、答二祖の得所は實に得所なし、問、其得所なき底の法如何、答、備が一切處に於て馳求心未だ息まず、是れ古來の諸祖の演若達多が頭を覓る者也とて咄呵する所也、

其呵聲下に於て便ち馳求心息んで、自ら回光返照して見て、別に覓る所なくんば、便ち備が身心と佛祖の身心と不異なるを知るべし、己に是れを知らば其當下に便ち無爲無事なるべし、無爲無事にして茶に遇ては茶を喫し、飯に遇ては飯を喫せば、是れ便ち二祖の安心得法の所也、只た馳求の心を息めたのみにて實に得所なし。

○大德山僧今時事不獲己話度說出許多不才淨備且莫錯據我見處實無許多般道理要用便用不用便休祇如諸方說六度萬行以爲佛法我道是莊嚴門佛事門非是佛法乃至持齋持戒擎油不潤道眼不明盡須抵債索飯錢有日在何故如此入道不通理復身還信施長者八十一其樹不生耳

(辨) 元來一法なり、説示する事もなし、然れども今日如是商量する事は、學者の所問に依て、無餘義一此事に渉る也、話度とは説話を以て度生する也、不才淨とは我胸中所蘊の卑陋なる心志の不才不淨なるを云也、臨濟卑下の詞也、學者を話度する爲に、許多の不淨材を吐き、又た多言に渉るは眞にあらず、備等過まる勿れ、我か眞の所見の如くならば、多般の道理なし、上に二祖の不得を説く如く元來一法なし、只だ直下に無事なれば便ち佛祖と不異也、我が如是云を聞て備等如是用んと思

は、用ひよ、不用ならば我は別に示す事もなき故に休し去る也と云へり、諸方に六度萬行を説て之を眞の佛性とすれども、是れは只だ凡夫を眞實の所に導ん爲の門戸也、佛法眞實の處にあらず、莊嚴とは種々佛事を修飾するなり、佛事とは佛法上の諸事萬端にして眞法にあらず、或は又た持齋持戒して二十五里の間を油を撃けて、一滴も潤ばさぬやうに能く戒律を保つも、道眼不明ならば眞の役には立ぬ也、此等の入他日閻家に至らば、飯錢を索はれて何れも舊債を償ふべきぞ、潤は流るゝ貌、又た水動く貌、擊油の事涅槃經阿含經にありとか、何故如此なるや、臨濟債償の證據に、伽那提婆の偈を引く、便云、入道不通理復身還信施、長者八十一其樹不生耳と云たは、昔日毗羅國に梵摩淨徳長者あり、其園中に菌の生ずる樹あり、長者並に第二子の羅睺羅多と二人此菌を喰ふに甚だ美也、只だ父子二人のみ知りて他人は此菌を見ることなし、有る時迦那提婆其家に到る、長者菌の事を以て其宿因を問ふ、提婆答へて曰く、昔日一比丘あり、今の長者父子常に能く此比丘を供養す、他人は然らず、此比丘道眼未だ明ならずして、空く父子の信施を受ける故に、死後此菌と成つて舊恩を報ずる也と説きたて長者の壽を問ふ、答云七十九と、提婆云く彼の比丘信施を受ける事八十一年、今年二年の間菌生すべしと云て便ち偈を説く、入道不通理云々の偈也、其意は此比丘既に道に入て修行すれども、未だ道理に通せず、斯かる身を以て人の信施を受ける事は罪也と料簡して、身を復して菌と作つて信施の恩を還す、前世信施を受けること八十一年なれば、長者の年八十一歳にならば此樹菌を生すべからずと也、如此論例もあり縦ひ六度萬行を修し、持齋持戒潔白なるも、道眼不明の者は生を轉して必ず舊債を償はん事必せりと。

○乃至孤峯獨宿一食卯齋長坐不臥六時行道皆是造業底人乃至頭目髓腦國城妻子象馬七珍盡皆捨施如是等見皆是苦身心故還招苦果不如無事純一無雜乃至十地滿心菩薩皆求此道流蹤跡了不可得所以諸天歡喜地神捧足十方諸佛無不稱歎緣何如此爲今聽法道人用處無蹤跡

(辨) 乃至とは上説の不足を續くる也、人跡絶へたる山上に只一人清廉に棲み、卯の時に只一食して終に横臥する事もなく、二六時中勤行三昧なりとも、道眼不明ならば皆造業の衆生也、或は又た我が頭目髓腦より、國城妻子象馬七珍等、悉く三寶に供養するも何の功もなし、如此身心を苦る故に却て苦果を招く也、苦果とは地獄の報にあらず、分段の身を受けて衆苦充滿して、三界に來るは苦果也、左れば無事にして打成一片なるは優れり、無事が惡果を招く事なし、縦ひ十地滿身の菩薩と雖ども、如是打成一片に無事なる人の蹤跡を求る事は成ぬぞ、是とも非とも名くべき所なき也、便ち事前に當る時のみ心を以て相應して、第二念に涉らぬ故に蹤跡なき事、鏡の漢來漢現胡來胡現の跡なきが如し如此無心の道人をば、諸天も歡喜し地神は足を捧げ、十方の諸佛も歎美する也、其故は聽法無依道人の用所跡なき故也、無依道人の儘に受用する人は、其人も蹤跡なき也。

○問大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道未審此意如何乞師指示師云大通者是自已於處處達其萬法無性無相名爲大通智勝者於一切處不疑不得一法名爲智勝佛者心清淨光明透徹法界得名爲佛十劫坐道場者十波羅密是佛法不現前者佛本不生法本不滅云何更有現前不得成佛道者佛不應更作佛

(辨) 此偈は法華化城喻品の偈也、臨濟此偈を釋して佛の内證を示す也、大通智勝佛と云は只是自己を指て云也、自己妙用の真心能く萬法の無性無相に達するを大通と名く、無性無相とは、萬法は悉皆因縁和合より生ず、因縁離散すれば總て物なし、一草一木と雖ども地水火風の四大を借りて形を成し、佛性の援助を請ふて花を生じ實を結ぶ也、因縁離散すれば草も木もなし、萬法無性無相と云也、能く此理に通達するを大通と云也、但し此佛は通達せんと不欲共、始より通達する也、智勝とは大通の故に一切萬法に於て不疑、不疑故に凝滯する所なし、凝滯せずんば何の一法かあらん、故に不得一法と云也、是を智勝と名く、佛とは心の清淨無爲に智光の圓滿して法界に透徹するを云也、是れ臨濟一言に三身を總説する也、清淨とは法身也、光明とは報身也、透徹とは化身ぞ、如此自己の妙用あるを大通智勝佛と云也、十劫坐道場とは、十劫とは十波羅密なり、祖、戒、忍、進、禪、慧、方、願、力、

智の十種也、波羅密は到彼岸と譯す、菩薩此十種の法を修め、自利々佗して彼岸に到る也、大通智勝佛の妙用亦十種の法を具す、之を十劫坐道場と云也、道場とは是を修する所也、此佛常に其所に住する也、涅槃經に佛身充滿法界普現一切群生前隨緣赴感靡不周而處此菩提座と云を以て可辨、按佛法不現前とは勿論の事也、佛は本來不生不滅、法亦た不生不滅なれば、現前すべきやうなく現前せざる佛法なれば、縦ひ是を求る共是を得て成佛すると云事なし、況や既に是れ大通智勝佛更に佛と作らんや。

○古人云佛常在世間而不染世間法道流備欲得作佛莫隨萬物心生種々法生心滅種々法滅一心不生萬法無咎

(辨) 此段は古人の語を引て、前段の大通智勝を重ねて斷る也、佛とは智勝佛也、常在世間而不染世間法とは、自己妙明の真心、行住、坐臥、着衣、喫飯の所に於て、日夜種々不善穢惡の事と相交れども、毫も其染汚を受けず、珠の泥に在て染まざるが如し、爾既に此心を具すれば、元來是れ佛なりと雖ども只萬物萬境に隨ふ也、若し元來の佛に還らんと欲せば、萬物に隨ふなかれ、唯識論か起信論に心生すれば種々法生し心滅すれば種々法滅すと云は、例之ば樂廣が盃中の弓影を蛇と誤認して病めるが、後ち弓影なることを悟て病忽ち癒るが如し、弓影の心生するが故に病生じ、又た其心滅するが故に病癒ゆ、皆是れ心の業也、又た三祖大師信心銘に一心不生萬法無咎とは、例之は夜中

途に茄子を踏んで蛙を踏殺せりと誤信し、其夜の夢に蛙に責められた等は全く茄子に咎なし、此方が蛙と誤認せし心の生ぜし故に、無辜なる茄子に罪を負はする也、佛心物に随へば如此種々迷想を生ずる也、依て莫隨萬法と云也。

○世與出世無佛法亦不現前亦不曾失設有者皆是名言章句接引小兒施設藥病表顯名句且名句不自名句還是爾目前昭々靈々鑑覺聞知照燭底安一切名句大德造五無間業方得解脫

(辨) 世出世の間に於て元來無佛法也、左る故に佛法不現前、不得成佛道と云也、無眼子共が佛法ありと思ふて、日夜研鑽する者は、其紙上の名言章句のみにして、只是れ小兒の啼を鎮め一時の病を療するの藥方也、決して永遠の實事にあらず、左れば此名句の出所を求めんに、名句自身が持出した者にあらず、畢竟昭々靈々底の神識の思惟分別より出たる者也、凡そ紙上所記の佛法は皆人作也、天然の佛法は世出世の間に於て一點もなき也、爾只だ勤めて五無間の業を造りて大解脫を得べしと也五無間の業は下に見へたり、昭々靈々は神識の體也、鑑覺聞知は神識の用也、鑑覺は前に當る事を便ち照燭し知覺する事、鏡の物を照す如し。

○問如何是五無間業師云殺父害母出佛身血破和合

僧焚燒經像等此是五無間業云如何是父師云無明是父爾一念心求起滅處不得如響應空隨處無事名爲殺父云如何是母師云貪愛爲母爾一念心入欲界中求其貪愛唯見諸法空相處々無着名爲害母云如何是出佛身血師云爾回清淨法界中無一念心生解便處々黑暗是出佛身血云如何是破和合僧師云爾一念心正達煩惱結使如空無所依是破和合僧云如何是焚燒經像師云見因緣空心空法空一念決定斷迥然無事便是焚燒經像大德若如是達得免被他凡聖名礙

(辨) 五無間業とは五逆罪を云也、此造罪は必ず阿鼻地獄の業也、阿鼻は無間と翻す、咎を受る事間斷なき故也、地藏本願經第三に詳説せらる、但今臨濟が説く所は地藏經の意にあらず、楞伽經に佛、大慧の爲に説く所の義にして尋常とは異れり、便ち父とは無明を云、人の三界に輪回して分段の身を受る事は、無明を以て種子として此身を生ず、故に無明を父と云也、殺父とは無明を斷するを云也、爾自ら能く看よ、爾が一念心の起滅するは、何所より起り何所の處にか滅するや、全く起滅の基あるべからず、只だ空に答る木玉の基本なきが如し、爾が無明も亦復如是、時々刻々起滅するも元來

起滅の基本なし、若し如此見得して無明なきことを知らば是便殺父者也。母とは備が貪愛を云也、備が欲界の中に在て日夜貪着し愛着する處を見よ、何者が貪着するか、貪愛するか、扱一物なし、眼を着れば只だ諸法悉く空なるを知るべし、諸法の空相を見れば、一切の所爲所作盡く無着なるべし、既に無着なれば是便害母者也、出佛身血とは、佛を截断するを云也、清淨法界とは佛の境界也、備佛の境界に於て一點の解會を生ずる事なく、黑暗にして見る所なければ是れ佛身を截断して永く佛見なき者也、是を出佛身血と云、僧は諸方より來集し衆とは和合する也、故に比丘を翻して衆和合と云也、煩惱も又た種々の迷妄和合する者也、相比して僧と云也、結使と云も煩惱の事也、九結、十結、十使八十八使等あり、備か一念心能く明了にして、今日上種々の煩惱結使は本來虛妄にして、空の所依なきが如しと悟れば、是破和合僧者也、焚燒經像とは、一切の因縁を截断して日常無事なるを云也、經像とは是れ佛事因縁の種々集る所を云、備心空法空の眼を得て、是に依て一切の因縁悉く空也と截断して、備が一念心常に能く二空を決定すれば、日用種々の因縁に涉ると雖ども敢て眼に遮る者なし、是れ經像を焚毀する者也、未だ因縁空を得ざる者は、五無間の業を造る能はず、故に却て佛法に迷て佛、菩薩、菩提、涅槃の名を聞て欣び、三惡四趣無明煩惱の名を聞ては厭ふ、如此取捨すれば、佛法の中に居て佛法に迷ふ者也、只だ能く五無間の業を造れば、凡聖の名に礙へられざる也。

○備一念心祇向空拳指上生實解根境法中虛捏怪自輕而退屈言我是凡夫佗是聖人秃屢生有甚死急披他

師子皮却作野干鳴大丈夫漢不作丈夫氣息自家屋裏物不肯信祇麼向外覓上他古人間名句倚陰博陽不能特達逢境便緣逢塵便執觸處惑起自無准定

(辨) 備が一念誤て空拳の上に向て實解を生ずる也、一切の教經聲名文句は皆な小兒を賺す空拳也、備は是れを空拳と知らず、他の聲名文句に向て眞實の會を爲す、根境とは六根六境也、備六根を以て六境に對する時心生じ、種々の法生じて自ら捏怪せらる、自輕而退屈とは我身を輕んずる也、可及丈出精すべきが當然なるに、我と我身を卑下して早く退屈する也、其上に自ら云、我れ元來凡夫の故に不悟、他人は皆な上器にして早く大悟を得る云々、死急とは死に近ければ氣息が急なる者ぞ、左る時は平生の所存が皆替り、所存の替るを死急と云也、今の學人の我は凡夫、他人は聖人と云は誠に死急の者也、隨分の人柄で此般の事を云ふは、獅子皮を披て野干の鳴を爲す者也、形は大丈夫なれども少しも其氣息はなき也、我が屋裡の器物を知らずして却て外に向て、他人の閑名句の上に就て求るは、皆所存が替り丈夫の氣息はなき也、屋裡の物は自己の家珍也、閑名句は聲名文句ぞ、倚陰博陽は陰陽師の事、陰陽の算數を考へて種々計校卜度する也、一只筋に特達なる事はなき也、逢境便緣逢塵便執とは境に迷ひ塵に着する迄也、自無準定とは準定は定規也、境に緣し塵に執して、一生迷て果さば、何を取り留て定規とせんや、定規あればこそ惡き所を矯正して、佛法正直の道に至るべけれ、之れなくば何の極かあらん。

○道流莫取山僧說處何故說無憑據一期間圖畫虛空如彩畫像等喻道流莫將佛爲究竟我見猶如廁孔菩薩羅漢盡是枷鎖縛人底物所以文殊仗劍殺於瞿曇鴛掘持刀害於釋氏

(辨) 爾等我が今説く所を取りて準定となして、佛法如此と思ふ勿れ、其故は古人の言跡を踏みて説きたるにもあらず、又た何の證據もなき也、只だ一往學者の惑を救はん爲に、我が思ふ儘に説破する也、此説破も亦た虚空を畫圖する者也、虚空は畫く能はず、佛法も亦た口に説かれぬ者ぞ、如彩畫像等、喻とは、華嚴第十九に覺林菩薩の偈あり、其偈は畫師の人の像を畫きて、種々の彩色を以て色々の相を現はす事ぞ、心の一切萬物を現するに喩へたる者也、是れを彩畫像喩と云也、今臨濟の云所は、口説の分は皆繪空事じやと云た者也、覺林の偈は畫師を心に比して云た者にして、其意少しく相違するも、畫圖虚空と云に付て畫師の喩を引く也、爾等は佛を至極究竟の物と思へり、我は佛を見ること廁孔の如く、菩薩羅漢は桎械枷鎖の如し、廁孔は東司の壺也、桎械枷鎖とは種々の事を説て人に迷惑さする故に云也、佛、菩薩、羅漢も人に迷惑さする曲者なれば、文殊は佛を殺さんとし、鴛掘も亦殺さんとする也、文殊の劍、鴛掘の刀は佛を割せん爲にはあらず、別の仔細あれども、臨濟茲に引來りて、如是取り爲して用ゆる也。

○道流無佛可得乃至三乘五性圓頓教迹皆是一期藥

病相治并無實法設有皆是相似表顯路布文字差排也且如是説

(辨) 三乗とは聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘也、五性とは菩薩乘性、緣覺乘性、聲聞乘性、不定乘性、聞提乘性也、圓頓とは圓教、頓教也、是等の教迹は只是れ一時の藥方にして、咳嗽程の當座の迷ひを息れども、永く生死截斷底の眞佛法此中にはなき也、然かも教迹中の佛法は皆相似の法也、皆表顯の法也、路布せん爲の文字まで也、差排とは取扱ふ事也、是等の教迹は何れも聲名文句を以て、種々差排して説く者也。

○道流有一般禿子便向裏許著功擬求出世法錯了也若人求佛是人失佛若人求道是人失道若人求祖是人失祖大德莫錯我且不取爾解經論我亦不取爾國王大臣我亦不取爾辨似懸河我亦不取爾聰明智慧唯要爾真正見解道流設解得百本經論不如一箇無事底阿師爾解得即輕蔑他人勝負修羅人我無明長地獄業如善星比丘解十二分教生身陷地獄大地不容不如無事休

歇去飢來喫飯睡來合眼愚人笑我智乃知焉道流莫向
文字中求心動疲勞吸冷氣無益不如一念緣起無生超
出三界權學菩薩

(辨) 一般禿子が教述の中に向て、功を着けて出世の法を求めんと擬するは錯れり、着功とは功夫を着る也、若し佛を求めば是れ佛を失する者也、若し道を求めば是れ道を失する者也、若し祖を求めば是れ祖を失する者也、其故は求めば彌々遠く彌々背く者なれば也、備が千經萬論に通じたるも、我は棄て取らず、備が國王大臣となりて徳高く勢豊なるも我は捨て取らず、備が能辯深の流るゝ如く法理を説くも我は捨て、取らず、備が聰明利根なるも我は捨て取らず、只備が真正の見解あらば是れ我望む所也、縦ひ百卷の經論を解し得て明なるも、一箇無事の阿師には不如也、其故は無事の阿師は、事を廣く知らぬ迄にて迷なし、備等は纔かに解し得て忽ち自負して人を輕賤する也、些事なり其人と勝負を争ふは修羅の業也、人我の見は便ち無明也、是れ地獄の業也、善星比丘は佛の姪也、十八匹の香象に載する程の經を解得して、十二分教に明かなれども、空見に落て正法を謗る罪に由て生身地獄に落る也、善星比丘の事は大經三十三並に楞嚴會解に詳也、大地も不容とは善星比丘の如く惡見なる人ならば、大地が許して戴かぬ、地獄へ排擠する也、左れば縦ひ經論に通せざるも、無爲無事に休歇して、飢來喫飯睡來打眠し安泰に日を送れば、善星比丘には勝りたるぞ、縦ひ愚人は我が經論に暗きを笑ふとも、智者は却て我を知るべきぞ、文字の中に求めば得る事なく空く疲勞する也、氣の中より外に出

る者は温也、外より内に入る者は皆冷也、左れば外に向て求るは冷氣を内へ吸ひ取る也、疲勞して冷氣を吸ふは身に益なし、一念緣起無生とは、無事無心の人は胸中常に洒落一點の物なし、前に當る所の緣に應じて心一旦、現すと雖も緣去れば心亦た寂す、此心無生にして生ず、空谷の響の如し、敢て着する所なし、此の如く受用する人は縦ひ一文不通の者なりとも、三界小乗の菩薩には超出すべし左る程に文字中に求る者は、此無心無事の道人には不如也、權學とは初地の菩薩也、大乘の菩薩は三界を出離して意生化身すれども、初地權學の菩薩は未だ三界分段の身を不脱也。

○大德莫因循過日山僧往日未有見處時黑漫漫地光
陰不可空過腹熱心忙奔波訪道後還得力始到今日共
道流如是話度勸諸道流莫爲衣食看世界易過善知識
難遇如優曇華時一現耳

(辨) 因循は荏苒の義也、何や彼やに徒らに日を過す事勿れど、臨濟始め未だ見處なき時は、何事を見れども聞けども心は暗夜の如くであつた、徒らに光陰を過すべからずと、深く思ひ定めて急に心を着て參禪する程に腹が熱し心忙し、奔波は波々地と同意、波の奔る如く急なる也、臨濟は黃葉の指南に依て大愚に到て力を得てより、今日此臨濟と成りて學者の爲に此の如く話度する也、世界易過とは人の世に在る事は僅かの間也、日々夜々に推移て一生の間は少しの事ぞ、善知識には難遇ぞ、優曇華の偶ま現する如くなり、只た勤めて善知識に參尋して大事を了畢せよと也。

○備諸方聞道有箇臨濟老漢出來便擬問難教語不得被山僧全體作用學人空開得眼口總動不得情然不知以何答我我向伊道龍象蹴踏非驢所堪備諸處祇指胸點肋道我解禪解道三箇兩箇到這裏不奈何咄哉備將這箇身心到處簸兩片皮誑諱閻閻喫鐵棒有日在非出家兒盡向阿修羅界攝

(辨) 此所の教の字と語の字の間に脱したりと見へたり、正本を以て可考、臨濟の學人に向て云やうは、備等諸方に於て臨濟老漢と云者ありと聞て、何さま此人と問答せんと思て、此間に來て難問を掛けて、我が語を出す事の爲らぬ様にせんとて、腕を扼して來る者あれば、我便ち伊れに向て全體作用するに、我に全體作用せられて、彼れは眼を張り口を開けども、聊も我を動着すること不得也、憐然として我に答ふべき様を知らず、其時我れ伊れに向て龍象蹴踏非驢所堪と云也、此語は維摩經の第一にあり、彼れ學人諸方にある時は、自ら胸を指し肋を點して、我こそ禪を解し道を解したれと自負すれども、三箇兩箇這裏に來ては、全體作用の作略に逢て、呆然として如何とも爲し能はざる也と云、一咄して又た云ふやうは、這般の身心を以て到る所に兩片皮を簸て、在々所々に於て誑す、故に他日閻家に於て鐵棒を喫する日あるべし、是等は出家にあらず、好て人と勝敗を争ふ者、

便ち阿修羅界に接して畜生同前の者也と云へり、肋は脇骨也、點肋、點胸と同じ、諑は説と同じ、誑也、問は二十五家ある里を云也、閻は里中の門也。

○夫如至理之道非諍論而求激揚鏗鏘以摧外道至於佛祖相承更無別意設有言教落在化儀三乘五性人天因果如圓頓之教又且不然童子善財皆不求過大德莫錯用心如大海不停死屍祇麼擔却擬天下走自起見障以礙於心上無雲麗天普照眼中無翳空裏無花道流備欲得如法但莫生疑展則彌綸法界收則絲髮不立歷々孤明未曾欠少眼不見耳不聞喚作什麼物古人云說似一物則不中備但自家看更有什麼說亦無盡各自著力珍重

(辨) 佛法至極の道理は言語同斷心行所滅なれば、兎角の穿鑿に涉る事にあらず、然るを問答往來して互に詰責諍論して、争てか至極の道理に契ふべきぞ、激揚とは人に逆らひ我理を擧揚する也、鏗鏘とは鏗は金聲也、鏘は玉音也、互に言辭明快に金聲玉音を出して、我道に在らざる者を摧伏せんとす

るは皆非也、佛々祖々相承し來る所は、只一道にて別意なき也、縦ひ言教あつて學者の諍論に涉るべきありと雖ども、そは至極の道にあらず、皆佛法の化儀に就て三乘五性人天因果等を説く上の事也、緣覺乘は聲聞乘に優ると云ひ、又た菩薩乘は緣覺乘に勝ると云ひ、五性は各別にして闡提の者は永く成佛せぬと云ひ、否々闡提も成佛すると云類の事也、是皆化法の上の事也、圓頓教に入ては左はなき也、童子善財皆不_二求過_一とは、善財童子が一百十城を超へて、五十三人の知識に次第に參見すると云へば、修行に段々の次第ある如きも實は然らざる也、善財は只だ一念頓悟する者也、次第を歴て人に求るにあらず、故に皆不求過と云也、是れ至理の道也、大海には死屍を止めぬ如く、大道は只一枚に清淨無爲也、何の諍論かあらん、然るに諸人が何れも我が立る所の道を荷擔して天下に奔走するは、自ら見障を起して我力の流通すべき所を塞く者也、見障とは分別の煩惱也、日上とは日面を云た、日面に雲なければ天下普く照し、眼中に翳がなければ空裡に花なし、諸人の見障、何れも日上の雲の如く、眼中の翳の如くにして、大道の理に暗く種々の花を見る也、爾等如法なる事を得んと欲せば、只疑を生ずる事勿れ、纔に疑處あれば皆是れ見障なり、疑なければ見障なし、見障無ければ大道自然に流通する也、大道流通すれば大小圓融一多自在にして、展る則は法界に瀾淪し、收_レ即_レ絲髮も不_レ立也、孤明歷々として我上に於て只た一も缺たる所なし、孤明歷々底は、眼にも不_レ見、耳にも不_レ聞、爾喚て何物とかせん、若し一物となさば即_レ不_レ中、南岳讓禪師の説似一物即_レ不_レ中と云はれたは道理也、爾只自家に於て自から見よ、自家には何物があるぞ、我が何程説くとも説き盡す事はあるまいぞ、只自ら力を着けて究明するが肝要ぞ、珍重とは自愛せよの義にて祝して收めた。

勘辨

(辨) 勘辨とは、衲僧の一機一揆一拶の所に於て、師家は學者を試み、學者は師家の長短深淺を試み、互に邪正を辨するの手段也、故に其意子合は佛祖も窺ひ難し、本分、現成、色相等の三境界を參得したる分にては知り難き境界也、然れども三境界の用より行ふ手段也。

○黃檗因入厨次問飯頭作什麼

(辨) 扱勘辨の義を上述べたが、是より以後の商量は尋常にあらず、互に機を含んで龍象相爭ふ底の怖ろしき者じや、黃檗或時厨に入りて、飯頭に向て什麼をして居ると問ふた、表面は何事なき問なれども、臨濟の本師黃檗希運禪師の一間じや、必ず深き仔細あらん、此釣針は浮つかりは喰ひ付けまいぞ。

○飯頭云揀衆僧米黃檗云一日喫多少

(辨) 飯頭は單純に雲粥の飯米を扱へますと答へ、好惡未だ顯はれてない、故に黃檗は何程喰ふぞと、何氣なき態の間ではあるが、底裡には飽迄飯頭を見定めんとする、句中が充分に含まれてをる。

○飯頭云一二石五

(辨) 答話も亦た極めて單純だ、然れども黃檗の句中に對しては、何程大機を具したる僧も、一應は柔かく素直に答ふべき所だ、又た初機の學人なれば、轉所に疎き故、猶更斯く驀直に答ふべき也、同一答話にも格段の優劣がある。

○黃檗云莫太多麼

(辨) 僧の答へた所は眞直ではあるが、未だ眞の好悪を知るに至らず、依て今一度試みて是非を決せんと思ふて、莫太多麼と問ふた、畢竟人を殺さば血を見るべしで、止めを刺さねば置かぬ、黄檗程の大機が何とて人を生殺しの儘に放却せんや。

○飯頭云猶恐少在

(辨) 惜むべし、飯頭未だ眞眼なく、黄檗の句中を察すること能はずして、只偏へに猶恐少在と答へた、黄檗は二石五とは餘り多量ではないかとの間に對して、眞直に否々未だ少々不足でござると云たのみ、黄檗が始め懸念せし如く此僧眞金ではなかつた。

○黄檗便打

(辨) 黄檗も二度まで機を藏くして、うんなりと問たが、最早堪へられずして飯頭を強く打つた、便ち句中を暴露せられし也。

○飯頭却舉似師

(辨) 飯頭は何故に黄檗の痛棒を蒙つたかを知らず、却て疑ふ故に、前の商量の顛末を臨濟に舉似し何の過あつて黄檗は打たかを問ふた。

○師云我爲汝勘這老漢

(辨) 飯頭が臨濟に訴へたる爲に事件は發展するぞ、臨濟忽ち腕を扼して云ふ、待てた、我儂が爲め

に彼老爺を強か遣り付けて呉れようぞ云々。

○纔到侍立次黄檗舉前話

(辨) 暫時にして臨濟が侍立する時、黄檗が飯頭の到らぬ處を憐みて、臨濟に其顛末を語つた。

○師云飯頭不會和尚代一轉語便問莫太多麼

(辨) 臨濟は黄檗に向て云、飯頭が會せずんば、和尚彼れに代りて答へられよと、即時に莫太多麼と問ふた、臨濟は早く内に機を藏して問ひ掛けたる也。

○黄檗云何不道來日更喫一頓

(辨) 黄檗は別に深慮する事もなく、飯頭に向て云ふ如く、何故に道はぬぞ、其般の事であれば、更に一頓の棒を與ふべしと道た、機用縦横なる臨濟に向て斯く云は甚だ危険ならん。

○師云說什麼來日即今便喫道了便掌

(辨) 臨濟は黄檗に向て來日などは手緩し、即今喫せよと直ちに一掌を與へた、打たは弟子打たれたは師也、當機不讓師の端的也、此の間法に忠實なるは勿論師弟互に血涙の溢る、所ならん。

○黄檗云這風癩漢又來這裡埒虎鬚

(辨) 黄檗は掌せられて威丈高に云た、這の氣狂め、又這所へ來て虎鬚を弄するかと呵したが、既に遲し、臨濟は迅速に走る黄檗は到底及ばず、大小の黄檗も臨濟の機鋒には不及也。

○師便喝出去

(辨) 黄檗が何と云はれうと儘よ、臨濟は直下に喝して去れり、實に頭正く尾正き也。

○後瀉山問、仰山此二尊宿意作麼生、仰山云、和尚作麼生、瀉山云、養子方知父慈。

(辨) 臨濟の機用越格なるを見て、是程迄に臨濟を養成したる黄檗の慈悲が、思ひ遣られるとて父子共に感ずる也。

○仰山云、不然瀉山云、子又作麼生、仰山云、大似勾賊破家。

(辨) 黄檗が來日一頓を喫せしめんと云はれたは餘り手緩き故、臨濟が本師たる黄檗に一掌を與へたは當然の事也、黄檗の打たれたは、態々賊を家に引き入れて家産を破る如き也、此の言は一層瀉山に勝れり。

○師問僧什麼處來

(辨) 臨濟が爾は何所より來りしやと僧に問た、是れ釣針也、何所より來るかを問ふにはあらず、僧の見所を試んが爲也。

○僧便喝

(辨) 僧は見事に一喝した、見事にはあれども、眞實自己の道力より出しや、又たは學語の類なるや

未だ決定し難し。

○師便揖坐

(辨) 臨濟は僧の一喝の眞偽を檢する爲、異様の態度を取られたり、便ち揖坐せし也、謙讓の體で坐し、此僧に會釋せり、只今の一喝實に見事ぢやとの様子を裝ふ也、此僧何と働くべきぞ。

○僧擬議

(辨) 臨濟が疑着されたる如く、此僧の道力未だ全からず、臨濟の越格なる作略に擬議せし也。

○師便打

(辨) 臨濟は一棒を與へて、僧の短所を決した。

○師見僧來便竖起拂子

(辨) 臨濟は無言で拂子を竖起したは、僧に何とか云はせて、其好惡を試ん爲也。

○僧禮拜

(辨) 臨濟が無言で拂子を竖起するに對して、此僧亦た無言で禮拜した、恰好の働き也。

○師便打

(辨) 僧の無言で禮拜した機用を肯うて、賞棒を與へた。

○又見僧來亦竖起拂子

(辨) 臨濟が無言で拂子を竖起して、僧が何と働くかを試みた。

○僧不顧

(辨) 此僧臨濟の胸中を勘破して、見ぬ振りして去つた、臨濟の如き賊は家には入れぬと云氣味也。

○師便打

(辨) 臨濟は僧が顧みずして去た所を肯うて打た、賞棒也。

○師一日同普化赴施主家齋次師問毛吞巨海芥納須彌爲是神通妙用本體如然

(辨) 臨濟は普化に向て問ふ、毛吞巨海芥納須彌と云は、是れ神通妙用が將又た根本の道理當然の者かと問たは事を假設して普化を試る也。

○普化踏倒飯床

(辨) 普化は直下に飯床を蹴倒した、臨濟の機に當て觀面の機用を現はした、凄まじき働き也、畢竟飯床を踏倒せしは臨濟を踏倒せしに均し。

○師云太麤生

(辨) 本來臨濟は普化以上の働きを爲すべきに、強て「うんなり」と夫れは少しく太麤生、便ち手荒過ぎるではないかと云た、普化の首尾を篤と勘檢する爲也。

○普化云這裡是什麼所在說麤說細

(辨) 普化たる者中々臨濟の網に罹らぬ、直に云、納僧本分の上に何の麤細の沙汰あらんや、迂遠な言を云るゝぞとて空嘯く也。

○師來日又同普化赴齋今日供養何似昨日

(辨) 此日も普化と同く臨濟は齋に赴た、而して普化に問た、昨日も今日も供養を受たが、兩日共に同様なりや、又は異なるありやと。

○普化依前踏倒飯床

(辨) 普化は昨日の如く飯床を踏倒した、當然の事也。

○師云得即得太麤生

(辨) 飯床を踏倒せしは當然ならんが、餘り麤忽な行動じやと云はれたは、普化を再度試みし也。

○普化云瞎漢佛法說什麼麤細

(辨) 普化は臨濟を頭から抑下して瞎漢と呼んで、佛法の上に什麼の麤細かあらんと勢強く叫んだ。

○師乃吐舌

(辨) 普化の狂威能く臨濟を罵倒したるに、膽を潰し怖ろしき普化なる哉と思ふて舌を吐かれた。

○師一日與河陽木塔長老同在僧堂地爐內坐因說普

化毎、日、在、街、市、擲、風、掣、纒、知、他、是、凡、是、聖、言、猶、未、了、普、化、
入、衆、來、師、便、問、汝、是、凡、是、聖、

(辨) 臨濟が河陽、木塔と僧堂の地爐にあたり乍ら、普化毎日市中に出て狂態を現はして居るが、彼は伴狂か真狂とか語り合て居る所へ、不圖普化が來られた、臨濟は直下に普化に向て、汝は是れ凡か聖かと問はれた、今蔭口を語りて居る所へ當人が來た故に、無遠慮にも面のあたり問ふた。

○普化云汝且道我是凡是聖、

(辨) 普化も慣戦の作家だ、直に敵の鎗を奪ふて敵を刺した。

○師便喝

(辨) 普化の機用の敏き事は、臨濟も能く知悉すれども、臨濟面前には一物なく、凡聖是非共に喝破する也。

○普化以手指云河陽新婦子木塔老婆禪臨濟小厮兒
却具一隻眼、

(辨) 普化は勝手次第に三人を批評するが、就中臨濟を小厮兒と抑下す、小厮兒の義、詳細記する所あるも、畢竟惡戯をする少年と云程の意也、而も具一隻眼と云て托上至極して居る、河陽の花嫁禪やら、本塔の老婆禪やらの類ではない、大明眼を具する者は、獨り臨濟のみじやと、ぞつこん惚れ込んで居る也。

○師云這賊

(辨) 普化は面前の三人を批評し抑揚する事、實に狂の如しと雖ども、問答の始末及び批評の真意は毫も實を失はぬ、然るを狂態を演じて居るは、態と化けて居る者じやと、臨濟が知りて這の賊と云はれた。

○普化云賊賊便出去

(辨) 普化は臨濟が這賊と云た心を知悉して、賊々と云た、汝も賊なら稽も賊じやと、知音同志の水も漏さぬ掛合じや。

○一日普化在僧堂前喫生菜師見云大似一頭驢

(辨) 臨濟は普化をして、大機用を起さしめん爲に、頭ごなしに驢馬が草を喰ふ如きじやと云た。

○普化便作驢鳴

(辨) 普化も去る者、臨濟が頭ごなしに驢馬呼ばはりして一戦を挑む者じやと勘破して、態と驢鳴を作して戦機を逸せしめた。

○師云這賊

(辨) 臨濟が頭ごなしに普化を抑下して、驢と叫びて挑戦する機を、普化は勘破し、却て引きちがへて驢鳴を爲したは賊機也、其れを亦た臨濟が知悉する故に、這賊と云はれた、是亦た知音同志也。

○普化云賊々便出去

(辨) 普化は合點して、我も賊、其方も賊よと云て出去た。

○因普化常於街市搖鈴云明頭來明頭打暗頭來暗頭打四方八面來旋風打虛空來連架打

(辨) 明頭來とは、意子を藏す事なく現はに問來るを云、暗頭來とは句中機を藏して計り難きを云也。明頭打暗頭打とは、分明に問來るをも、句中を含で問來るをも、當るを幸に問不容髮打て除くる也、或は四方八面より問來るをば、片端より打て除くる也、辻風等の吹くやうに、繞り打に打つを旋風打と云た、或は又虚空より問來るをば、棒を振り擧げて便ち虚空にて打つ也、連架打とは禾を打つを云、棒二本を一つに續き合せて、先の棒はくるりくるり廻る様に作りて、振り上げて打つ也、普化の衆流截斷の機用峻峻なる上から、何物が何所から來るをも、餘さず漏さず除くなり。

某識者云く、今時の學者普化の轉所の機を専ら愛する故に、此段を截斷にあらずと云は甚だ非也、轉所の機は何れの處より來るや、截斷の機の峻はしき處より來る事を不知。

○師令侍者去纔見如是道便把住云總不與麼來時如何

(辨) 臨濟が侍者を遣はし普化が明頭來暗頭來云々と云て行く所を、忽ち把住して云ふ、何も來らぬ時は如何と撻した、何方へも逃げ路のなき名譽の一撻也。

○普化托開云來日大悲院裏有齋

(辨) 問話の機用も峻はしきに應じて、極めて妙なり、恰も水上に胡蘆を捺する如く、臨濟の明頭來暗頭來、與麼、不與麼の沙汰もせずして、來日大悲院に齋があると云た、瓢箪の水に浮きたるを、抑んとすれば、彼所に潜て抜け、又た此方に抜けるなり、臨濟が抜かさぬ様に構へても、抑へられぬ所普化の夕譽也、托開とは突放す事也。

○侍者回舉似師師云我從來疑着這漢

(辨) 常に普化の機用の管ならぬを不審がつて居られたが、此度の撻所に能く答へた所から、日比の不審が晴れて、確かに決定されたり。

○有一老宿參師未曾人事便問禮拜即是不禮拜即是

(辨) 凡そ新到の學人が相見の禮義は正き叢林の作法あり、此老宿は人事の禮拜すべきか、又はすべからざる乎と問也、極めて無禮なる働きにて、臨濟を瞞却した者也。

○師便喝

(辨) 老宿の機に當て其無禮を喝した。

○老宿便禮拜

(辨) 何人たりとも初めて師家に相見する時は、禮拜するが定めた作法じや、然るを某が今問ふた所は無禮也、其無禮を喝せられしは理の當然じやと云様子にて、禮拜はすれども内心尙も毒氣を含む也。

○師云好箇草賊

(辨) 臨濟元より大賊なれば、能く賊を知りて見違ふ事なし、此老宿の何氣なく禮拜すれども、其肝膽を透視して此草賊と云はれた。

○老宿云、賊々便出云。

(辨) 臨濟も此老宿も充分機を藏くして互に賊機を試みたが、最早互ひに化の皮が露はれた、老宿は賊より上の賊じやと云て去つた。

○師云、莫道無事好。

(辨) 扱こそ斯道の商量は、無事では濟まされぬ、世話にては兎角世間に事なかれと云が、斯道の問答は全く反對だ、例之は今の此問答の上に於て、老宿が禮拜したるを、尋常人事と思ふたら立枯れじや、中々句中を藏くして居る也、夫れを臨濟が看破して這賊と云た、老宿も最早白狀の外なきに至り、賊々と云つて去つた、此如飽迄互ひに追劔さして、互ひに點檢するは好き事也。

○首座侍立次師云、還有過也無。

(辨) 首座が臨濟に侍立する時に、今我は老宿と問答する事如此、果して優劣ありや否やと、臨濟は首座に問た、實は自分と老宿との優劣を問ふにあらずして、此く云て首座を鑑照する也。

○首座云有。

(辨) 臨濟にも老宿にも、何の過なきを知りて、有りと答へたは賊機ぞ、臨濟の探竿を能く知て首座が又た賊機で有と云也。

○師云、賓家有過主家有過。

(辨) 首座が有と答へたるに由り、臨濟は直下に問た、夫れは主家の過か、賓家の過かと。

○首座云、二俱有過。

(辨) 元來賓主共に過なきを有りと云た上は、兩家共に有過と云たは恰好也。

○師云、過在什麼處。

(辨) 臨濟云く、然らば過は什麼の處にかあると、急に抄した。

○首座便出去。

(辨) 首座が無言にて出去たは、元來云ふべき過なき故に甚妙也、此首座の働き歩々清風ぞ、無言出去の故に、有過か無過かを知るに由なし、出去つた後で、人に不審さするは衲僧の機用也。

○師云、莫道無事好。

(辨) 首座は何事もなく出去たを、臨濟深く感じて如是云也、此境界を知らぬ者より見たらんに、首座は虚心無事と思ふならんが、決して虚心無事にはあらず、中々の句中を藏する也、始めに臨濟と老宿との問答に於て、老宿が臨濟を賊々と云たより、遙かに優る也、其仔細は、老宿は臨濟の看破に遇ひて、最早堪へ難く、遂に句中を白露したが、首座は徹頭徹尾句中を露はす事なく無言にして出てりたるは妙所也。

○後、有僧舉似南泉、南泉云、官馬相踏。

(辨) 前の問答の頭末を、或る僧が南泉に舉似して其批評を乞た、南泉は官馬相踏むと答へた、官馬とは御厩に蓄はるゝ名馬にして、尋常の者にあらず、今の臨濟と老宿、次に首座との問答は、駿足なる名馬の踏合の如く、優劣なしと云也、南泉は此法戰の機を、痛く褒せられた、扱如何なる微妙なる法戰も、南泉の如き聽手なければ何の詮もなし、例之は伯牙が何程高山流水の秘曲を奏するも、鐘子期と云聽手なければ、其妙、露はるゝ事なきが如く、南泉ありてこそ、眞價が決定されたる也。

○師因入軍營赴齋門首見員僚師指露柱問是凡是聖

(辨) 臨濟が或日軍營に到り齋に赴く時、營門外にて官人に逢へり、好機會なれば直ちに營門の柱を指して、凡か聖かと問ふた、臨濟の思惑は、露柱とは四脚の門の四本の柱を云、此柱は何れの方へも傾斜せず、獨り屹然として立つ所は這箇に似たる故に、茲に將ち來て官人に示せり、爾此露柱を見て只是れ柱也と道は、此柱は是れ凡也、若し又た能く這箇に似たりと見ば即ち聖也、爾何とか見るやと問た、半分は這箇を示せし也。

○員僚無語

(辨) 員僚には臨濟の問意全く不可解也。

○師打露柱云直饒道得也祇是箇木概便入去

(辨) 臨濟は官人の不明に當て、露柱を打た、便ち官人を打つ也、例之は魚頭を打つに水を打つが如し、祇是箇木概とは、木概は門柱を云也、縦ひ道ひ得る共、思惟分別を以て門柱の上を云なるべし

と云へり、這箇の名を現はさず暗に示す意也。

○師問院主什麼所來

(辨) 臨濟は本文の如く問て釣針を垂れた。

○主云州中糶黃米去來

(辨) 市中に出て知行の米を賣り來れりと、眞直に答へた也。

○師云糶得盡麼

(辨) 此問話は前問より一層深意あり、始めは只直に答へて、未だ其眞否を明かにせず、故に再問て院主の機用を試みし也。

○主云糶得盡

(辨) 又も素直に何氣なく、悉く賣切りましたと云へり、底意には怖るべき機用を含むならん。

○師以杖面前畫一畫云還糶得這箇麼

(辨) 臨濟が種々問試するも、未だ果して眞の魚を釣り得ざるが故に、此度は大に手段を換へて、地上に一畫して、這箇は賣得たるかと問ふた。

○主便喝

(辨) 院主元より機用逞し、始終句中を秘し來るも、今や機を失せず、機に當て一喝せり、左あるべし。

○師便打

(辨) 院主の力量、能く臨濟の句中に當て一喝したるは、殊勝と決して賞棒を與へられた。

○典座至師舉前話典座云院主不會和尚意師云爾作麼生典座便禮拜

(辨) やがて臨濟の前へ典座が來りし時、臨濟が典座へ今の商量の顛末を話した、然るに典座の云ふやう、院主は未だ師の家風を知らぬ爲、機に當て一喝したが、我ならば喝せぬ者をと云故に、臨濟が爾ら作麼生、便ち汝ならば如何が答るかと云はれたれば、典座は禮拜した、喝と禮拜と差ふ様なれども、實は一にして優劣なき也、如上の模様商量上に住々在りて、殊に後の答話が優つた如くに見ゆるもおかし。

○師亦打

(辨) 臨濟は典座の禮拜に對して賞棒を與へた。

○有座主來相看次師問座主講何經論

(辨) 臨濟は座主に向て、何の經論をか講すと問た、言中有響底の問話也、吾人と異り臨濟は曾て教學をも充分研鑽された、經論に掛けても有識家である所から、座主の信奉する所の經論に就て、一問答試んとせられた、今時の吾人は經論等は全然無智で有り乍ら、只管教相を罵るなり、教相は佛の言語也、直指の法門は佛の御心なれば、元より比較にはならぬが、全然無智で只罵るは餘りに無用心也、

臨濟は曾て經論にも精通し、戒法も研究されたが、兎角是れでは眞實の佛法を知ること能はずと悟りて後、黃檗に參して一流の大禪師と成られた、此眼力を以て經論の一字一句、理を以て説き、理を以て駁撃されたり、古語に云ふ、經に依て意を解すれば、三世佛の冤、經の一字を離るれば、却て魔説に同じとあるが、臨濟の如きは冤にあらず魔にあらずる者也。

○主云某甲荒虛粗習百法論

(辨) 座主の答話も極めて卒直だ、粗勿ながら大略百法論(法相宗)を修習致したと云た。

○師云有一人於三乘十二分教明得有一人於三乘十二分教明不得是同是別

(辨) 此所三乘十二分教と云は、皆法相也、此法相に充分精通せる明師と、全然無智なる者と同か別かと問ふた、座主は法相に通し、佛法の至極と信じて居る所へ、全然無知識の人と異なる所ありとは、甚しき侮辱也、是より追々商量が發展する也。

○主云明得即同明不得即別

(辨) 座主云ふ、三乘十二分教を明して得たる者の上から見れば、佛、衆生皆一つに見る故に同也、未だ明得ざる者は、明暗色空各別に見る故に別也、此答話は能く自己一人前に相當した答話也。

○樂普爲侍者在師後立云座主這裡是什麼所在說同

說別

(辨) 樂普が臨濟の侍者と成りて其後へに立て座主と呼び、這裡即ち根本の上に何の同別あらんやと逼つた、理の當然ではあるが、師家たる臨濟に先つて道ふは潜上の至り也。

○師回首問侍者汝又作麼生

(辨) 樂普が出過ぎた所を見て、臨濟が座主を差置いて、汝なれば如何と急に問ふ。

○侍者便喝

(辨) 流石は臨濟門下、侍者の喝は好喝じゃ。

○師送座主回來遂問侍者適來是汝喝老僧

(辨) 先刻は來客中なれば遠慮して詮じ盡さなんだが、今は座主を送り回した後故、前の問語を續ひ一問ふ、先刻便ち適來、汝が一喝したは老僧に當てたるかと、臨濟の拶する也、樂普の力量は臨濟元より知る所なれども、猶ほ其淺深を試みんが爲ぞ。

○侍者云是

(辨) 樂普が幸に臨濟の探竿を知つたらば、是非其今一度喝すべき所を、是と答たは遺憾也。

○師便打

(辨) 惜むべし、樂普に弱點あり、師は其短所を決して打つ也。

○師聞第二代德山垂示云道得也三十棒道不得也三十棒

(辨) 元來佛法は言語同斷、心行所滅の法なれば、道ふも道はぬも不是なり、纔に擬議に涉らば、是でも非でも三十棒を與へんどの意也、畢竟衆流を截斷する也。

○師令樂普去問道得爲什麼也三十棒待伊打汝接住

(辨) 讀で字の如く也、樂普は臨濟の命令の如く、卒直に履行したは恰も傀儡の棚上に働く如き也。

○德山便打

(辨) 樂普は師の教の如く行動した、按の如く德山に打たれた。

○普接住送一送

(辨) 樂普は先づ德山に打たれて直に其棒を把持し止めて、其儘德山を送一送せり、其姿勢の凜然たる所、臨濟に似たるも、自力にあらずして師の教へに随ひたるは木偶也。

○德山便歸方丈

(辨) 德山は樂普が雄姿を張つて來れるに、何の言句もなく、來機に取合はずして歸方丈せしも、機用は言外に溢るゝ也。

○普回學似師師云我從來疑着這漢

(辨) 樂普は徳山の無言歸方丈の顛末を臨濟に舉止したるに、師は云く、我從來徳山の凡庸ならぬを察して居つた、道得不道得の問話も、機用ありげな者なるに由り、侍者を派して試みたるに、果して何の言句もなく、普に一送せられて歸方丈したは、初代の徳山が低頭歸方丈した者と、其機用一也、無言歸方丈の歩々起清風也。

○雖然如是汝還見徳山麼

(辨) 徳山の行動は且く措く、實際汝は徳山の境界が見へたかと、其大休歇の所を看透したるや否やを試みられた。

○普擬議

(辨) 措むべし、樂普は此問に對して擬議した、便ち徳山の境地を知らぬ者也、只だ臨濟の教の如く働きて、徳山をして働かしめしのみ。

○師便打

(辨) 臨濟は直に一棒を下し、普の短所を決せられた。

○王常侍一日訪師同師於僧堂前看乃問這一堂僧還看經

(辨) 王常侍は便ち府知事で、久く臨濟に師事して大活眼を得た人じやが、此所は未だ初機の時也、只問ふ這の一堂の僧は看經しますかと。

○師云不看經

(辨) 師は否々決して經は讀まずと答へられた、僧侶が經を讀まぬ事はないが、衆流截斷したる本分の上からは、看經、不看經の沙汰は無い、依て眞直に不看經と云はれた。

○侍云還學禪麼師云不學禪

(辨) 王常侍は再問した、經を讀まぬなら、然らば是非座禪は勤行しませうと、師は直下に不學禪と云はれた、臨濟會下の大衆が、座禪せぬ筈はないが、是亦衆流截斷の上には、座禪不座禪の沙汰もないから、眞直に不學禪と云はれた。

○侍云經又不看禪又不學畢竟作箇什麼

(辨) 王常侍は師の答話を不審に思ひ、斯くは道ひたる也、此時の常侍として自己相當の不審也。

○師云總教伊成佛作祖去

(辨) 臨濟は云、看經も學道も要はない、要は一切馳求の心さへ息めば便ち無事也、無事にして遇茶喫茶逢飯喫飯して今日を送らば即ち是れ佛也、即ち是れ祖也、云々との意也、常侍が初機の時なれば、如是眞直に垂示せられた。

○侍云金屑雖貴落眼成翳又作麼生

(辨) 流石英靈の常侍だ、師の垂示に由て乍ち悟りたり、今師の爲人の如くならば、古人の云た金屑雖貴落眼爲翳とは此意である乎と、看經座禪をのみ肝要と信じた所を放棄した。

○師云將爲備是箇俗漢

(辨) 臨濟云ふ、備は尋常の俗漢と思ふて居たが、今稱の一言に依て悟つたは殊勝ぞ。

○師問杏山如何是露地白牛

(辨) 露地とは裸白露淨にして少しも藏す所なきの意、白牛とは本分を指す也、師は杏山に向て汝の本分底如何と問た。

○山云咩々

(辨) 杏山は直下に咩々と答へた、便ち牛の啼聲也、臨濟が本分を問た故に、直下に這箇を放出して見せた、一面には夙に臨濟の句中を看破して、我は其手の釣針には掛らぬと云底意にて、師を鼻先で扱ふた、咩々の一聲、權あり、實あり。

○師云啞那

(辨) 臨濟は又たも杏山を釣んとして、汝は答話を爲す事もなく、只咩々と云つたは、果して擬議したるかと道ふた。

○山云長老作麼生

(辨) 杏山は始めの勢に似ず、早や百計盡きたるか、臨濟に啞那と抑下されて、何とか痛快な機用を

現はす事能はざるか、臨濟に向て長老ならば如何答ふると問た、又た一面に我を抑下するの甚き長老の心意作麼生と問た事にもなるが、兩ながら窮策たるを免れぬ。

○師云這畜生

(辨) 曩に一度啞那と抑下されても、一向機用を現する能はず、此度は頭ごなしに、其様な者は畜生じやと重々の抑下をされた。

○師問樂普從上來一人行棒一人行喝阿那箇親

(辨) 從上來二人の僧、臨濟と商量したが、一僧には棒を與へ、他の一僧には喝を行したが、何れが親きかと云て、師は樂普を試た、臨濟の此問話元より句中あり、棒喝の親不親を問ふにあらず、只鉤頭の餌也。

○普云總不親

(辨) 樂普は流石に師の句中を勘破して、總不親と答たは、恰も臨濟の機に當る所也。

○師云親所作麼生

(辨) 樂普が今正に總不親と答たる上に、又も親所如何を問はるゝは扱も重々の探竿也。

○普便喝

(辨) 臨濟が重々人を試る故に、最早堪へ切れずして、一喝した、痛快なる一喝也。

○師乃打

(辨) 樂普の喝した所を打て決した、賞棒也。

○師見僧來展開兩手

(辨) 臨濟或る時、僧の來るを見て兩手を展開した、便ち我胸中を能く看よ、全然無一物也、吾れ爾に隠す所なきぞとの意也。

○僧無語

(辨) 臨濟が胸中無一物の所を打出して示さるゝも、僧は脱落ちせぬか、無語せり、全く如盲、如啞也。

○師云會麼

(辨) 臨濟が兩手を展開して、胸中無事なる事を示せ共、是を會する能はざるかと老婆を垂れた。

○云不會

(辨) 何としても盲啞たるを免れぬ、死蛇再び活せずじや。

○師云渾崙拳不開與汝兩文錢

(辨) 汝は何と手を垂れても眼の明かぬ奴じや、如何程名醫が手を盡すとも、汝程の病人は癒す事は出來ぬ、恰も鐵渾崙の拳、開かぬ如しじや、我も最早手が盡たる故、草鞋錢を與ふるに由り、何れへなりと遍參せよと也。

○大覺到參師舉起拂子

(辨) 臨濟は大覺に對して一言も云はず、只拂子を舉起せり、拂子舉起は這箇を現はす也、這箇の生機活法を現はし、是を以て大覺を釣り試る也、全體作用、臨濟の全身只是れ一箇の這箇也、拂子を舉起する者は臨濟にあらず、只是這箇也と云所を、大覺に會か不會かと試みた、容易ならぬ句中なれども、舉起拂子は這箇を現はしたる也。

○大覺敷座具

(辨) 大覺は臨濟が全體作用さるゝを早く見て、大覺も亦一言云はずして坐具を敷きて、這箇の生機活法を現はした、師學互に調子好く相響きて一味同人なり。

○師擲下拂子

(辨) 大覺の振舞は師學同一味に相應じたれども、或は紛れ當りする者もある事故、今一度試した、便ち師は拂子を抛下された、是亦這箇の生機活法也、所謂殺人須見血の所にして、飽迄大覺の眞力量を決せんとする也。

○大覺收坐具入僧堂

(辨) 師が重々の大綱を素直に潜り抜け、穩かに全體作用して問答次第する所、龍吟雲起虎嘯けば風生の端的、見事なる光景也。

○衆僧云這僧莫是和尙親故不禮拜又不喫棒

(辨) 衆僧は大覺の禮拜もせぬ、師が咎められぬは、親戚故舊にてもあるかと不審して斯く問ふ也、

師學互に全體作用して、しんみりと商量したる、其境界を知らぬ、所謂燕雀焉、知鴻鵠志、である。

○師聞令喚覺、覺出師云大衆道汝未參長老

(辨) 大覺が徹底至極して、全體作用するを諸人は知らず故に、其疑を解んが爲に大覺を喚で、最前我は拂子を竖起せしのみにて、別に言句もなく、汝は坐具を敷たのみにて、別に言句なきを見て、大衆は汝未だ我に參せざる者と云ひ居るぞとて、一面には大覺の悟所の程をも決し、一面には大衆の疑をも解く也。

○覺云不審便自歸衆

(辨) 大覺の悟所が一枚に成り切りて、鐵團の如くなる故に、直下に不審と云はれた、臨濟の會下に在る程の者が、是れ式の分らぬは不審じやと云也。

○趙州行脚時參師遇師洗脚次州便問如何是祖師西來意

(辨) 臨濟の洗脚さるゝ時、趙州が如何是祖師西來意と問はれて、充分句裡に機を呈して來る也。

○師云恰值老僧洗脚

(辨) 臨濟は趙州に對して、恰も好し老僧が足を洗ふ所へござつたたと云はれた、臨濟無論充分の機を含んで居れども、未だ十分には現はさず、先づ一通りに答へられた、左れど此答話たる、權實兼備りて殊勝也、譬へば趙州の如く老大ならぬ後學の輩出來りて、祖師西來意を問ふ共、如是答を機に應

じて實を示すべし、又た趙州の如く毒氣を含んで來る者には、其場合に由り、惡水を一杓潑き掛けの勢ある所は是れ權なり、第一の惡水とは臨濟が恰值老僧洗脚と云た所也、汝如き横着者こそ、今洗脚の處でなくば、打て打て趁ひ出してやらんに、今は洗脚中であるから、それも成らぬと云意子合を云也、權實兼備へて、未だ充分に機を現はさぬ所也。

○州近前作聽勢

(辨) 趙州が聽勢を爲した所は、凄まじく恐ろし、身の毛も彌立つ也、臨濟が何を云はるゝやら、恐らくは西來意を示さるゝならん、接近して確かに聽かんと云様子をした。

○師云更要第一杓惡水潑在

(辨) 臨濟の尋常ならば、爰は擒住して一掌を與ふる乎、踏倒するか、何れにしても容易ならぬ所なれども、洗脚中故自由が利かぬ爲に、只言句に涉りたるのみ、其方が斯く人を侮つた事をせば、第二杓の惡水を頭から潑かんと云心也、臨濟の機用が現はれたるも、未だ別に手を下さぬ所、恰も寶劍を坂き未だ人を切らずば、只其劍光寒まじきが如し、第二杓とは第二回の答なるに由る。

○州便下去

(辨) 趙州何氣なく歸り去ると雖ども、臨濟を彼此十分に看透して、機用を逞して歸られた、其機用とは無言にして歸る所也、其歩に清風を起して去られた所じや。(此の則種々異論あり逐一掲載すべき者なれども病褥中の所作特に脱稿に急げるを以て略す、然れども參禪の利益を妨害するにあらざれば、

讀者幸に諒せよ

○有定上座到參問如何是佛法大意

(辨) なし。

○師下繩床擒住與一掌便托開

(辨) 師は直に繩床を下りて、定上座の胸倉を捕りて一掌を與へ、且つ其儘突き飛ばせり、猛烈なる行動なれども、即今思惟情量を擊碎せんとしたる也、所謂驪龍領下の珠を擊碎せし也、定上座は只管佛法の大意に凝りたる所を、俄然一掌を與へられ、驚て胸中の所思悉く打失して茫然と成れり。

○定佇立

(辨) 定上座は臨濟の一掌に遇ひて、乍ち所思を忘れ、佇立して無言にて、只眼をじろりじろりと働かすのみ。

○傍僧云定上座何不禮拜

(辨) 定上座が今や茫然とし、爲す所なき所へ、傍僧が急に何、不禮拜と叫んだ、定上座の茫然たる時こそ、大悟の好時節なれば、傍人眼ありて聲を掛けたる也、便ち電光石火中に手を垂る、也。

○定方禮拜忽然大悟

(辨) 定上座果然大悟せり、此所定上座の大悟せし模様と、前に説ける隨流認得性の章に於て大悟の顛末とを照合せば、一段の風光ならん、此所に於て定上座が臨濟に掌せられて茫然自失せし模様は、坐禪中雜感思惟全く消失して、恰も木偶と成りしに均し、此時佛性の本體廓然現はれ居る也、左れど既に無心なる故に、此れと氣附く者なし、此時傍僧が急に叱咤せし爲、定上座が急に我に返り禮拜の念始て生せしは便ち一念也、此一念に由りて佛性の本體を見る也。

○麻谷到參敷坐具問十二面觀音阿那面正

(辨) 十二面觀音が此堂の本尊なりしか、即ち是を境に借りて問た、此菩薩の何れの面が正であるかと也、麻谷は觀音に要なし、充分句中を含んで來り問也、座具を敷きたるは、答話の次第に由り、禮拜をなすべく、又は凄まじき機をも現はさんとせし也。

○師下繩床一手收坐具一手擲麻谷云十二面觀音向什麼處去也

(辨) 臨濟は繩床を下り、一手は麻谷の坐具を收たは、禮拜を受まじとの意、又た一手は麻谷を捉へて、其方は觀音の正面を問ふが、夫れは木佛畫像の上也、即今端的底の觀音、什麼の所にか在ると反問する也、茲に臨濟が兩手を使ひ分けて、一手は麻谷の禮拜を辭退し、一手は麻谷を捉へて、威丈高に觀音の端的を擲する所は、實に天才の作家と云べし、禮拜を辭せしは麻谷も老尊宿故禮義を重んせし也。

○麻谷轉身擬坐繩床

(辨) 麻谷も慣戰の作家なれば、臨濟が觀音の去所を問はる、故に、師位に據て答んとて繩床に坐せ

んと擬した。

○師拈柱杖打

(辨) 麻谷が師位に上らんとする所、間不容髮柱杖を拈して打た、麻谷の機に當りて觀面の行動也。

○麻谷接却相捉入方丈

(辨) 打つも打たるゝも、人を驗する爲のみ、打つも打たるゝも互に知音同志の上也、接却相捉入方丈とは、臨濟が打たんとする棒を、麻谷が却へて互に手を放さず、其儘方丈に歸る也、此麻谷は第二代の麻谷なる由、卷首に述べたる第一世の麻谷即ち寶徹禪師の大悲千手眼那箇か是れ正眼の問答に髣髴たり。

○師問僧有時一喝如金剛王寶劍

(辨) 祖師門下、喝の一字を用る事久し、就中馬祖の一喝、百丈をして三日耳聾せしめたる以來、大機大用を振ひ、學者の眼を開く事専ら此一字にあり、臨濟に至り始めて四喝を建立せり、諸人其風を學びて、東西南北猥りに喝聲を聞くに至れり、然れども只是れ學語にして、深く其意を知る者少し、喝の一字は即ち金剛正體也、元より是非の外に立ち、佛も魔外も其機を測る事なし、喝の一聲は只是れ本有の佛性、直ちに突出する者也、佛性の上には一塵一法を不立、能く一切を碎摧して、一切の爲に碎摧せらるゝ事なし、即ち金剛正體也、有時一喝如金剛王寶劍とは、臨濟一喝を吐く其勢には何も溜らぬ也、是れ本有の佛性の直に突出して、一切悉く截斷する事、金剛王寶劍の如し。

○有時一喝如踞地金毛獅子

(辨) 臨濟の法戰場中に於て、奮迅自在を得てはたと喝したる勢は、獅子一吼する時、百獸の頭腦裂破する如く也、踞地とは獅子が強ク當らん爲に、背を屈して地に伏するを云也。

○有時一喝如探竿影草

(辨) 探竿影草とは、釣魚の人が竿頭に草を附けて、水上にて動かせば、其影を見て魚が驚き、是に依て魚の有無を知る也、臨濟のはたと喝して、僧の好惡是非を試る事、探竿影草に似たる賊機也。

○有時一喝不作一喝用

(辨) 前述の三喝は各々其用あり、寶劍の喝は截斷也、踞地獅子の喝は機關也、影草の喝は賊機也、如是各一用ありて其境界定る、又た有時の喝は前の如く境界定りたる一用あるにあらず、故に不作一喝用と云也、扱不作一喝用者を辨せんに、臨濟の大機大用を得て、大自在を働く上に於て喝する故に、意子も境界も知られぬ也、是れ濟下宗風の妙所にして、倒に少林の無孔笛を把つて順逆に風を吹回はず自由三昧を得て、其順逆東西は魔外も測り難き也。

○汝作麼生會僧擬議

(辨) 臨濟は僧に斯く問たが、果して擬議したは當然なり、何人も嘴を下し難き所ぞ。

○師便喝

(辨) 僧の擬議した所を喝して、短所を決した。

○師問一尼善來惡來

(辨) 臨濟は尼に向て、善く来たか悪く来たかと問たは、鉤頭有餌じや。

○尼即喝

(辨) 能く來機に當りて觀面に喝した。

○師拈棒云更道更道

(辨) 尼が能く喝したるを聞きて、再び試て好所を決せんとした、若し云ひ損ふたら打つべしと思て、棒を構へて居る也。

○尼又喝

(辨) 尼の力量全くして首尾一貫せり。

○師便打

(辨) 打て決した、賞棒也。

○龍牙問如何是祖師西來意

(辨) 龍牙が師に向て西來意を問た。

○師云與我過禪板來

(辨) 龍牙に西來意を問はれて、臨濟は我に禪板を持ち來れと云た、禪板に用はないが、是こそ佛性

よと道はぬ斗りに一聲拋出したる也。

○牙便過禪板與師

(辨) 臨濟は禪板々々と一聲を拋出して、牙をして自悟せしめんとすれども、其一聲の佛性なることに氣附かず、語に隨て轉ずる也。

○師接得便打

(辨) 臨濟は龍牙の不合點を措みて、慈悲の痛棒を與へた、此痛は是れ什麼物ぞと云はぬばかりじや、一面には罰棒の意もあらん。

○牙云打即任打要且無祖師意

(辨) 龍牙は尙ほ領會せずして、打つ事は御隨意じやが、肝要なる祖師西來意を何故に示されぬぞと云た。

○後到翠微問如何是祖師西來意

(辨) 龍牙は更に翠微に到りて、同前の問話を試た。

○微云與我過蒲團來

(辨) 翠微も亦た臨濟と全く同一に答へた。

○牙便過蒲團與翠微

(辨) 依然として取止めがつかぬ。

○微接得便打

(辨) 臨濟と同一打た。

○牙云打即任打要且無祖師意

(辨) 臨濟に答ると同模様也、二所共に効なくして止んだ。

○牙住院後有僧入室請益云和尚行脚時參二尊宿因緣還肯他也無

(辨) 後ち僧ありて牙に參じて如斯問た。

○牙云肯即深肯要無祖師意

(辨) 龍牙が臨濟、翠微に參じた時は、未だ初機なる故に、更に合點せざりしも、後に眼を得て二尊宿の爲人底を知悉して深く肯ふ也、左れど今此僧には、二老宿に參せし當時の、無眼子の有様を秘し、假りに撥を合せて云ふには、肯ふ事は肯うたが只だ祖師意なしと云た、此則碧巖の同則と比較照合すれば、一層趣味深からん、碧巖は雪竇の複頰あり、龍牙の振舞は既に大休歇底の境界也と看るべし、此所は一應龍牙を未在の境地に在る者と看て可也。

○徑山有五百衆少人參請黃檗令師到徑山乃謂師曰汝到彼作麼生師云某甲到彼自有方便師到徑山裝腰

上法堂見徑山

(辨) 徑山會下に五百の大衆あれども、參する者少しと云ふ事を、黃檗聞て、徑山の餘り辛辣なる爲に、近傍する者稀なるかと思ひ、臨濟を遣はして實否を試た、臨濟の發足する時、黃檗は彼に至つて何と働くかを氣遣ひて、其考按を問しに、一切我に任せられよと云ひ棄て出發した、徑山に到り、腰包みをも解かず、直に法堂に上て徑山と相見した、本來威儀を具して相見すべき所に、麤造なる體裁を爲すは我儘なる働き也。

○徑山方舉頭師便喝

(辨) 徑山の纒に頭を舉て臨濟を見んとする時、便ち喝する也、未だ一言發する邊もなく喝するは晴天の霹靂なり。

○徑山擬開口

(辨) 臨濟の猛烈なる喝聲に、口を開んとしたが、終に如何とも爲し難し。

○師拂袖便行

(辨) 臨濟は徑山に一句も吐かせず、摧碎して歸る也、辛辣なる評判の徑山も其實なき也。

○尋有僧問徑山這僧適來有什麼言句便喝和尚

(辨) 此僧も亦徑山會下の弱卒なるか、言句なくして喝する事はなき者と思ふて徑山に問ふた。

○徑山云這僧從黃檗會裡來爾要知且問取他

(辨) 徑山は曾下の僧に問はれて答ふべき手掛りもなく、茫然たりしが、流石は常に多数の大衆を擁する老大の株故、知つた風を装ふて問取佗と云た、沙汰の限り也。

○徑山五百衆太半分散

(辨) 徑山の腑甲妻なき故に、大衆は分散した、理の當然也。

○普化一日於街市中就人乞直褌人皆與之普化俱不要師令院主買棺一具普化歸來師云我與汝做得箇直褌了也普化便自擔去繞街市叫云臨濟與我做直褌了也我往東門遷化去市人競隨看之普化云我今日未來日往南門遷化去如是三日人皆不信至第四日無人隨看獨出城外自入棺內債路行人釘之即時傳布市人競往開棺乃見全身脫去祇聞空中鈴響隱々而去

(辨) 此段は我等の深く辨を着くべきにあらず、只讀て字の如く、不思議なる事共と懐ふのみ、只だ普化と臨濟の間柄は尋常にあらず、實に知音同志にして、互に默識神通する事は、推測に難からず、殊に普化が大力量を有する越格の境界に在り乍ら、自己を放棄し、終始臨濟を陰に陽に托上して、只管臨濟の大成を援護されたり、普化の希望は成熟し、臨濟が世の蔭涼樹と成るを見て、忽然として隱

る、所、高潔とや云はん、至情とや云はん、言語同斷也、我は勝手なる模索を數々試みて、解釋は自由なれども、猥りに辨するを憚り茲に贅せず、只だ普化臨濟兩大師の明德の傷かざる様會釋するを希ふ也。

行錄 行狀、行實、又た實錄の義

○師初在黃檗會下行業純一首座乃歎曰雖是後生與衆有異遂問上座在此多少時師云三年首座云曾參問也無師云不曾參問不知問箇什麼

(辨) 大哲臨濟も始めは黃檗會下の難僧であつた、行業純一とは、萬事の動作正直如法にして、決して背く事なし、後世大器と作る者は、小賢しく無いが自然と與衆有異、便ち異彩を具へられて衆僧の注目を惹ひた、遂に首座たる睦州が臨濟に問ふた、御身が此會下に來てから何年になつたかと、師は何氣なく最早三年に成ると答へた、左れば曾て參禪したかと又た問た、否々未だ參禪せしことなし、且つ什麼と問ふて然るべきやを知りませぬと答へた、此問答の體裁は如何、愚直の一方也、此愚直こそ後世大を成すの初一步也。

○首座云汝何不去問堂頭和尚如何是佛法的々大意師便去問聲未絕黃檗便打

(辨) 首座たる睦州和尚も豪い者じや、黄檗に參せしめずして、先づ自ら着手しても、相當の成績もあらんが、流石有眼の首座は、臨濟は只の鼠でない、斷然堂頭和尚に參せしめて、相違なく大器を作らねば遺憾じやと云にあらん、趣味可掬所也、且つ黄檗に參して如何は佛法的々大意と問へど示した、臨濟も亦其指示の如く入室して、佛法的々大意を問ふた、然るに何ぞ圖ん黄檗は何一言の説示もなく臨濟を打た、何の方便もなく、過なき臨濟を打たは何故ぞ、黄檗は臨濟に過ありて打つにはあらず、只是れ方便也、打たれて痛を感じる時、其痛は是れ什麼と自得させんが爲也、馬祖が百丈の鼻頭を捏りしも、俱眠が童子の一指を截りたるも、皆同一模様也。

○師下來首座云問話作麼生師云某甲問聲未絶和尚便打某甲不會首座云但更去問師又去問黄檗又打如是三度發問三度被打師來白首座云幸蒙慈悲令某甲問訊和尚三度發問三度被打自恨障緣不領深旨今日且辭去

(辨) 師は不會にて室を出で、首座に顛末を語りたるに、首座は師を勸めて更に二度入室同問を發せしむ、遺憾乍ら三度の痛棒何の効果もなく不會に了れり、臨濟の實頭なる、其遺憾骨髓に徹し、痛く嘆たれて首座に云やう、某甲首座の慈悲に由て、堂頭和尚に參するを得たれども、障緣不領深旨、便ち某甲愚鈍にして深旨を會得する能はず、遺憾乍ら一時他に去りて、一修行試みたければ暫く暇を

乞ふと涙からに云ひ出た。

○首座云汝若去時須辭和尚去師禮拜退首座先到和尚處云問話底後生甚是如法若來辭時方便接他向後穿鑿成一株大樹與天下人作蔭涼去在

(辨) 首座は臨濟に云ふやう、汝此會下を辭せんとならば、先づ須く堂頭和尚に到り辭すべしとて逸早く首座が堂頭和尚に至り、先刻問話の後生(臨濟を指す)は甚だ得難き實頭漢にて、後世の大器と存するが、未だ和尚の鉗錘に合期せず、辭し去る事を申出でたり、和尚に申出たらんには須く方便し玉へと懇請した、世に有る難き敦厚なる道情ならずや、畢竟臨濟をして天下の蔭涼樹と爲した動機は首座に在りと云て可也

○師去辭黄檗云不得往別處去汝向高安灘頭大愚處去必爲備說

(辨) 黄檗は臨濟に向て、備の辭するは止むを得ぬ事ながら、必ず別處に往く事は成らぬ、高安灘頭の大愚和尚の下に到れ、彼れ必ず備が爲に請益せんと篤と諭した、師たる黄檗も微困なり、臨濟も實頭漢なれば命の如く大愚へ行つた、扱此所不審なるは黄檗にして、大愚の方便こそ臨濟を悟入せしむる事を知らば、自ら行ふべきに何故に大愚へ遣つたかと云一事也、然し時節因縁は免る可らず、縦ひ黄檗の鉗錘其宜しきを得るも、臨濟が未だ其期に至らねば悟入は契はぬ、黄檗は臨濟の機が今少し熟

せぬ事を看破せられて、此上は大愚の家風ならば、必ず臨濟の機と相契ふ者と信じて、大愚へ遣られた。

○師到大愚大愚問、什麼處來、師云黃檗處來、大愚云、黃檗有何言句、師云某甲三度問、佛法的々大意、三度被打、不知某甲有過無過。

(辨) 此所は眞に血涙の一場じや、單に佛法的々大意を會する爲に、遠路彼此と遍參して、此子も包藏する所なく、張り切る斗りの胸の裡を悉く自白して、大愚に縋り付き、不知某甲有過無過と云に至ては、臨濟の顔色も窺はるる斗り也、宜なる哉、臨濟の此緊張力は大悟に接近したる時節也。

○大愚云、黃檗與麼老婆爲汝得徹困、更來這裏問、有過無過。

(辨) 大愚も亦此所大切じや、遠距離なる黃檗の眞心を思ひ遣りて、巧に答を合せて云はるるに、黃檗の痛棒三度に及びしは、只管懶ちか爲に兩肩を脱ぎ、自己の困窮をも忘れて爲人されたる也、其れにも氣付かず遙かに此所へ來て、有過無過と問ふかと、充分に黃檗の用所を知らせんとせられたり。

○師於言下大悟云、元來黃檗佛法無多子。

(辨) 時期成熟せりとや云はん、臨濟は大愚の言下に頓悟して、元來黃檗の佛法は何の造作もない者

じやと叫んだ、無多子とは多き事なしの意也、古來の學者にして、如是伶俐にして一言の下に見性の眼を得、且つ向上の機を得たる者は、六祖の外になしと聞く所也。

○大愚擲住云、這尿牀、鬼子適來道、有過無過、如今却道、黃檗佛法無多子、爾見箇什麼道理、速道、速道。

(辨) 大愚は忽ち臨濟を擲へて這の尿牀の鬼子、便ち小便垂れ小僧奴が、只今まで有過無過など問ひて、泣顔かいて居り乍ら、掌を翻へさぬ間に、黃檗佛法無多子と暗くは潜上ぞ、什麼の道理をか見て云ぞ、速に道へ速に道へと烈く突込む也、是れ他なし、臨濟の頓悟の餘りに見事なる故に、過ちありては成らぬと、篤と見届けられたる也。

○師於大愚脅下築三三拳。

(辨) 臨濟は直下に大愚の脇下に拳を以て三度築いた、如此一言に徹頭徹尾する事は古今稀也、若し是れ尋常の漢ならば、先つ言句を以て答ふべき所を三拳せしは、臨濟自身も不覺截斷の機用を現はせしは越格也。

○大愚托開云、爾師黃檗非于我事。

(辨) 大愚は確かと臨濟を見届けた、其言句に涉らず直に築拳したは、眞實徹底したる者と知て云はるゝやう、汝が即今如是悟徹するは、全く非于我事、使ち我が力ではない、我れは只だ黃檗の老婆心にして、汝が爲に徹困した事を云た迄也、汝をして悟徹せしむる者は黃檗也と眞直に道はれた。

○師辭大愚却回黃檗

(辨) 臨濟は大愚の指示に隨ひて、素直に黃檗に歸つた、大愚へ行くとときには佛法的々の大意なる重擔を負ふて居つたが、今は早や大愚に白狀の後、何の包藏する所もなく、肩の重荷は卸りて身は輕々と歸つた。

○黃檗見來便問這漢來來去去有什麼了期

(辨) 黃檗は臨濟の歸り來るを見て直下に問た、這の漢往たり來たりして居つては有什麼了期、便ち何時了畢するぞと呵した、臨濟程の者でも斯く速かに悟徹せんと思はざりし也。

○師云祇爲老婆心切便人事了侍立

(辨) 臨濟此時穩かに禮義を整へて答へられたやう、大愚和尚の慈命に従ひて速かに歸れりと、如何にも從容として云はれた、臨濟は既に大悟して、受用穩當なる上から、相貌居動共に平穩也。

○黃檗問什麼所去來

(辨) 黃檗の老婆親切なる、尙ほ臨濟を危ふみたり、果して大愚へ行かば、斯やうに早くは歸れまじ、什麼の所か他所へ參じた者と推して問はれし也。

○師云昨奉慈旨令參大愚去來

(辨) 昨日和尚の慈旨を受けて、大愚へ參せりと誓直に答へた。

○黃檗云大愚有何言句

(辨) 是非共斯く問ふべき所也。

○師遂舉前話

(辨) 臨濟は黃檗の間に對して、眞直に大愚と商量の顛末を告げた。

○黃檗云作麼生得這漢來待痛與一頓

(辨) 黃檗は大愚が臨濟に向て、黃檗與麼老婆爲汝微困と云れたと聞き、心中には大愚なればこそ我が用所を知り能くも導きたりと喜べども、強て藏くして大愚の饒舌、要らぬ言を云こそ惜むべし、後日彼れ來らば痛く痛棒を與へんと云て、底意には臨濟の機用を試る爲の深遠の謀也。

○師云說什麼待來即今喫隨後便掌

(辨) 一頓に悟徹せる臨濟の機の見事なる事よ、黃檗の釣語も何のその、某甲ならば彼れの來るを待つやうな迂遠は學ばぬ、即今喫せよと云て問不容髮、黃檗に一掌を與へた。

○黃檗云這風顛漢却來這裡埒虎鬚

(辨) 黃檗は臨濟の機用の逞しきを、衷心には無上に喜び乍ら、表面には抑下して云やう、這の狂漢奴、我を掌するとは恰も虎鬚を埒づる如き、命知らずの業也と呵した。

○師便喝

(辨) 臨濟の威風凜々、黃檗も近傍し難き此一喝ぞ。

○黃檗云侍者引這風顛漢參堂去

(辨) 黄檗は百万方臨濟を試みて、其機用の首尾逞しきを見届けて、終に參堂を許された。

○後瀉山舉此話問仰山臨濟當時得大愚力得黄檗力

(辨) 後日に至り瀉山が、此話の顛末を仰山に舉似して云、臨濟は實に大愚の下で大悟せられたれども、大愚は偏師黄檗非干我事と道はれたも、最至極した事なれば、全く大愚の力とも、黄檗の力とも云ひ難し、此所を以て瀉山が仰山を試る也。

○仰山云非但騎虎頭亦解把虎尾

(辨) 仰山の今茲に云所は、臨濟の大悟は大愚の力をも黄檗の力をも假らぬと云也、臨濟の二師に逢ふて働く所、例之は大力勇猛の士の虎に騎て、一手は頭を押付け、一手は尾を確かと捉へて、少しも虎に働かせぬ如く也、騎虎頭とは始め大愚に三拳を築くを云た、把虎尾とは後に黄檗に一掌を與たるを云也、弟子の身にて打つことは不當なれども、臨濟の三拳一掌は師師とせぬ働き也、大愚黄檗は縦ひ臨濟の大悟の縁と成られたでこそあれ、實に兩師の恩力を借て、大悟せしにはあらずと云へり、仰山能く目利して云也、釋迦は三界の大導師なれば、古今遠近一人も釋迦を師とせざる者なし、然れども人々又た無師の大智有て、恣に毘盧頂に横行する也、毘盧頂とは佛法至極の所也、生れ乍ら毘盧頂に横行せば、何の要あつて釋迦の指南を受くべきぞ、臨濟も無師の大智を以て、毘盧頂に横行すれば、大愚黄檗の恩力をば不借也。

○師栽松次黄檗問深山裡栽許多作什麼

(辨) 黄檗は臨濟に、深山に其様に松を栽て、何の要をか爲すと問た、是亦た釣語也。

○師云一與山門作境致一與後人作標榜道了將鏝頭打地三下

(辨) 臨濟の松を栽る仔細は、一は寺の境致の爲、又一は松の節操に習ひて、此寺の人々節義正しかれとの意也と明かに答へた、扱打地三下とは如何と云に、是は分らぬ、臨濟先づ半身を現じて、半身は藏して居る、其藏るゝ所意旨深し、容易に測る可らず、例之、昔日一の文士(名を忘れたり)あり、夜間窓前に朱を以て書籍に句點してありしに、妖怪來りて此文士を試んと、窓間より偉大なる手掌を其前に出せり、若し此文士にして怯懦なりせば、忽ち非常の厄に逢はんに、天性の膽力家故些子も動着せず、無心にて妖怪の掌に朱筆を以て花の字を書た、然るに妖怪は忽ち悲鳴を上げて煩問し、頻りに許しを乞ふに依りて、文士は紙片を以て文字を拭ひ去りたるに、妖魔は忽然として消失せりと云ふ話あり、不思議なるは花の一字也、何の仔細あるか、妖魔も窺ひ知る能はず、文士を弄せんとして却て辛き目に合へり、文士は何の仔細もなく偶然に只だ花の字を書きしのみ、黄檗程の惡辣な師家が、句中を以て試みたれども、臨濟は心得て祇だ地を打れたのでは、大小大の黄檗も便を得ざる也。

○黄檗云雖然如是子已喫吾三十棒了也

(辨) 黄檗は格外に龍蛇を辨せんとした、尋常人を試るには、句中に機を藏くして試むべきに黄檗は裸白に惡口するは格別也、爾が何か利口げに語り、仔細あり氣なる顔して、地を打つなれども、是皆

な備の自力にあらず、曾て吾が三十棒を喫せし故也と云へり、如是惡口にして臨濟の働きを試みた。

○師又將鑊頭打地三下作噓々聲

(辨) 黄檗が臨濟の面前に惡口して試るも、些子も動する事なく、更に鑊頭を以て打地三下した、是れ取りも直さず黄檗を打た者也、其上に噓々の聲を爲すは空噓く也、黄檗の如何なる惡口も物の數ともせず、噓き笑つて身に受ぬ、師學共に恰好の働きぞ。

○黄檗云吾宗到汝大興於世

(辨) 黄檗は臨濟の全然完備せし所を能く見届けて、吾宗云々と云はれたは當然也、然れども親き師弟の間柄故、不知々々家醜を揚けた也。

○後瀉山舉此話問仰山黄檗當時祇囑臨濟一人更有
人在仰山云有祇是年代深遠不欲舉似和尚瀉山云雖
然如是吾亦要知汝但舉看仰山云一人指南吳越令行
遇大風即止

(辨) 仰山の此識記或は風穴を識すと云ひ、或は大惠を識すと云、風穴を主張する者は風の字を證とし、大惠を主張する者は吳越令行の四字を引證し、又は指南の南字を認て南院也と云等也、何れにもせよ、碩徳の所業として識を以て將來を卜する事陋劣也、仰山の得意に識した者と見ゆるが、我等は

寧ろ敬遠したし、是等の事は註疏に詳記せらる。

○師侍立德山次山云今日困

(辨) 徳山は如何にも疲勞したる體にて、嗟呼今日は疲びれたと云たは無心にあらず、陷虎の機あり。

○師云這老漢寢語作什麼

(辨) 臨濟の大機、一層二層崇に掛つて、這老漢何を寐言を言はるゝぞと云た、徳山が何か機を出さば、一口に吞却せんと也、恰も金翅鳥の空に搏て、海底の龍に向ふ如し。

○山便打

(辨) 按の如く徳山急に起ち上がりて強か打た、始めの沈黙は是を爲さんが爲也。

○師掀倒繩牀

(辨) 徳山が臨濟を打たも凄じい機用なれど、臨濟としては、又た一層の働きじや、果然徳山の椅子を衝き倒せり。

○山便休

(辨) 言はぬは言ふに優る事多し、大小の徳山も、此所に至ては一句も云はず休み去たは風流也。

○師普請鋤地次見黄檗來柱鑊而立

(辨) 臨濟一日普請して地を鋤く時、向ふより黄檗の來るを見て、臨濟は鑊を柱て建つ、是れ偶然にはあらず、黄檗と問答せんとて、的を建て、待つ也。

○黃檗云這漢困耶

(辨) 果して黃檗は這漢疲勞せるかと問た。

○師云鏝也未舉困箇什麼

(辨) 隨分意知惡き答話哉、臨濟は黃檗の來るを見て、態と鏝を休めて措き乍ら、鏝も未だ舉せざるに、何で疲れるかと捏ねた者也。

○黃檗便打

(辨) 黃檗として臨濟の曲心を看破せざらんや、直下に機に當て打つた、當然の事也。

○師接住棒一送送倒

(辨) 臨濟は直下に黃檗の棒を奪ふて、黃檗を突き倒したは、一層重き返禮をした者也。

○黃檗喚維那扶起我

(辨) 黃檗は臨濟に突き倒されて、起る事能はず、爲めに維那を喚びて我を扶起せよと云也、扱此所は複雑な趣味がある、先づ維那を喚びて、是を見よ、此の老倒なる我を酷く倒す奴があるぞと云ふ、是は表面臨濟を賣るに似て、衷心には却て其境界の勝れたるを褒し、一面には維那が何と思ふかと釣り試る也。

○維那近前扶云和尚爭容得這風癩漢無禮

(辨) 維那は只だ一筋だ、黃檗の心中種々の科あるを知らず、只だ臨濟を呵するの一方にて、這の狂

者の無禮を和尚は許容するやと云た。

○黃檗纔起便打維那

(辨) 維那は打たれた、然れども實際は臨濟が打たれたる也、維那は無眼子の御庇で、臨濟の身代りに立つて痛棒を喫した、但し此棒は臨濟を打て決した賞棒也。

○師鏝地云諸方火葬我這裏一時活埋

(辨) 扱も臨濟は便宜なる哉、今鏝を手に持てる故に、直に地を一鏝して、先刻から葛藤する黃檗も維那も同穴へ活埋せんと也、維那を打つ棒が臨濟に當りし故に、臨濟は一重の働きをした。

○後滂山問仰山黃檗打維那意作麼生仰山云正賊走却邏蹤人喫棒

(辨) 後日に至り滂山が仰山に問ふやう、黃檗が維那を打つたは何の故ぞと也、仰山は云、正賊は去りて捉ふる能はず、却て賊を遮らんとする者が傍杖を喰ふ也云々。

○師一日在僧堂前坐見黃檗來便閉却目

(辨) 臨濟は黃檗の來るを見て、態と眼を閉ぢた、油断の成らぬ振舞也、靜かに閉目して無心の如きも事あらば直ちに飛び舉らんとこの陥穽なり。

○黃檗乃作怖勢便歸方丈

(辨) 黄檗の機用の自在なる、臨濟の睡るを見て、怖る、振りして一句も云はず方丈に歸つた。

○師隨至方丈禮謝

(辨) 臨濟は師に従て方丈に至り、黄檗に向ひて只今は僧堂へ御出の處、折柄坐睡中にて失禮を致したと云て禮拜した、行儀こそ正しけれ、衷心怖ろしき機を含む也。

○首座在黄檗所侍立黄檗云此僧雖後生却知有此事

(辨) 黄檗の親切なる首座が臨濟の境界を知らずと思ひて、臨濟は後進若輩なれども、此事の蘊奥に達せる者なりと告げた。

○首座云老和尚脚跟不點地却證據箇後生

(辨) 首座は黄檗の早合點を咎めて曰く、老和尚脚跟未だ地に着かざるに、早く既に箇の後生を證せらるゝは臍落ちせず、縦ひ悟所眞實なるも、脚實地を踏み篤と見届けたる上にて證據すべき也と云た、首座の言は一應當然也、臨濟の稀世の傑物たるを知らぬ上は、斯く道ふも可也。

○黄檗自於口上打一擱

(辨) 此動作亦た機用深し、黄檗は首座が大方臨濟の境地を知るならんと思ひたるに、餘りに平凡なる故に、黄檗は夫れを一寸逸して、然り々々吾れ若輩者を證據して、錯て不要の言を吐けりと云如き様子にて、自ら我口に手を當て、後悔したる體を爲したり、是れ竟畢主座を侮つた者也。

○首座云知即得

(辨) 首座は飽迄迂なり、黄檗の打一擱に瞞せらるゝも知らず、後悔する程なれば可也と得意に道ふた、迂愚にして潜上なる、此首座は蓋し陳睦州にはあらざるべし、次位の首座ならん。(陳睦州は曾て臨濟を見立て、大愚に參せしめ、大に臨濟を後援せし明眼也)

○師在堂中睡黄檗下來見以柱杖打板頭一下

(辨) 黄檗は臨濟の睡るを來り見て、其睡りを驚かさん爲に板頭を打つ事一下した。

○師舉頭見是黄檗却睡

(辨) 臨濟は醒めて是れ黄檗なる事を知て、又た睡る、太平無事也、師學共に大休歇の閑人なれば、何ぞ殊更に干戈を動かすを須ひんや。

○黄檗又打版頭一下

(辨) 臨濟が一度目醒めて、黄檗を見て取り合はず、又た睡るを見て、其無事に休歇したるを篤と肯ふて板頭を打つた、畢竟賞棒也。

○却往上間見首座坐禪乃云下間後生却坐禪汝這裏

妄想作什麼

(辨) 坐禪は道を得る爲也、臨濟の餘念もなく睡るは無事にして是れ貴人也、是れ坐禪せずして坐禪する者也、今首座は安禪默坐して能く力む、修道は全く妄想也、下間の後生(睡れる臨濟)に及ばざる事遠しと云也。

○首座云這老漢作什麼

(辨) 首座は折角坐禪するを妄想と云はれて、初心を改めず不審に思ひ、這の老漢何を云はるゝぞと云ふた。

○黃檗打板頭一下便出去

(辨) 首座の短所を決定して板頭を打た、罰棒なり。

○後馮山問仰山黃檗入僧堂意作麼生仰山云兩彩一賽

(辨) 黃檗が臨濟を打ち首座をも打つ所は一樣也、然れども賞と罰との大差ある所は兩彩也。

○一日普請次師在後行黃檗回頭見師空手乃問鑊頭在什麼處師云有一人將去了也

(辨) 黃檗も臨濟も、即今普請に出る所なれば、鑊の所在を黃檗が臨濟に問た、臨濟は只今一人が將ち去つたと答へたのみにて、極めて無事也。

○黃檗云近前來共汝商量箇事

(辨) 根本上に何の商量すべきぞ、黃檗は強て無事に事を生せし者也。

○師便近前

(辨) 黃檗が近前來と云はれたれば、臨濟は只近前した、然れども尋常人の如く、語に隨て轉するにあらず、一步步充分に機用を含む也。

○黃檗豎起鑊頭云祇這箇天下人拈掇不起

(辨) 黃檗は自負せる様に云、這箇とは鑊を指す如きも、實は這箇一大事因縁を云也、這箇の者をば天下の人が拈掇する事能はず、我は如此拈掇自在也と、鑊頭を豎起して示すは自負する也、態と如く是自負して臨濟が何と働かかを試る也。

○師就手掣得豎起云爲什麼却在某甲手裡

(辨) 臨濟は黃檗手中の鑊を奪ひ取り、天下の人の拈掇する能はぬ程の鑊が、何故即今某甲の手中に在りやと、逆捻ちに捻ち込んだ。

○黃檗云今日大有人普請便歸院

(辨) 臨濟の働く機用が内心に働く所と、黃檗の心が能く契ひ、暗合する所二人にして一心也、茲に普請と云も、佛法建立の爲也、臨濟の如く能く一人にても、佛法建立する者あれば、一人にて大に普請成就した者ぞと云て、普請を罷めて歸る也。

○後馮山問仰山鑊頭在黃檗手裡爲什麼却被臨濟奪却仰山云賊是小人智過君子

(辨) 賊が盜を働く巧妙は君子も及ばざる也、大小大の黃檗も臨濟の智慧の勝れたる故に、鑊を脱却